

鉄血のプリンセスコネ クト！Re:Dive

モンターク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

またまた転生してきたオルガ・イツカ

そこで出会った新たな仲間達とギルドを結成し、再び絆を育んでいく……。

「君と紡がれる鉄華の物語」

この小説は混ぜすぎた混沌さんによりニコニコ動画で投稿されている鉄血のプリンセスコネクトを原作とした機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズとプリンセスコネクト! Re: Diveのクロスオーバー小説です。

初見で全然OKですが、動画版を事前に視聴しておくことを推奨します。とは

言いましたがだいぶオリジナルが強くなったので見たら驚くかも。

原点回帰のファンタジー異世界オルガを意識してちまちまと不定期に投稿する予定です。よろしくおねがいします。

追記

動画版とはかなり差異ができましたが一応大筋自体は変わりません。

動画版↓<https://www.nicovideo.jp/series/12>
3379

※作者様から許可及び事前監修は頂いております。

Season1 完結しました。

Season2 連載開始しました。

1期とは違い全話というわけじゃなくてメインの描写を拡充する方針なのでところどころカットします。すみません

目次

Menu 1・冒険の始まり　く夕焼け空
にきのこのソテーく

前編

1

後編

19

Menu 2　きまぐれ猫の悪戯　く黄金
色のポカポカおにぎりく

前編

34

後編

50

Menu 3　美食のフロンティア　く隠
し味に天上の果実を添えてく

前編

73

後編

86

Menu 4　ようこそ美食殿　く宵のと
ばりにビーフシチューく・

前編

102

後編

114

Menu 5　愛情たっぷりポリッジ　く
トワイライトな運命をのせてく

前編

131

後編

141

Menu 5・5　悩み多き猫と悪魔を操
る少年

悪魔を尾行する猫

151

農業の本

158

眼帯銀髪少女とツンツン猫娘

162

Menu 6 旅立ちの調べくぼっちも動

き出す?ゝ

美食殿始動です! | 167

アグニカ仮面、襲来 | 182

Menu 7 闇穿つ光

シヤドウ達の調べ | 193

光と 闇 (シヤドウ) | 211

Menu 7. 5 BB団ものがたり

いいお天気ですね! | 228

命がけの友達作り | 237

守られるだけじゃいられない | 247

Menu 8 クエスト?

リトルでリリカルな | 255

振り回されて | 269

Menu 9 海です!

イカなのかタコなのか: | 288

Memu 10 プリンに振り回される

プリンにしてやるの!! | 306

Menu 11 消失

姉と妹?? | 323

Menu 12 裏と表

皆のために! | 347

暗闇 | 360

Menu 13 忘れ去られた姫

ロストプリンセス | 372

Menu 13. 5 こぼれ話

過去と今、そして未来	393
こぼれ話 ミカの過去	398
Season 2 Menu 2 苦悩	
キャルside	402

Menu 1・冒険の始まり

夕焼け空にきのこのソテー

前編

「…………ぐっ…!？」

俺はあるところで目が覚めた。

そこはどこか幻想的な空間…文字通りの青い空が目一杯映るくらい綺麗なものだ。

まあこういう空間を見るのは慣れたがよ……。

最初の時はそんな空間にこたつとかがあつたような…。

そこではポロポロの服や花びらなどを身にまとった女が空中に映し出された計器かなんかの操作をしていた。

「ごめん、起こしちゃった？まだ寝ててもいいわよ。作業に集中したいし」

この空間、そしてそこにいる唯一の人。

どうやらこいつがこの世界の神様かなんからしいが……。

「待ってくれ。あんた、誰なんだよ」

そう俺が質問するとなんかの作業を止めて、俺のほうに目線を向ける。

「まあ、そう聞いてくるのが普通よね。私は……まあ、アメスとでも名乗っておくわ」

「あ、ああ……だが、俺がここにいてるってことは、また俺は転生したってことで差し支えねえよな？」

「ええ、そういうことになるわね。オルガ・イツカ」

やっぱりな……。

俺はあることで死んで、転生ってのをした。

そして俺はその転生した世界からも更に転生して……を繰り返すことになった。

辿り着く場所ってのを探すためにな……。

今回もどうやらその転生できたってことだが……ん？

「アメスって言ったか、なんで俺の名前を知ってやがる。まだ俺は名乗ってねえぞ？」

「あなたが眠っている間にあなたの記憶を色々と拝見させてもらったからよ。しかし、あなた、壮絶な人生を送っているわね。今まで見たこともないくらい」

「ああ、まあ……」

転生する前のあの世界での出来事も色々とおった。

だが俺は色々としくじつままって……後悔してもしきれないほどのな。

今思えば、他にも色々とできたかもしれないねえが、後の祭りでしかならねえ。

もちろん転生した後も色々あったが、前に比べれば随分マシなことばかりだ。

「転生したその後も色々あったみたいだし……でも、まさかこの世界に来るなんて本当に物好きね」

「物好き？ どういう意味だそれ」

「まんまの意味よ。私も最初は驚いたんだから」

まあ、転生を繰り返すやつなんて滅多にいねえよな……

「そういや、俺以外にも来てんのか？ ミカとかマクギリスとか」

「そこまではわからないわ。私はまだ自己修復が終わっていないから、現実を精密に観測するのは難しいし。でも干渉の反応は探知したから多分いるんじゃない？」

わかんねえのか……。

まあ、いるかもしれないとわかっただけまだマシだがよ…。

「で、あんたには頼みたいことがあるの」

「なんだ？ 魔王とかを倒せとか言うんじゃないやねえよな？」

「違うわ。こいつのことよ」

アメスが指差したのはポッドみたいなので安らかに眠っている男だ。

人畜無害つてのがそのままではまるかのように棘もない。

いわば「普通の青年」ってやつだ。

「あんたにこいつの補助つてのを頼みたいのよ。こいついろいろとあつていわゆる記憶喪失で何も知らない男の子同然でね。一応現実でのガイド役はコツコロたんに頼んであるんだけど、それでも心配だし。かなり経験豊富なあんたならこいつを導くのも可能でしょ？」

何も知らねえ男の子……

俺と同じ転生者か……？

「ちなみにこいつはあんたみたいなの転生者じゃないわ。まあいろいろとあつたことはあんたとあんまり変わらないかも知れないけど」
なんだよ……。

しかし……サポートつてのをやれつてことか？

「まあ、やれねえことはねえが……」

「あ、そろそろ時間切れね……」

「はっ。」

おい、まだOKって言つてねえぞ!?

待てよ……待てつて……!

「じゃあ頼んだわね」

「待ってくれ！待ってって言うてるだろう？」

俺の制止は届かず、そのまま一面は光に包まれた。

俺の意識もまたピタッと途切れた。

……………だが、導くか……………。

俺にできるのか？んなこと…。

まあ、頼まれた以上、やるしかねえけどよ。

「始めちよろちよろ中ばっば…」

「……………ん？」

そしてその次に目が覚めた時は子守唄のようなものが聞こえてきた。

もともと俺のほうへ聞かせているのではなく、あっちの男のほうに聞かせているようであった。

俺が起き上がるのと同時にあっちの男も起き上がってきた。

そしてその唄を歌っていたのは小さい女の子だった。

「あんた一体……………」

「お二人共、お怪我はないようでごさいますね。わたくしは偉大なるアメス様によつて派遣されたガイド役…名前前は、コツコロと申します」

なるほどな。

こいつがアメスが言うガイド役ってやつか……。

よく見るとアトラやビスケットの双子よりも小さく見える。

「主様をお守りし、おはようからおやすみまで……揺り籠から棺桶まで、誠心誠意お世話するのがわたくしの役目でございます」

コッコロがそう話す中、あいつはコッコロのほうを向いてキョトンとした表情のままだ。

まだ何があったのかもわかってねえらしい。

「おや、よろしければお名前をお聞かせ願いますか？」

あいつが考える仕草を見ると、ポソッと言葉が出る。

「ユウキ……僕の名はユウキ……」

どうやらこいつの名前はユウキというらしい。

まあ至って普通の名前だ。

そしてあいつも名乗ったなら俺も行くしかねえ。

「俺はあ、こいつのサポート役の……オルガ・イツカだぞお……」

「よかった……アメス様の託宣通りで間違いないようです」

そうコッコロが話していると、コッコロは横で竹筒で飯を作っていたようで、それを

使っておにぎりつてのを作り始める。

「あんた…俺たちの為に……」

転生直後だからというのものもあるかもしれないねえが、今の俺は結構腹が減っていた。

当然ユウキも腹の音がなつて、コツコロから渡されたおにぎりを美味しそうに食っている。

飯にありつけるじゃねえか……！と俺は思ったが、そう簡単にうまくいくはずもねえ。

ここは見る限りの原っぱだ。他に人もいねえ。

そしてここが今までの世界のようなファンタジーなら……当然――

「グルルルルッ！」

食いつくやつもいるというわけだ。

どうやらこの匂いを嗅ぎつけて……いや、この感じはこいつ……「ユウキ」を狙って狼のモンスターが集まってきたらしい。

しかも普通の狼とは違い、目ん玉も舌も飛び出てるいかにもヤバそうなやつだ。

「やはり出てきましたか……」

コツコロは得物らしき槍……いや、杖か……？

ともかく、そういうやつを構える。

「主さま、今のわたくし達に見合った丁度いい相手です。経験を積んでいけば主様本来の力を取り戻し、向かうところ敵なしとなりましょう。わたくしも主様に降りかかる火の粉は払って参ります」

本来の力？

どうやらこいつは何かを持っているらしい。

「オルガさまも戦いはよろしいでしょうか？」

「ああ、まあできなくはねえ」

俺が持っているのはまあいつものミカの銃と……おそらくはいつもの「アレ」——「希望の花」ってやつだ。

簡単に言うとうとう死んでもすぐに生き返ることができるやつだ。銃で撃たれても、剣で刺されても、ダインスレイヴで遠距離から狙撃されてもだ。

しかもどうやつても俺自身が人間の形を崩すことはなく、形を保ったまま死んで蘇生される。

恐らくは体が切断されても普通に再生されるだろう。

死なねえってことだから一見デメリット無しに見えるが、一回死ぬほど痛みを食らうのは変わらねえから結構辛いことには変わりねえ。

ちなみに俺はもう一つ能力があるんだが、それは今の世界じゃ使うことはねえ……

「あいつ」がいる世界ではねえし、あいつが居ねえ時に無闇に使えば時空が歪んじゃうらしいからよ……。

「……………」

おにぎりを食べ終わったユウキは持っていた剣を構える。

剣の構えはへっぴり腰というやつじゃなくて、しっかりしている。

「…いざ、参りましょう！」

「いくぞお前ら！」

「うんっ」

そしてユウキはその狼に突貫する。

気合は十分……こいつはいけるんじゃないかねえのか…？

「やっちゃまえ！ユウキイ!!」

「はああああああっ！」

——だが、ユウキがその狼に接近するより前に狼は高速でユウキに突進をかました。

「はあっ!?!」

ユウキはその狼二匹に近づぐこともできず、そのまま何回か突進を食らった後、そのまま倒れ、狼に体を引きずられていった。

「主さま!?!」

「なにやってんだアアアアアア！」

その後、なんとかウウキを狼から引き離し、態勢を立て直す。狼は依然俺たちを狙っていやがる……

「仕方ねえ……」

白兵戦は慣れてねえが……やるしかねえ！

「俺がいくぞおー！」

と、俺が駆け出したその時、狼の突進が俺に炸裂する。

「ぐっ!!」

……そういや、忘れてた。

俺はあの「希望の花」がある限りはしなねえ……だがその分、耐久力が常人より殆どねえんだ。

ウウキでも何発も耐えることができたそのやつを俺は一撃も耐えることができずに……死ぬ。

「ぐおおおおおおおおおおおっ!!」

俺は最後の力を振り絞って銃を狼に発砲する。

何発かは狼に当たり、致命傷にはならなかったが、それで狼はなんとか引いてくれた。

「なんだよ……結構あたんじゃねえか……」

「オルガ様!？」

「なんて声……出してやがる……コッコロオ……」

俺は……鉄華団団長……オルガ・イツカだぞお……こんくれえなんてこたねえ……!

「だからよ……止まるんじやねえぞ……」

……これがこの世界で初めての「希望の花」の発動だった。

やっぱりこれには相変わらず慣れねえ……。

「ここへ来て初っ端から色々とおつたが、なんとかコッコロに案内されて俺達は王都「ランドソル」ってところに来た。

……いかにも異世界って感じなところだな。

言うなれば雰囲気はカズマ達のところのアクセルの街に近え感じた。

だがここは王都……つまり首都ってことだから、あの街より結構発展しているみてえだ。

「付きましたね……でも、主さまのお怪我はなくてよかったです」

ユウキは結構狼に引きずられ……遊ばれていたというのが正しいが、それでもこいつは大きな怪我はねえ。

よほど頑丈らしい。

それに比べて俺は……。

「オルガさまは……本当に大丈夫なのでしょうか……？」

「ああ、気にしなくていいぞ。俺は死んでもすぐに生き返る能力を持つてる。だがその代わりこいつよりも耐えれねえ弱つちいミソツカスだがよ……」

「そ、そうなのですか……アメスさまが使わしてくださったサポート役ですから、尋常ではないとは思いましたが……」

「ああ……」

俺とコツコロがそう話している内に、ユウキは周りの人が気になっちまったようで、指を指していた

「……しっぽ……？」

「おお、確かにしっぽだな」

「あの方はビースト族でございますね。この世界にはヒューマンやエルフ族、ビースト族に魔族など。様々な種族が暮らしております。ちなみにわたくしはエルフ族です」

コツコロは自分のそのとんがった耳を指しながらも説明している。

やはりここも異種族は多いんだな……どこかとは違って特定の種族が迫害されているような雰囲気じゃねえようだし、いたって平和だ。

しかしこういう種の違いつてやつは元いた世界じゃ考えられなかったが、もう慣れちまったな……。

まああの世界じゃ同じ人間同士で差別し合ってたしよ……。

そしてコッコロは珍しそうにその周辺の町並みを見回している。

「どうしたんだ？なんか珍しいのか？」

「あ、すみません。つい物珍しくて……」

「なんだよ、見たことねえのか？」

「はい、わたくしの故郷はこのように発展しておりませんでしたので……え？」

「……あ？」

ふと気づくとユウキの姿が見えなくなっていた。

俺とコッコロで話しちまったせいでどっかにいつちまったじゃねえか……！

「主さま？」

コッコロが後ろを向くと、そこには匂いにつられて歩いているユウキの姿があった。

なんだよ……いるじゃねえか。ハラハラさせやがって。

そしてその匂いのもとを行くとそこにはクレープ屋があった。

どうやらユウキはこれを食べたいらしい。

「行って来いよ。俺はここで待つからよ」

「いいのですか?」

「ああ……少し休みたいしよ」

転生したばかりだからか、それで初っ端から「希望の花」しちまったせいか、急に疲れがどつときた。

俺はベンチに座り、コツコロとユウキのクレープを買う様子を遠くからみつ、ふと空を見上げる。

……しかし、確かに異世界なんだが、さつきからどうにも違和感的な何かがありやがる。

言い表せねえからもどかしいが、とにかく、変な感じだ。

まあ、単に思い過ぎだと思いたいが……俺はここに来てまだ数時間も経つちやいねえし、この世界についてまだよく知らねえしよ……。

「主さま!」

「あ?」

コツコロの慌てた声に気づき、俺はコツコロ達のほうへ顔を向ける。

そこではなんとユウキが金のコインをかじってる姿が見えた。

なにやってんだあああああああああああああ!?

「それは口に加えてはなりません!それは食べ物ではないので、ペってしてください!

「ぺってー！」

コッコロが慌ててそうユウキに伝えると、ユウキ文字通りぺつとしてそのコインを口から出す。

「おいおい、記憶喪失で言葉も喋れねえどころか金のことすらわからねえのか…？」

「昔の俺たち以下ってことかよ…?!？」

「はあっ…主さまは記憶を失っておいででしたね…。これはお金です。これと引き換えにして、お店などで商品を得たりできます。決して食べ物ではございません」

「なんつーか、本当に記憶のそのままが消えちまつてるのか…。」

「子供…いや、生まれたての赤ちゃんみてえなことになっていやがる…。」

「おわかりいただけただけでしょうか？」

「うんうん」

ユウキはそれを相槌で返すが、本当にわかったかは怪しい。

「たく…この先本当に大丈夫なのか…？」

その後、俺たちはまた別のベンチに座り、クレープを食うことにした。

いつの間にか時間は過ぎて夕暮れになっちまった。

「ま、正確に言えばコッコロとユウキは同じベンチに座り、俺はそこから少し離れた隣

のベンチに座ってるんだがよ。

「はむ……おいしい……」

「もぐもぐもぐ……」

「わたくし、このような食べ物初めて食しました。とても甘くて、このいちごのような」
「……………」

コツコロが食べてるのをユウキはクレープを食べながらも見て、にっこりと笑っていた。

それを見てコツコロは顔を赤くしていた。

へへっ、楽しそうじゃねえか……。

それに比べて俺は一人寂しく食ってるようなもんだ。

あの後いろいろと聞いては見たが、ミカはどこにいるかもまだわからねえ。もしかすればここには居ねえのかもしれない……。

「……………」

………そういや『あの時』の夕暮れもこんな感じだったな。

俺とミカのあの時も――

「あなた〜」

「おいおい離してくれよ〜」

「いやよ。絶対離さないわ♪」

「あ?」

感傷に浸りかけた時に遠くから変な声が聞こえてくる。

その方向を見ると、男と女：まあ、カップルってやつがなんかいろいろと絡みまくっていた。

どつかで聞いたが、いわゆる「リア充」ってやつらしい。

……ちなみに俺はそういうのに興味がないわけじゃねえ。

けどあの時の俺にはそんな余裕はなかった。ただ生きるために…進むために……しかなかった。

おまけにミカほど器用じゃねえしよ……。

こんな不器用なやつに惚れることなんてねえに決まってる。

転生しだしてから恋愛とかには全く縁はねえの言うまでもねえ。まあ、とつくに諦めはついてるから良いけどよ。

「……うめえ」

そのまま俺は静かにクレープを食っていた。

ま、今はんなこと考えてる場合じゃねえ、ここで地につけねえと……!

「……ん……」

少年——三日月・オーガスはある森の中で目を覚ます。

彼は元いた世界ではモビルスーツ「ガンダム・バルバトス」を操り、オルガの相棒。そして鉄華団の遊撃隊長として戦場で大暴れしたが、最期の戦いではダインスレイヴの遠距離斉射を喰らい、それでも交戦し続けたが限界を迎え、彼はバルバトスと阿頼耶識システムで繋がったままその生涯を終えた。

「……ん……」は……「また」かな」

三日月も転生にはすっかり慣れており、この状況を冷静に整理していた。

なお周りを見回すときのこが多く生え茂っている。

(俺がここにいるなら……オルガは近くにいるのかな?)

そして三日月はどこからともなく取り出した火星ヤシをかじりつつ、暫く森の中を探索するようであった。

「ププププ……プチ?」

小さな『きのこ』がその様子に気づきながらも……。

後編

次の日、俺たちは働きにでることにした。

まあ、寝てる最中に何回もユウキや俺を狼たちが狙ってくるからよ……おかげで俺は最低5回は死にしまった。

勘弁してくれよ……。このままじゃ俺以外の二人が確実に殺される。

だからさっさと宿に泊まれるくらいの金を稼ごうってことだ。

それで俺たちはギルド管理協会ってところの依頼募集の掲示板をあたることにした。

「ここですかね……でもよろしいのですか？働かれるということだ」

そのコツコロの問いにユウキはにっこりと肯定の意味で微笑む。

なお最初は赤ん坊なあいつに働かせるわけにもいかねえと思い、俺とコツコロだけで行こうとしたが、ユウキも自分から働きたいと示してきたので、一緒に働くことになった。

「どうしました？」

それでギルド管理協会の建物へ入っていくと、誰かから声をかけられた。

目の前には緑色の髪でメガネをしている女が現れた。あのフミタンに比べればどこ

かおっとりしているような感じだが。

「私がギルド管理協会の職員。カリンと申します」

「俺は……」

「わからないことがあつたら、遠慮なく聞いてくださいね」

……いつもの俺の挨拶が聞かれることもなく、そのままスルーされちゃった。

まあこういうのも慣れてるがよ……。

「こちらにお仕事募集の掲示板があると聞いたのですが……」

「はい、ご案内しますね」

カリンの案内ですぐにその掲示板が見えた。

その掲示板には一面びっしりと様々な依頼が貼られていた。

……しかし街も似てると思つたが、こういうところもカズマンところに似てる気がするな。

まあ色々と異世界がある以上、似てるやつが現れてもおかしくはねえからな。

「えーつと、討伐クエストに護衛クエスト……それにダンジョン探索……。どれも初心者の方にはお勧めしづらいですね」

「仮にやるとしても危険な賭けになつちまうか……」

基本こういうのは金額が高ければ高いほどいいもんだが、そういうのにはだいたい裏

がある。

俺は最悪死にまくってもいいが、コツコロやユウキはそうもいかねえ。

コツコロが蘇生魔法が使えるわけでもなさそうだしよ……。

そしてコツコロはある依頼の紙を手にとつてその内容を読み上げる。

「ランドソル周辺にドラゴンの目撃情報あり、財宝などに誘われたドラゴンは人的被害を及ぼすため討伐隊を求む……。わたくし達の手に追えるクエストではございませんね」

「あつ、これなんか良いと思いますよ」

悩む俺たちにカリンが出した依頼書は、きのこが載っている絵だった。

「採取クエストなんですが、ガド遺跡に群生するきのこを集めてほしいそうです。危険も少なそうですし、おすすめですよ」

「本当か？」

採取系のクエストか……なら魔物と直接対峙する必要もねえからとつとつときのこを集めて戻ればいい。

もちろん、魔物はあるだろうから警戒することには変わらねえが、討伐クエストよりは結構マシだ。

急にでけえカエルに食われたりする心配も少ねえ。

これならいけるぞお……!

「よろしくおねがいします!」

「よろしく頼みます」

つてことで俺たち最初のクエストは決まった。

初の仕事だ。氣い引き締めていくぞ!

そしてそのガド遺跡にやってきた俺達はきのこを探り始めた。

しかし本当にきのこだらけだな……目につくところ全部にありやがる。

まあ依頼の内容にはできる限り多めでと書いてあったから、その通りに多く集めることにした。

「……うっ」

「ん?どうしたんだ?」

そんな時にユウキはきのこでもねえ何かを見つけて、それをじつと見ていた。

俺がそこに駆け寄ると、何故か女が道の真ん中で倒れていた。

「大丈夫か、気分はどうだ!」

「うう……おなかペコペコ……」

俺の問いかけにぐーっと腹の音が鳴りつつ、ぼそぼそ。どうやら腹が減って行き倒れているらしい。

その証拠に俺たちが持ってきた飯を与えてみると、ガツガツと食い始めた。

「はむはむはむ……はむはむはむ……んーっ！」

俺たちはその光景をポカーンって感じで眺めていた。

本当によく食ってやがる……一応三人分だぞ、それ。

「はむ……んつまーいー……はんは命のエネルギー！いやあ、助かつちやいました。見ず知らずの私に美味しいごはんを恵んでくれるなんて、一生恩に着ます！」

そいつは手を合わせつつも俺たちに感謝しているようだった。

飯出してただけでオーバーじゃねえのか……？

「あの……このようなところでどうしたのですか？」

「はい。実は色々とあつて旅をしていたのですが、久しぶりに故郷のランドソルに帰ろうとしていたらお腹ペコペコになりすぎちゃって」

「んで、行き倒れちゃった……と？」

「はい。やばいですね☆……」

戦ってる最中に腹減って動けなくなったやつはまあ見たことはあるが……これはそいつ以上だな……。

「ところで、貴方達は…」

「わたくし達はきのこを採りに…」

「おー!!美味しそうですね☆」

きのこを見た瞬間、目をものすごく光らせていた。

本当に食べ物全般が好きらしい。

「よければどうぞ。焚き火で焼いただけですが…」

「本当ですか!?あなた達は神様ですね!」

神様って……まあ本当の神様は結構碌でもねえぞ?

最初の時はダインスレイヴは落としてきたやつで、カズマの時の女神…アクアは物凄

くトラブルメーカーだったしよ……。

まあ、今となつては懐かしいがよ……。

そんできのこをもぐもぐとこいつが食っている間にコツコロが俺たちの簡単に自己

紹介をする。

まあ本当は「俺は…」でやりたがったが、それでまたできなかつたがよ…。

「はむはむはむ……なるほど。ユウキ君にコツコロちゃんとオルガ君って言うんですか」

そんなふうになっていると、後ろからなんかの重い足音が聞こえてきた。

「キィー!」

それに気になり、俺達は一斉に振り向くとなんとでけえきのこ……いやでけえきのこの魔物が俺たちのほうに威嚇してきやがった。

「なんなんだよありや!」

そしてそのでけえきのこは俺たちを襲おうとする。

「ま、待ってくれ!ぐっ!」

寸前まできのこを食つてたペコリーヌやコツコロ、ユウキはなんとか避けることができたが、俺逃げ遅れて「希望の花」を発動させた。

「オルガ君、大丈夫ですか?」

「こんくれえなんてこたあねえ……!」

生き返った後、俺はなんとかコツコロ達のところへ退避した。

結構痛えじゃねえかよ……。

「たぶん、私を狙ってきたんです。3人を巻き込みましたね……ごめんなさい」

こいつがそう言っている内に、ユウキは前に出て剣を構える。

お前……守りてえのはわかるが弱いのに、あんま前に入るんじゃねえぞ……!」

仕方ねえ、俺も前に入るぞお……

「え?……ユウキ君とオルガ君?」

「えっと、お腹ペコペコのペコリーヌ様…と仮にお呼びしますね」

「そういう俺たちはこいつの名前聞いてねえな。」

「でもコツコロのペコリーヌってがしっくり来るな。」

「俺もそう呼ぶとするか……。」

「乗るかかった船です。共に窮地を脱しましょう」

「おや？ペコリーヌって私ですか？かわいいあだ名をつけられちゃいました。やばいです☆」

「コツコロも杖を構える。」

「確かに乗るかかった船だ。ここで降りることは逃げることになっちゃう。」

「中途半端なもの気分が悪りいからな。」

「でも、あなた達の気持ち。嬉しいですよ」

「そのペコリーヌの声と同時にきのこたちは一斉に俺たちを襲いにかかってきた。」

「だがペコリーヌはそんなのを物ともせず、体術の要領できのこの突撃を流し、更にきのこの群の頭を踏みつけながら上に大きく飛び上がり——」

「これは……！」

「ペコリーヌの体全体…いや、服が光り輝き、その力で更に拳を握りしめてきのこの群れに叩きつけた。」

「ギャアアアアアッ！」

「グオオオオオッ！」

これで結構な数のきのこを蹴散らしちゃった。

すげえよ……ペコリーヌは……。

それに比べてこっちは——

「やあああああッ！」

「ぐっ!？」

俺とユウキはコツコロの魔法ですばやさが上がったが、きのこには全く太刀打ちできずにむしろ一方的にやられちゃった。

俺はまた「希望の花」発動しちゃったしよ。

「主さま、オルガさ……まつ!？」

「つてえ……こ、コツコロオ!？」

そして後ろに回り込まれてたきのこにコツコロが捕まっちゃった。

「コツコロちゃん!？」

ペコリーヌは他のきのこの相手で手一杯で、俺も希望の花ですぐに立ち直れねえ……

!

「……あッ！」

「マイタケ……」

そして別のきのこが槍でコッコロを刺そうとする。

だがそこはなんとか起き上がったユウキがそれを剣で受け止めた。

だが、ユウキはあの力に耐えられるほどのものは持つてねえ……！

他のきのこも着々とユウキのことを狙つていやがる……！

「ぐっ……！！」

クソツ、こんなところで……化けきのこなんかによ……！！

こんなところじゃ……転生してきたばかりで仲間を失うわけにはいかねえつてのに

……！！

その瞬間、俺は今いるはずもない相棒が頭に思い浮かぶ。

「こんなところじゃ……終われねえ……！！」

それでいつの間にかその名を――

「ミカア!!!」

いつの間にか叫んでいた。

その次の瞬間、目の前で土煙が舞い上がる。

そしてその土煙の中から現れたのは俺がよく知るモビルスーツ。

俺たちの世界での厄祭戦の際に対モビルアーマー用に作られたガンダム・フレームの中の一体「ガンダム・バルバトス」だった。

そしてそのバルバトスはユウキを狙った別のきのこをメイスを振りかざして潰しちまった。

このメイス捌き……間違いないねえ……！

「ミカ……遅えぞ」

「ごめん。でも間に合ったでしょ？」

「ああ、全くな……頼めるか？ミカ」

「うん。丁度いい肩慣らしになるし」

ミカが来てくれたならもう安心だが、まだ数は多い……。

そして今のバルバトスの形態は一番最初のやつ……恐らく形態変化できるだろうからそれはあんま関係ねえがどちらにしろ一度に大勢の敵を殲滅できる装備はルプスレクスにもねえ。ちまちま潰すのは骨が折れるな……。

だが今度はきのこの攻撃を耐えていたユウキのやつが自分の周りに魔法陣のような

ものを展開した。

「はあああああああああああつー！」

「いっつは……っ」

その魔法陣の光と同時に、ペコリーヌ…そしてミカのバルバトスの周りに光が舞う。

そして俺やコッコロもだ。

力が急に湧き上がる感じもしてきた。

「これは……」

ペコリーヌはその拳で相手していたきのこを吹き飛ばし、次にコッコロを拘束していたきのこをコッコロへの拘束を解くのと同時に吹き飛ばした。

ミカもミカで湧き上がってくるきのこ達を凄まじい勢いで消し去っていく。

すげえ強くなってる感じだ。

「…アメスさまの御神託通り……なんと神々しい……。」

確かにユウキの輝きは更に強くなってきやがる……物凄く眩しい。

「これこそ、主さまだけの力……プリンセスナイトの証……！」

「力がドンドンみなぎってきますよー！もしかして、ユウキ君のおかげですか？」

「うん、俺もなんか力が来てる」

「はい。主さまはこの『プリンセスナイト』の力により他者の能力を大きく引き出すことが可能になるんです……」

なるほどな……それがユウキの持つ力ってやつか……。

見る限り本人は強くならねえようだが、こんなミソツカスの俺も強化されるほどの結構なものらしい。

「しかしあなた様は……大きな巨人……ですか？」

コッコロも流石にバルバトスには驚いている。

まあこの世界にはロボットとかも居なさそうだし、当然だが。

「三日月・オーガス……です」

「こいつは俺の相棒だ。なんつーか……今は巨人を操るために術士つーのか……とにかく、俺達の味方だ」

「なるほど……オルガ様の……」

今は説明する余裕なんかねえ……このきのこの群れをぶっ倒さねえとな……！

「では参りましょう……風の精霊よ、力を！」

コッコロは精霊を出し、きのこ達の目くらましを行う。

「いくぞ……バルバトス！」

「いつちやいますよー!!」

ペコリーヌはどこからか拾ってきた古い剣を構え、ミカもメイスを構える。

「やつちまえ! ペコリーヌ! ミカア!」

「はあああああつ!!!」

「これなら……殺しきれる……!」

ペコリーヌとミカは同時に飛び上がり――

「プリンセスストライク!!!」

「吹き飛ば……!」

一気にその得物をきのか達へ叩きつけた。

それによりきのか達は一気に吹き飛ば……ええ?

さて、俺はまだ退避してねえぞ。さてよ待てつて!

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

「ぐおおおおおおおおおおおつ!」

俺は二人の全力全開のその攻撃の衝撃をまともに喰らい――再び「希望の花」を咲かせた。

「だからよ……止まるんじゃねえぞ……」

Menu 2 きまぐれ猫の悪戯
く黄金色のポカポカお
にぎりく

前編

「あんたはいかないの？」

しゃがんで灰色の猫に話しかける一人の少女。その少女は猫耳としっぽを生やしており、猫の獣人^{ビースト}族のようであつた

その猫は近くに色は違えど同じ猫がいるにも関わらず、そこへ行こうとしなかつた。

「にゃー」

「そうよね。仲間なんて……一人のほうが気楽よね」

そう呟いた後、猫の様子を見つつ、立ち上がった。

「……いかなくちや」

歩き出したその少女へ猫はただただ見つめていた。

「ふんっ！」

「お、良いじゃねえか」

あの後、俺達はきのこ採取の報酬を貰うことができ、無事に宿を取ることができた。そこでその次の日の朝、俺とミカはユウキの特訓に付き合っている。

宿屋前にある木に丸太を付けたロープをくくりつけ、いわゆる剣術の修行つてやつだ。

まあ剣なんか俺にとつては専門外だが、ユウキにはそうも言つてられねえ。

銃を持たせて撃たせるわけにもいかねえし……。

ちなみに、あん時ユウキが出していた魔法みてえなやつはあの後もう一回やつてくれと頼んだが、発動することはなかった。

どうやらあの時は「火事場の馬鹿力」という言葉通りにいつの間にかできていたものらしい。

ユウキの奥底には力はあるが、その力の引き出し法がいまいちわからない……とミカは推測していた。

だからとりあえず、生身での戦いをみている。

強くなればいずれその力をいつも使えるようになるかもしれねえからだ。

「ミカ、どう思うっ？」

「良いと思うよ。俺がバルバトスの時に使う太刀と同じ風を考えていいかはわからない

けど……」

「だろうな……」

ちなみにこの特訓はユウキのほうから片言やら身振り手振りで志願してきた。

どうやら今の状況はユウキにとつてもあまり良くないらしい……。

まあ、守られるばかりじゃいられねえからな……俺も守るのは仕事だが、守りきれねえ時がいつか来るかもしれねえしよ……。

「ふんっ！」

「よし、もっぺんやってくれるか？」

「ふんっ！」

そして、ユウキが打ったその丸太は――

「ぐおっ!？」

「え？」

ユウキに直撃した後、何故か俺の方向にそれて、側頭部に勢いよくぶつかった。

「ぐっ!？」

これが朝一番の希望の花の発動だった。

朝っぱらから死ぬのか俺は……。

「オルガ、こんなところで寝たら風邪引くよ」

「そういうことじゃねえぞ……」

ちなみにミカはすっかりこの希望の花に慣れちまったからか、突っ込んでくることは一切ねえ……。

むしろミカの銃撃で俺が死ぬことが多い気がするしよ……。

なおユウキは丸太の直撃にも耐え、再び練習を始めていた。

やっぱり俺より耐久性がある……すげえよ、ユウキは……。

その後、俺達4人は朝食を取っている。

久しぶりの結構まともな食事だ。

サラダにパンとソーセージに目玉焼き……いかにも朝食つてやつだ。

「きのこの報酬が多くて、助かりました」

「きのこ、サイコー」

（いつかは安全な仕事だけで生計を立てさせたいが……まあそれでも当分は先になるな）

コツコロとユウキの話聞きつつ、俺とミカも飯を食べる。

ちなみにミカは元の世界じゃあることで右半身が動かなくなっちゃって、俺が連れて行かねえといけねえくらいになっちゃったが……今はそんなことはなく、普通に左も右

も使つて飯を食つている。

なお異世界に飛んだ当初のあるモビルアーマーとの戦いでもまた付随になつちまつたが、あん時は「リカバリー」の魔法で治つちまつたんだっけ……。

まああれ以降はモビルアーマーとの戦いでもなるべくリミッターを解除しねえようにはして、今に至るんだがよ……。

「そういうえば……ペコリーヌさまは大丈夫だったのでしょうか？」

コツコロのセリフと共に、俺は昨日の光景を思い出す。

あの後、ペコリーヌはコツコロが持っていたきのこをそのまま生で食つちまつて、まるで酒を飲んで酔うのようにペロペロになつていた。まあきのこは生食しちやいけねえし、あれで済んだのが奇跡なのかもしれないが……。

その後、ペコリーヌとはランドソルの広場でペロペロのまま別れちまつたが……。

「大丈夫だと思う。あいつ強いし」

「そうですね。三日月さま……」

ミカの言う通り、確かに強え。俺やユウキよりは確実にな。

変な連中が居ても撃退はできるだろう。

特に騒ぎの噂も効かねえし、まあ大丈夫だと思うけどな。

その後俺達は再び依頼を探そうと管理協会や街の掲示板をあたつている。

きのこの金はまだあるが、金はあるに越したことはない。

「とりあえず、目先の仕事が決まらないことには話にならねえ……」

「はい、いい仕事が見つかるの良いのですが……」

「何でも良いよ？オルガが決めたことなら」

ミカは火星ヤシを食いつつ、掲示板の紙を見ていた。

まあミカがいるなら討伐なんか楽勝だが……

「ミカは良いかもしれねえが、あの赤ちゃんみてえなユウキには無理させられねえ」

ユウキが一番危ねえ。

へっぽこなのは俺もだが、俺とは違い生き返る能力はねえし……。

「「うおおおおおー！」」

「ん？」

「あ？」

そう話していると広場の方から歓声が聞こえてくる。

どうやら何かイベントをやっているらしい。

「邪魔するぜえ」

気になった俺達は人並みを避けて前に出る。

「あ?」

そしてそこでは大食い大会をやっていたんだが……見たことがあるやつが、物凄く食べていた。

「ぶはーっ!おいしい!!おかわりくださいーい!」

「ペコリーヌさま!」

コッコロの言う通り、ペコリーヌが皿を舐めあげるように食っておかわりを要求していた。

他の参加者はすでに伸びている上に、ペコリーヌの横に積み上がっていた皿は他の参加者より結構な数があった。

「おっ、コッコロちゃんにユウキ君とオルガ君と三日月君!おいつす☆」

そして当然ながら俺達のほうに気づいたようで、すぐにペコリーヌは駆け寄ってきた。

「昨日は街まで送ってくれてありがとうございました。お陰で起きたらスッキリ、ごはんもサイコー!」

「そ、そいつは良かったな……」

「ふーん……」

いくらなんでも食いすぎじゃねえのか……？

あんな大食い、今までの世界でもあんな見たことねえぞ……？

一方のミカも少し驚いている。

「ヤバいですね☆」

確かにやべえぞお……

そしてそう話している内にある男の二人組がこつちを見ているのをペコリーヌが気づいた

「ああつ、脚気の人！」

「「ぎくーっ!」」

アフロのような髪の方と金髪のリーゼントのような男はペコリーヌに気づかれた途端にすぐに逃げ出していった。

「待つてくださーい！お薬！お薬ありますよー！」

「ペコリーヌさま!」

ペコリーヌはその男たちを追いかけていき、コツコロやユウキもそれを追いかける。

「待ちやがれ！」

しかたねえ……俺達もいくぞお……と思ったがミカは何かを警戒しているようで、キョロキョロと当たりを見つつもミカは立ち止まったままだった。

「どうした？ミカ？」

「なんか、誰か俺達のこと見てる」

「あ？こんな人が多いんだから当たり前前だろ？さっさと行くぞ」

「……うん」

俺達はミカを引つ張つて一足遅れてコッココを追いかけていった。

ランドソルの外壁でペコリーヌ達に追いついたが、どうやらあの男たちを見失ったよう
うで、ペコリーヌはキョロキョロとあたりを見回していた。

「また見失つてしまいました……」

「あのお二人はお知り合いなのですか？」

「はい。あの人は脚気という病気で、私はそのお薬を預かっているんです」

「脚気？ですが、あの方病人には……」

脚気つてのは専門じゃねえから詳しくは知らねえが、足のしびれとかむくみが起きる
んじやなかったか？

そしてあの二人は元気に走つてたし、そこおかしくねえか……？と突つ込もうとした
が、その瞬間に他から複数の悲鳴が聞こえてくる。

「きゃあああああつ！」

「あ?」

そこには魔物が3体も現れた

豚とかイノシシが進化したようなやつで、棍棒も持っていやがる。

「「ピギヤアアアアアツ!」」

「こんな人里近くに……どうして……」

「街のみんなに被害が出ちゃいますね……ここは私に……!」

「ペコリーヌさま!」

「朝ごはんたくさん頂いたので、元気百倍ですよ!」

確かにこいつは強いが流石に3体も相手はキツいだろう。

なら——!

「ミカ、やってくれるか!」

「ああ、邪魔するやつは全部敵だ。あの魔物は「普通じゃない」みたいだし」

「普通じゃねえ? どういうことだ」

「なんとなく。じゃあ」

ミカはなんかに気づいているようだが、俺にはいまいちわからねえ……人里近くに現れるから普通じゃねえってことか? まあいい。

ミカはバルバトスを身に纏い、戦闘態勢に入った。

ちなみにミカはこの世界ではバルバトスをMSサイズに具現化させることができると同時に、人型サイズとして出すこともできるようなったみてえで、今のバルバトスはミカの体格くらい小さいものになっていた。

ちなみに俺も場合によれば獅電を使えたんだが……この世界じゃ出すことはできねえぞ……。

「オルガ君、三日月君？」

「流石にペコリーヌだけに任せちゃうわけにはいかねえからよ……いくぞ!!」

「ありがとうございます！おりゃー!!」

そしてペコリーヌ、ミカと俺はすぐさま魔物に攻撃をする。

ミカはルプスの時のツインメイスを使い、すぐさま魔物を弾き飛ばした。

「すげえよ……ミカは……」

一方の俺は——

「ぐっ!!ぐおおおおおおおっ!!」

棍棒を喰らい、「希望の花」を発動させて銃を発砲し、ヘッドショットを食らわせて魔物を黙らせた。

クソツ、俺も獅電さえ使えれば……!!

そして残るペコリーヌは魔物が振り上げてきた棍棒を片手で止め——

「この街は…私が守ります！」

ティアラを光らせて、右手でその魔物に強烈な腹パンを食らわせる。

当然ながらそれで魔物は吹き飛び、後ろにあつた廃屋に叩きつけられた。

「ふう……」

それで人通りの敵は倒せたんだが……ペコリーヌが叩きつけたその廃屋の近くのほうでなんかの気配を感じた。

俺達がそこに駆け寄るとぶつ飛ばした魔物の横にある少女が倒れていた。

猫耳、しっぽと……どうやら猫の獣人^{ビースト}族だった。

「これは……」

「おい、大丈夫か!？」

「はじめちよろちよろ…なかばつぱ」

「あ、目を覚ましましたよ!」

コツコロがまたあの唄を歌っているときにこの少女は目を覚ました。

なおコツコロとユウキは近くで焚き火をし、ある飯を作っている。

「おお、起きたか」

「大丈夫ですか?どこか痛くないですか?気持ち悪いとか無いですか?」

「ちよ、ち、近い！」

倒れていたが、見る限りは大丈夫そうだ。

「良かった。その様子だとお怪我はないようでごじますね」

「うん」

コツコロがそう言い、ユウキが相槌を打つ。

「なによ、あんた達」

「わたくしはコツコロと申します。こちらは主のユウキ様…それと——」

コツコロから振られ、まあ言うまでもなく俺は「いつもの」行動に走った。

「俺は…鉄華団団長…オルガ・イツカだぞお…」

「三日月・オーガス…です」

「はい。そしてそちらの方はペコリーヌ様です」

「ペコリーヌ？」

ペコリーヌはそいつに引き続き笑顔を向けている。

「魔物が暴れておりまして、近くにあなた様が倒れておりましたので……」

「お腹空いているんじゃないですか？炊きたてですよ、美味しいですよ☆」

先程この少女が寝ている間に炊いた炊き込みご飯をペコリーヌがそいつにあげようとする。

「…あつーっ!!ちよつと!突然人の口に熱々のご飯を押し込むなんてどういうことよ!」

まあ確かに熱々だな。猫に熱いものは駄目とか…いや、

…そいつがそんなことを言ってるのとミカが火星ヤシを持って、そいつに差し出す。

「熱くないのなら…いる?」

「いらんわ!」

ミカの火星ヤシを払い除け、そいつは立ち上がり、どこかへ足を向ける。

「別にそんなお腹すいてないし、余計なことしないで…あうっ…」

だが急に立ちくらみをし、ミカがとっさに彼女のことを支えようとするが、既のところで踏みとどまり——

「なによ…あんた…」

「急に足が変になってたから…大丈夫?」

「大丈夫よ…一人で歩けるわ」

「ふーん…そう」

「…礼なんか言わないわよ。あんた達が勝手にやったことなんだから」

そしてそのままそいつは歩きだしていった。

足取りはあんまよくねえし…本当に大丈夫なのか…?」

「……………もぐっ」

そしてミカは差し出そうとした火星ヤシを食べていた。

ちなみにここは火星じゃねえんで、火星ヤシは本来はないはずなんだが、何故か殆ど同じヤシが店に売ってたんで、ミカはそいつを大量に買って食っている感じだ。

どんな飯をくおうともこの「癖」は抜けねえようだ。

まあ、ミカらしい。

「なによなによなによ…大失敗だわ…まさか狙っていたやつに介抱されるとか……」

彼女「キヤル」はある方の指示でペコリーヌを暗殺する任務を行っており、ペコリーヌが化けきのこに襲われたり、先程の魔物に襲われたりすることも全て彼女に持たされた力を行使したものである。

なお、先程倒れていたのはその力を使いこなせずに無理してしまったことによるものだ。

「だいたい、何？ペコリーヌってどういうこと？ふざけてんの！あいつの名は……」

その真名を言おうとしたが、流星にヒートアップしすぎたと思い、立ち止まってため息をつく。

「……………このことがあの御方に知れたら……………うんうん…次こそは必ず仕留めるわ……………あの

方のために……！」

キヤルは彼女を暗殺すると改めて「あの方」に誓った。
それが自分のなすべきことと固く思いながら……。

後編

「やっぱりあいっ剣を失っているわね……」

キヤルは猫の如く木の上に登り、しっぽをひよこひよこ動かしつつ考え事していた。

「あいっにとつて特別な剣のはずなのに……昨日遺跡で襲った時も持ってなかったし、さっきの戦いで確信したわ。今こそやるチャンスよ」

「チクショー!!」

そうキヤルが話していると、どこからか男二人の声が聞こえる。

キヤルがその方を振り向くと、アフロな髪型の太った男と金髪リーゼントな痩せ型の男が「剣」を持って歩いてた。

「まさかあの姉ちゃんもランドソルに居たとは……」

「ああ……パーリーーナイツ！できると思ったのに」

（あれは……）

その剣は間違いなくペコリーヌが持っていたものであった。

「さあ、見つかる前にずらかるぞ」

「あいよ。兄貴」

どうやら別の街に高飛びしようとしているらしい。

「なあ、チャーリーよ」

「おいっす、チャーリーっす」

「この前、変な街に行つたんだよ」

「ほうほう?」

「いきなりおばさんに洗剤を売りつけられたり、なんかの書類に名前書けと強要されてよ」

「ほうほう?」

そう他愛もない話をしていると急に二人周辺に影ができた。

「ん?なんだ?急に雨でも降んのか?」

「あ?」

何かの気配を感じた二人が振り向くとそこにはなんと大きなドラゴンが滞空していたのだ。

「うあああああつ!」

「ドラゴン?こんな王都の近くで!」

キヤルがそう言っている間に男二人は逃げるが、当然追いつかれて、二人はそのまま連れ去られてしまった。

「あああああああああああああああ!?!」

キヤルはその後、すぐさま木から降りてドラゴンが去っていく方向を見極める。

そこはちやうど山岳地帯のところであった。

「こいつは使えるかも知れないわね……」

そしてキヤルは同時にペコリーヌを確実に暗殺できる方法を思いついていた。

それを実行するためにキヤルはまず、ランドソルのほうへ向かっていくのであった。

「いないですね……どこいったっちゃったんでしょう?」

あの後、俺達はランドソルの街を見渡せる高い橋みたいなどころであるの二人組を探していた。

間違いなくこそ泥みたいな類だし、間違いなく野放しにはできねえ……。

まあ俺達もある意味はヤバイやつに分類されるかもしれないねえが……今はあんま関係ねえから置いておく。

「なにか、手がかりがあるとよいのですが……」

「なんか捜し物?」

「あ?」

俺達がそうしていると、誰かが俺達に声をかけてくる。

「…なんで猫の人がいるの?」

ミカの言う通り、そいつはさっきの猫の少女だった。

「うっさいわ!あたしにはキヤルって名前があんの!!変な呼び方しないで」

「…(めん)」

どつかのガリガリとかなんとかの時とは違い、ミカはすぐに謝った。

まあ敵対とかしてるわけじゃねえしな。

「キヤル…キヤルちゃん!可愛い名前ですわね!!やばいですね☆」

ペコリー又はその名前を聞いて目を光らせる。

——流石に人を食うつもりじゃねえよな……?」

「やばくないわ!人の名前をやばいとか言うなー!」

結構怒っているような仕草だったが、なにか別のことを思い出したのか、怒るのをやめてあることを話し始めた。

「ところであんた達、なんか困ってるみたいだけど。さっきは一応親切にしてもらったし、あたしにできることがあるれば手伝って上げてもいいわよ」

「本当か?」

「本当ですか?このお薬を脚気の人に渡したいんですけど…」

「どこにおられるのか……」

「なんかさ、特徴とかないの？見た目とか持ち物とか」

「確かアフロみたいいな人と金髪のガリガリな人。あとなんか大きな剣をもってた」

「大きな剣？」

ミカが言った内容にキヤルはそれに引つかかったようで、なにか思い出そうとする仕事をする

「キヤル様、なにか？」

「あたし、そいつら知ってるかも」

「本当ですか？一体何処で……」

「あつちでドラゴンに剣ごと連れ去られてたわよ」

「ドラゴン!?!」

「ドラゴンだと？」

「ふーん」

確かあの掲示板で財宝を集める習性があるドラゴンの討伐クエストが貼ってあったな。

ここ最近、ランドソル近辺に現れてるやつらしい。

まあモビルアーマーやら今まで戦ってきた化け物に比べれば、どうってことはないほ

うだが……それでも結構でけえしなあ…。

なおミカは「そう驚くこと？」と言わんばかりに反応は変えてない。いつも思うが適応力凄くねえか…？

「へー、つまりあいつらが持っていた剣に興味があったわけだ」

「大変です！私の剣を預かってもらっていたばかりに！」

「え？あの剣はペコリーヌさまのものだったのですか？」

「はい、お父様から授かった剣なんです」

「……何か、違うような……」

「俺も違う気がするぞお……」

十中八九奪われたの間違いなんじゃねえのか…？

まあ本人がそうじゃねえのなら……いいのか…？

「あんた達、運が良かったわね。あたし、あいつらの居場所わかるわよ」

「本当ですか？キヤルちゃん！大好きです！ありがとうございます！！」

そしてペコリーヌはキヤルに抱きついた。

よほど嬉しいらしい。オーバーな気もするがまあいい……

「うわっ、ちよっ、ひつつくなー!!」

そしてキヤルは流石にそれに驚いていたようであった。

それでキヤルの案内で俺達はドラゴンが居るところへ来た。

ドラゴンの周りには結構な量の財宝があり、ここが住処らしい。

そして剣はドラゴンの口に咥えられ、男二人はしっぽに巻かれて捕まっているよう
だ。

「確かに、あれは私の剣です」

「あたしはここまでよ。流石にあんなの相手にしてられないわ」

「うんうん。キヤルちゃん！案内してくれてありがとうございます！」

ペコリーヌはキヤルの手を取り、感謝の言葉を言っている。

だがキヤルはその手を振り払う。

「あ、あたしは安全なところで待ってるから……」

「…ねえ」

そしてミカもなんか思ったのか、彼女に声をかける

「な、なに？あんた、まだなんか用？」

「…ありがとう」

「……ふんっ！」

ミカの御礼の言葉を聞くとキヤルはすぐ从这里から離れていった。

たく素直じゃねえとこのかなんというのか……。

俺にはよくわかんねえ。

「思いつきり口に啞えていますね……」

さて改めてこいつはどうするか……

俺達はどうかやって剣を取り返すか考え、ユウキがポンつと閃いた。

「あつ」

「どうした？ユウキ？」

そしてオルガ達は剣とついでに男たちの救出作戦を開始した。

「……………」

ユウキは自分のマントを使い、闘牛士の要領でドラゴンをひきつける。

当然、ドラゴンはユウキの存在に気づく。

「な、なんだ？あいつ」

「おうっ……」

「シーツ」

そして近くの岩場からペコリーヌが二人へ話しかける。

「もう少し辛抱してくださいね」

「た、助けてくれるのか？」

その間に肯定の意味でペコリーヌ微笑んだ。

「頼むぜ。いかれたあんちゃん……！」

一方、ドラゴンとユウキは暫く睨み合いが続く。

そして――

「グウウウツッ！グアツッ！」

なんとユウキをすぐに口に啜えてしまった。

「食われたアアアアアア!?」

「神の御加護を………！」

すかさずコツコロはユウキの補助魔法をかけ

「いくぞお!!」

オルガは銃を発砲し、牽制攻撃を仕掛ける。

なおその銃弾はドラゴンの厚い皮膚に弾かれてしまった。

「結構当たるけど駄目じゃねえか……」

そのスキにペコリーヌがドラゴンに飛び移り、口の方へ駆け上がる。

「ありがとうユウキ君！今助けます!!」

そして顔のところに到達した時に少し離れた地点に居たキヤルが魔法陣を発動させ

る。

「かかったわね……ペコリーヌ。あたしのプリンセスナイトの力であんたを潰す……！魔物を支配する力でね……！」

その声とともにドラゴンの目に魔法陣が現れる。

それにより、ドラゴンは先程暴れたイノシシの魔物と同様にキャルの意のままとなる。

「さあ、やつちやいなさい!!」

そしてその掛け声とともにドラゴンが動き出し、近くの岩にぶつけ、ペコリーヌを顔から追い落とす。

「ペコリーヌさまー！」

幸い、剣のところを掴み、完全に落ちることはなかったが――

「良いわよその調子！ガンガンいっちゃいなさい！」

今度はドラゴンがかなりの高度まで飛び上がる。

「主さまー！ペコリーヌさまー！」

(くっ、頼んだぞミカ……！)

「あわわわわわ……ぐっ……あつ！」

この状況でその剣を持ったままというのはいくらペコリーヌといえど難しく、手を話

してしまった。

「うわっ…あっ！」

ドラゴンの体にぶつかりながら、最終的にはなんとか掴むところまでできた。

そこは——

「いてててて!!」

「ミラクル!？」

「あつ、おいつす！思わず掴んじやいました。ごめんなさい、痛いですよね？」

「大丈夫だ！俺の毛根を信じろー！」

「はいー！」

かなりギリギリだが、なんとか助かったペコリーヌ

そして——

「よし…捕まえた…！」

ガンダム・バルバトス第6形態を身に纏った三日月が到着する。

なお前世においては無重力である宇宙戦以外では自由に飛ぶことが出来なかったが、この世界では重力下でもガンダムフレームのある機体のように自在に飛ぶことは流石に不可能であるが、かなりの飛行能力を手に入れた。

そのため、ドラゴンのような飛行物体とも戦えるようになった。

そしてレンチメイスをドラゴンにぶつけ、なんとかドラゴンの態勢を崩そうとする。
「チッ！」

ドラゴンからも反撃され、なんとかメイスで受け止め、それを押し返す。

それと同時にメイスから鉄血太刀に装備を変え、ドラゴンを切断しようとしたが――
「クソッ…嫌に固いな……」

カンカンッと跳ね返り、太刀すらその皮膚は通さなかった。

(この目……さっきのやつと同じ……)

ミカはドラゴンの目に映る魔法陣のようなものにも気づく。

だがそれについて考える暇もなく、ドラゴンは更に空へ舞い上がる。

「うわあああああつ！」

それに対し、ペコリーヌは髪の毛を掴みつつなんとか耐える。

「メンドイ……！」

(内側なら……！)

そして今度はドラゴンの外側の皮膚ではなく、内側のお腹のところに太刀を叩き込む。
む。

それにより、深くはないものの、傷ができた。

「しづといわね……これならどう！」

そしてキヤルは操る能力でドラゴンを更に攻撃させ、バルバトスを大きく突き放す。
「くっ!?!」

それと同時に、ペコリーヌが掴んでいた髪の毛が殆ど抜けてしまった。
「俺のもうこおおおおおん!!」

「アニキイイ!」

「うわわわわっ!?!」

そしてペコリーヌはそのまま自由落下してしまう。

それで手応えをキヤルは感じたように

「これあの「お方」が私を認めてくれる…褒めてくれるわ……!」

その目はキラキラしたものとなっていた。

そしてドラゴンはペコリーヌのほうに突撃してくる。

「うわあああああっ!?!」

「ペコーっ!!」

だがそこはユウキがマントを使い、ドラゴンの目を隠させ、攪乱させる。

「ナイスです。ユウキ君!はああああっ!」

「いけっ……!」

そしてペコリーヌは再び装備を光らせ、力を拳に集中させてドラゴンの頭部に攻撃を

命中させ、更にバルバトスもメイスを投げ込み同じく命中させる。

「やったあああああつ…あつえええええええつ!？」

その後、ドラゴンはそのまま落下し、岩山の中をぶつかりながらも進み――

「え？」

まさかのキヤルが居るところへ着地することとなり、キヤルは逃げようとするも間に合わず、衝撃波により倒れた。

「いった…つ…つ…」

そしてそのことにより、ドラゴンを操っていたその力が解除されたのか、目のところから魔法陣は消失しまった。

「あつ…！…しまったつ！」

「くつ、猫の人が…つ！」

ミカもキヤルに気づくも、バルバトスと見えど、瞬時に向かうのは不可能に近い。

ドラゴンの爪がキヤルを襲おうとしたその時――

ドラゴンを怯ませる光を伴った衝撃がキヤルを庇うかのように発せられる。

そしてキヤルがそれに気づいて前を向くと、そこにはあの剣を持ったペコリーヌの姿があった。

「ペコリーヌ…？」

「無事ですか？ キャルちゃん」

「あんだ、それ…」

「はい、ようやく取り戻せました！」

そしてドラゴンは口に居たユウキを吐き出し—

「主さま!？」

「守るのは俺の仕事だ！」

目の前のペコリーヌへ火を放つ。

だがそれは剣の一振りでも相殺された。

「やっぱり使い慣れた剣は良いものです！」

ドラゴンは翼を跳ねて、逃げようとするも—

「逃がすわけ無いだろ……！」

ミカがルプスレクスの超大型メイスを翼に投げ込み、それを妨害する。

あの悪魔が居る以上、そこから逃げるのはもはや不可能である。

「ありがとうございます！ 三日月君！」

そしてペコリーヌは自分が持つ力を剣に集中させる。

その剣はとても輝かしい光に包まれていた。

「全力…全開……！」

そしてその剣を力いっぱい振るった。

その「名」とともに――

「プリンセストラアアアイク!!」

「!?」

そしてその剣が放った衝撃波でドラゴンはもちろん、周囲の岩をも巻き込んで大爆発を起こす。

なおその煙でキヤルから一瞬ペコリーヌが見えなくなるが、その煙が晴れるとまだ光が残るペコリーヌの姿があった。

(これが……こいつの力なの……?)

「あの方」から聞かされてはいたものの、実際に目をするのは初めてであったので、とても驚いていたのであった。

そして一方のふっ飛ばされたユウキは――

「主さま……無事で……お、オルガさま!?」

「だからよ、止まるんじゃないぞ……」

オルガが下敷きになって着地したためほぼ無傷であった。

もちろん、オルガはそれで「希望の花」を発動させていたのと言うまでもない。

「なんとか終わったみてえだな…」

「うん」

あの男二人組の片割れはすっかりハゲちまったが、ペコリーヌに感謝しているようで、そして渡された脚気の薬を飲んでよほど苦いのかムせていた。

やっぱりそういうことか…まあ、あいつも剣を取り戻せたようだし、俺がとやかく言うことじゃねえが……

「キヤルちゃんもありがとう！」

「え？」

そんでペコリーヌはキヤルの両手を掴んで、握手していた。

「ちよ、あたしは別に……」

「キヤルちゃんが案内してくれたから、おじさんたちも助けられたし、大事な剣も戻ってきたんです」

「……ば、バツカじゃないの……」

キヤルは照れくさいのか少し目をそらす。

素直じゃねえな……

「ん……」

「どうしたミカ？」

「…別に」

ミカはなんか感じたのか、少し考える仕草をしていたんだが、すぐにやめてまた火星ヤシを頬張り始めた。

さっきのドラゴンのことか？確かにやけに暴れていた印象だが……俺にはよくわかんねえ。

「キヤルちゃん、一緒にごはん食べましょ！」

「は？」

ペコリー又は昼間のあの混ぜご飯をおにぎりにしたやつをキヤルに差し出しながらそう言った。

どうやらコツコロがおにぎりしてくれたらしい。

「いい、いらぬいしー！」

それと同時に鳴る音……なんだよ、結構腹減ってるんじやねえか……。

「おなかすいてるんだよね？」

「んんんっ……ああ、もうわかったわよ！」

ミカに指摘され、観念したようだ。

その後、夕日がよく見える高台で俺達はおにぎりを食う。

「はああ…やつぱりごはんは命のエネルギー！」

なおペコリーヌが持つてるおにぎりは結構大きい。

よく食えるな……。

「うんうん」

そしてユウキは口の中を膨らませながらもそれに相槌を打つ。

たく、ちゃんと噛んで食えよ？

「うん、美味しい」

火星ヤシばかり食べてる印象があるミカだが、飯はうまそうに食っている。

腕につけている「アイツ」のミサンガを少し見つつだが――

思い出してんのか？やつぱ

「ご飯はいつでも美味しいですが、やつぱりみんなで食べると格別です。ずっと一人で旅してましたから……なんだか嬉しくなっちゃいます。ヤバイですね☆」

なるほどな……まあ確かに仲間で食べる飯は違う……とこの異世界を巡る内に結論は出していた。

元の世界じゃそれより考えることが多すぎてそれどころじゃないってのもあったが……。

「確かに、残ったご飯を握っただけですが、はむっ……んふっ……おいひいです」
コッコロも俺と同じ結論だった。

「ただどあんまがつつくなよ……最悪の場合どつかの時の俺みたいに吐くからよ……。
死ぬことはねえけどよ。」

「そうだ！私達で美食ギルドを結成しませんか？」

「ギルドだと？」

「はい。みんなで美味しいものを求め、活動するギルドです」

「おお、良いんじゃないかねえのか？」

「うん、良いと思うよ」

「願ってもない申し出です。わたくしたちもギルドを結成したかったので」

「うん」

ペコリーヌの提案に俺やミカ、コッコロ、ユウキは賛成する。

確かに良いかもな……こうしてみるだけで結構美味そうなものがあるし、あとこのラ
ンドソルじやギルドの加入は義務付けられているらしく、加入しないと信用が得られね
えとも聞いた。

「ここで地を足をつけるためには必ず必要と言っている。」

「もちろんギルドの名前は鉄華だ……」

「あ!？」

「ねえ?」

何故か突然俺の胸ぐらをつかむミカ。

え?俺なんかした…?

「鉄華団つて言おうとしてるんだろうけど駄目だよオルガ」

「え?」

心の中読まれてるじゃねえか……

勘弁してくれよ……。

「それを決めるのはペコリーヌだから。俺達よりこの世界のことは詳しいだろうし」

「あ、ああ……すみませんでした」

確かにミカの言うとおりだ。

ここは俺は一団員としてゐるしかねえ。

「キヤルちゃん!キヤルちゃんも入りましょう!」

「え?は、入るわけ無いでしょ!いつあたしがあんたたちの仲間になったのよ」

キヤルはペコリーヌからの勧誘を蹴つちまった。

まあなんとなく予想はついていたが……

「勝手に盛り上がらないですよ……」

「……………」

立ち去ろうとするキヤルにミカが立ちふさがる。

「…なに？あんたも勧誘するの？」

「…火星ヤシ、食べる？」

「は？」

キヤルに火星ヤシを差し出すミカ。

さつきのことといい、そんなに食わせたいのか…？

「だから…：…はあつ…：…わかったわよ。受け取ればいいんでしょ！」

キヤルは火星ヤシを勢いよくひったくって、その場を後にした。

「なあ、なんで火星ヤシなんだ？」

「結構疲れてたみたいだし、頭使った後とかはこれが良いと思ったから」

「ああ？」

まあ、ドラゴンに襲われてたし、結構疲れていたのはわかったが…：…。

そこまですやねんじやねえのか…：…？

そう思いながらも俺は残りのおにぎりを食べていたのであった。

「バカ、バカ、バカ、バカ！何をやってんのよあたしは…」

本来の任務を達成できず、しかもまた助けられてしまったキヤル。

その上、暗殺するべき相手から感謝されてもいた。

その罪悪感やらが渦巻き、足取りは強くなっていた。

「こんなんじや……あたしはあのお方に……」

だがそんなときに朝居た場所に戻ってきたのだが、朝一人ぼっちだった猫は、いつの間にか集まっていた猫の輪の中に入っていたようであった。

「……仲間なんて……」

そしてキヤルは持っていたおにぎりを一口食べる。

熱くはなく、程よい暖かさであった。

「おいしい……こっちも……」

それと同時に、ミカから受け取った火星ヤシも食べてみる。

こちらはシンプルだが、飽きない味であった。

「……意外と行けるじゃない。あいつのも」

キヤルは少し機嫌が良くなったのか、しっぽを動かし始めていたのであった。

Menu3 美食のフロンティア 〱隠し味に天上の果 実を添えて〱

前編

俺はコッコロについていき、ギルド管理協会の方までやってきた。

理由は――

「ギルド申請？」

「はい。一緒にギルドを組みたい方たちが出来まして」

コッコロの言う通り、ギルドを作るためだ。

俺の言う鉄華団……はミカに却下されちまったがな……。

良いと思ったんだがなあ……。まあ今に始まったことじゃねえが

「まあ、では早速……」

「いや、そこまで急ぐことじゃねえ……な？」

「はい。一応申請書を頂いておこうと……」

「……その方たちとできるといいですね。ギルド」

「はい……」

そして申請書をカリンからコツコロへと手渡される。

こういうのは俺達の直筆で書いたほうがいいからな。そのほうが気も引き締まるしよ。

一方、ユウキと三日月は広場でギルド管理協会へ行つた二人を待つていた。

ユウキはコツコロからもらった一日スタンプの台紙を見ていた。

そのユウキがふと横に目を向けると、目の前に行き倒れている女性が一人……。

「なにあれ」

三日月の言う通り、得体のしれないような雰囲気であつた。

だがそんな雰囲気も感じてないのか、平気で近寄り、彼女の近くに持つていたおにぎりを置く。

「あ、あなたは……」

「……お腹すいたの？」

どうやらお腹が空いて行き倒れているとユウキは認識したようである。

ペコリーヌの前例が有るため、致し方ないが。

(…なんか違うと思う)

なお三日月は薄々勘付いていたが、確信は持てなかったため、特に口出すことはなかった。

そしてユウキはその彼女に背を向け、その場を後にするが――

「ハア…ハア…フフツ…フフツ…」

そのユウキの後ろ姿を見て、彼女はうつすらと笑いつつ目を光らせる。

まるで得物を見つけたかのごとく……。

ユウキはまだ彼女の本当の正体を知らない――

「主さまー!」

「ミカアアアアアアアアアア!」

俺はミカを見かけた途端、つい叫んでしまい、ミカに胸ぐらをつかまれた。

「え?」

「なにいきなり、うるさいからやめて」

「すみませんでした」

相変わらずミカに睨まれると怖えよ…。

勘弁してくれよ…それだけでも確実に死ねるくらいだしよ……。

「おまたせしました。申請書頂いてきましたよ」

「うん」

「ああ、あれか」

ユウキは親指を立てるジェスチャーをし、ミカはそれを聞いた途端俺の胸ぐらを掴むのをやめる。

「では、参りましょうか」

そして俺達はペコリーヌとキヤルの二人を探すことにした。

つつてもこのランドソルも結構広いしな……どこにいるんだか。

「お二人はどちらに……」

コツコロがそう言いかけると、どこからかガヤのような声が聞こえてくる。

「おいおい、マジかよ」

「まだ食う気かよ!？」

「バカヤロー!うちのペコ姉さんなめんなよ!」

……これは間違いねえな。

「あそこですね」

そしてその声が聞こえる方にあるレストランのほうをみると、窓から中を覗いていると思われるキヤルが見えた。

何してんだ……?」

そのキヤルにミカが真つ先に声をかける。

「なにしてんの?」

「にやあああああああああああああああ!?!」

それでキヤルは驚いて悲鳴を上げる。

「……そんなに驚くこと?」

「きゅ、急に後ろから話しかけんな!ぶつころすぞ!」

ミカの言う通り、そこまで驚くことか?

……いや、俺も同じことになったら「希望の花」しちまうかもしれないねえから人のこと

言えねえか

「ごきげんよう、キヤル様」

「店の中眺めてどうしたの?」

「べ、別に……ちよつとお腹すいたからどんな料理を出してるのか気になって見てただ

けよ」

「そっか、ちようどよかった」

ミカの問いにキヤルが答えていると店の中からペコリーヌの声が聞こえてくる。

「マスター!おかわりお願いします!!」

……一体どれだけ食うつもりだあいつ。

ホントに胃袋にブラックホールかなんかあるんじゃないやねえのか……う？

「ペコリーヌさまもいらつしやるようですし、ご一緒にいかがですか？」

「なんでアタシがアンタらと一緒に……」

とは言うがキヤルはすぐにお腹の音を鳴らす。

なんだよ、結構腹減ってるじゃねえか……。

「我慢すると体に悪いよ？」

「うっ……!!!」

ミカに言われてキヤルはすっかり顔をふくれてしまった。

どうやら凶星ってやつらしい。

ミカにとってはまだ心配しただけのようだがな。

「ほ？あ、みんな！おいつす！」

「おいつす〜」

「おいつすだぞお……」

「おい……つす？」

「アンタまで無理にやらなくていいわよ……」

ペコリーヌの目の前には案の定皿がかなり積まれていた。

一体何人前くらいだこれ。

なお同じテーブルに座ってたこそ泥のあいづらは完全に伸びてしまっていた。

ついていくのは絶対ムリだろ……そして張本人は未だにピンピンしてるのかよ……

そして俺達が座れるような席に移動して、ペコリーヌが頼んでくれたハンバーグを食うことにした。

「こちらのお店、本当に美味しゅうございますね」

コッコロの言う通り、これなら確かにペコリーヌの気持ちもわからなくもねえ。

いや、あそこまで食うつもりはねえが、結構いけちまう。

「サイコー!」

「おい、ユウキ。あんまがつつくなよ? 飯は逃げねえし」

「うん」

ユウキのやつもとても嬉しそうだ。口元汚してまで食べてやがる。

ミカも珍しく火星ヤシを頬張らずにただただ食ってる。

だが、キヤルは先程から変わらずに頬杖について膨れたままだ。

さっきのこと根に持つてんのか?

「およ? なんか元気ないですね。どうしたんですか? 貧血とかですか? ご飯食べれば解

決ですよ！どうぞどうぞ！」

「ちよ！料理押し付けんな！」

ペコリーヌのぐいぐい来る行動にキヤルは押し返す。

……ご飯ってそこまで万能か？まあ間違つては居ない気がするが。

「早くなんか食べたら？お腹の音なつてたのにまだ何も食べてないよ」

「わ、わかつてるわよ！」

ミカの指摘もあり、キヤルはメニュー表を手に取りじつと見た。

「……フィツシユ・アンド・チップスで」

やつと食う気になつたか……と思つたら今度はこの店のマスターが俺達に葉巻を吸

いつつ近づいてくる。

ん？どうしたんだ？

「ふう……ないよ。もう食材がない」

「ヴェ？」

ない……だと？

それと同時にペコリーヌのほうから大きな腹の音が鳴る。

まさかとは思うがこいつは……！

「あんたがバカみたいに食つてるから！この口が！この口が悪いの!？」

「にやい、いにやいです。きやるにやん」

ペコリーヌの頬を引つ張るキヤル。

まあ当然としか……。

「仕方ありません。他のお店に……」

「あわへないで、実はこのおみせにはうらめにゆうがあるらひいんでふ」

「裏メニユー？」

そう聞くとキヤルはペコリーヌの頬を引つ張るのを止めた。

「お客さん、その話一体どこで……」

マスターも神妙な顔になっている。

そんなにヤバイやつなのか……？

「ふっふっふ……イカツチさんから聞いていたのです。マスター、裏メニユーを！」

指パツチンし、それ高らかに宣言する。

そしてマスターが持つてきたその料理は……

「……………あ……ああつ……………」

キヤルのやつが絶句するほどの豪快にも虫がメインの料理だった。

正直俺も絶句している。

いやだって虫だぞ？肉や魚はもう良いとしても虫だぞ？

普通食えねえだろ!?

「ではでは、本日のお楽しみ。虫料理パーティーを開催します」

「いえーい」

「ちよつと待つて! 虫? 虫つて言った!？」

「ああ、確かに今虫つったよな?」

「ああ、二人共。虫料理つて言うのは虫を使った料理のことですよ」

「意味分かんない! バカなんじゃないの!」

「だから勘弁してくれよ……」

俺とキヤルは頭を抱える。

なおコツコロとユウキはそうでもなく、むしろ興味津々の様子だった。

ミカ、お前ならわかつてくれるよな?

「……………」

ミカもミカでその虫料理を前に流石に抵抗があるようで、少し目が鋭くなっている。そうだ。食べるわけねえだろ?

「……………パクツ」

え?

「んっ、意外と行ける」

ミカお前……！最初ん時は魚食うのもやめてたつてのに……異世界回つてる内に耐性ついちまったのか？……つてなんでフオークに虫料理刺して俺に向けてんだ！？」

「オルガも食べたら？」

「まてミカ！待ってくれ！」

「好き嫌いは良くないよ？栄養残さず食べて」

「だから待てよ！待てつて言ってるだろうミカアアア！」

「うるさい」

「ぐっ!？」

そして俺はミカに虫料理を口に押し込まれる。

この味は……なんつーか……？

「なんだよ……結構美味いじゃねえか……」

俺はシヨックで「希望の花」を発動させつつも、虫の美味しさを認識する。

こんなんでも発動するほどホント俺はミソツカス……。

なおキヤルのほうも似たようにペコリーヌに押し込まれ、こう一言呟いた。

「嘘……おいしい……」

「ふう……美味しかったあ。幸せです」

そして食事を終えた俺達は一息つく。

「ういやこいつはさつきも食ってたのに虫料理も完食してたよな……いや、もう考えるのはやめちまおう……そういうやつなんだ、ペコリーヌは。」

「見た目どうにかならなかつたの?」

「同感だ。あれじゃ食うまでのハードルが高すぎるぞ」

「まあまあ、これでキヤルちゃんもオルガ君も新しい扉を開きましたね☆」

「無理やりこじ開けたんでしょ!?!」

「そうだぞお……」

そう俺達が話しているとコッコロはなにか話したそうな仕草をする。

「そうだ、忘れてた。ギルドのことがあつたな。」

「あの。キヤル様、ペコリーヌ様」

「ん?」

コッコロはギルドの申請書を差し出す。

「わたくし、ギルド申請書を頂いてまいりまして…改めて皆様とギルドを結成したく

……」

「ありがとうコッコロちゃん!なんて出来た子なんでしょう!!」

ペコリーヌは感謝の気持ちからかコッコロに抱きつく。

だがキヤルのほうは――

「ちよつと待った。あたしは入らないって言つたわよ。悪いけど、ギルドなんかに興味ないから」

…なんとなく予想はしていたが、まあそうなるだろうな。

一応あん時断つてたしよ……。

「じゃあね。ごちそうさま」

キヤルはそのまま店を後にしちまった。

「こいつは骨が折れるな……」

「大丈夫だよ。オルガ」

「ミカ……そいつは」

「きつと来ると思う。キヤルなら」

ミカは何かを感じたってことか……？

俺にはやっぱりよくわかんねえ……。

後編

「バイト？」

次の日、再びペコリーヌに会った俺達だが、バイトをすると言い出していた。

「はい。実はお金が尽きてしまって…それでマスターにそれを話したら『うちの裏メニューの良さがわかるなんて、見どころあるぜ』と言って、私をバイトとして雇ってくれることになったんですよ♪」

「そいつは構わんが……」

確かに配膳とか似合いそうだよな……流石につまみ食いとかはしねえだろうし。

その代わりに賄いの飯の量が多くなりそうだよ。

「そ、そうでございますか……」

だがコッコロもあまり元気がねえし、この感じじゃ本当にギルドを立ち上げることできるのか？

やっぱり俺が主になって立ち上げるしかねえか。名前はもちろん鉄華だ…。

「だから駄目だよオルガ」

「ミカ、お前……」

だからなんで俺の心読めるんだよ……。
それとも俺ってそんなにわかりやすいのか…？

「いらつしやいませ☆」

そしてペコリーヌがバイトしている様子を眺めながら俺達は飯を食っている。
ペコリーヌがいるから結構繁盛している。

あのこそ泥二人も元気に酒やらを飲んでいる。

「はあ……ギルド結成までの道のりは遠いですね…」

コツコロの言う通り、確かに道のりが厳しくなった。

キヤルはあんな感じだし、ペコリーヌも忙しそうだし。

ここからどうするか……。

そんな時に入り口のドアが開き、ある三人が入ってくる。

「ちよつと、ミソギちゃん。押さないで…」

「うわあつ、こういうお店初めてはいっちゃった」

「静かに。他のお客さんに迷惑だよ！」

アトラなんかよりも小さい女の子3人だった。

「そうよ。アタシの道はあのお方が示してくれる。あのお方のためにも私は……」

そしてやっと踏み込む勇気が出たので、店のドアを開けると――

「はーい」

「あー……」

なぜだかミミに虫料理を食わせようとしているペコリーヌの姿があった。

「まていー！」

「キヤルちゃん？」

キヤルはすかさずそれをペコリーヌから高速で奪い取った。

「ガキンチョに何食わせようとしてんのよ!!それに何その格好は？」

「似合います?ウエイトレスですよ」

「ウエイトレス……?バイトしてんの?」

キヤルが首を傾げているとその後ろで申請書を持ってコツコロとついでにオルガがそわそわしていた。

「ソワソワ……」

「止まる……止まるんじや……」

「つてそこ!申請書こっちに向けて二人でソワソワすんな!」

「すみませんでした」

キャルのツツコミ2連打がここに炸裂した。

一方のミカはそんなことをせずにはただただ飯を食っていたが、キャルが来た事自体には気づき、彼女にこう問いかける。

「どうしたの？俺達に用？」

「用……」

（そうよ。アタシ、ギルドの話をしにきたんだったんだわ）

ここで本来の目的を思い出すキャルである。

それだけ最初見た光景にかなり驚いていたらしい。

そしてキャルは手を後ろに組み、一見普通と装うようにし、話を切り出す。

「あ、あのね。実はちよつと話というか気が……」

そんな時、ドンツと音が店に鳴り響く。

どうやら店のドアがこじ開けられたらしい。一同がその方を見ると、やけにふとっちよで赤つ鼻の丸坊主の男が店に押し入ってきたのだ。

「……かあ？まずい虫料理出してるって店てのは……！」

「てめえ！マスターの料理にケチ付けるってのは！」

イカッチが腕まくりして喧嘩に乗ろうとするも、相手の一撃でKOしてしまった。

(こいつは……！)

「は？お前何しやがる！状況わかってんのか？」

オルガもそいつの前に出ようとするが……案の定こちらもドガツと一発殴られ「希望の花」が発動した。

「だからよ……止まるんじやねえぞ……」

「アニキ！オルガのあんちゃん！」

その騒動により、賑わいがあった店はシーンと静まり返る。

そしてそのふとつちよの男はズカズカと入っていき、コツコロが落とした申請書に気づかずそのまま踏みつけていった

「……！」

「……」

三日月とキヤルはそれに気づき、そして三日月は特に警戒態勢に入った。

「おい、客に水も出さねえのか！この店は」

態度悪くテーブルに座り、嫌そうに水を催促する。

リトルリリカルの3人は震え、それを守ろうとペコリーヌは前へ出る。

「うちの店が何だって？」

当然あんなことを言われ、黙っては居られずにマスターが前に出てくる。

いかにも強そうであるが……。

「まずいかどうかはその舌で確かめて……ぐおっ!？」

グキツ!とそのマスターの腕が折られる。

意外とあつけなく落ちてしまった。

「おつと悪い。手が滑った」

そうは言っているがマスターはここで調理を担当している唯一の人であり、その腕が折れてしまえば調理はできない。

確信犯であった。

(こいつは……確かミカは片手の握力だけでハツシユの腕を折りかけたが……つまり……)

確実にヤバイ。オルガはそう確信していた。

そんな中、マスターに駆け寄るペコリーヌ。

「お腹が空いててイライラしてるんですか……?」

やはり彼女として看過できないものであり、その声はいつもの明るい雰囲気ではなく、少し低くなっていた。

「なんだ姉ちゃん。そこに転がってるジジイの代わりに飯作るってのか? まずかったら

「この店畳んでもらうぜ！なあああ？」

「……どんな人でも等しくご飯を食べることが出来る国……これがそのランドソルです」

ペコリーヌはマスターが落としたフライパンを拾いながらもこう話し、そしてフライパンを振り上げ、つきつけるかのようにこう宣言する。

「オーダー入ります！」

オルガ達がマスターの骨折を応急処置している間に、ペコリーヌは手際よく通常の三倍のように飯を作り、いつの間にか出来上がっていた。

「ふん、待たせやがって……こう見えて俺は美食家だからな？半端なものじゃ納得しねえぜ！」

「……」

「さあ、どれからいただくでしょう……」

「待って」

キヤルちゃんはある果実を持って、飯を食おうとする男へ近づく。

「キヤルちゃん？」

「まだこの料理は完成してないわ」

その果実とはキヤルが陛下への報告後に王宮近くで見つけたものと同じものであり、

それを食べた際にキヤルが虫料理に合いそうと考えたものであった。

「この果実から落とされる恵みの一滴で…あんたは天使の歌声を聞くことになるよ」

「モビルアーマー…人を狩る天使たち」

「あ?」

なおオルガは再びどこかで聞いたことがある声を聞いたが、特に考えずに無視をする。

厄介事に巻き込まれたくないので当然であった。

そしてその果実から落ちたその一滴により、その虫料理は虹色に輝き出す。

「かあっ!?こいつう…あ!」

男はそれにつられその虫料理にがつついた。

それと同時に――

「ぶ、ぶおおおおおおおっ!」

ふつとばされたような感覚、そしてそのまま男はすべての料理を我を忘れたかのように食い漁る。

そして本当に天使たちが舞い降りたかのような幻覚に陥った。

「う、うまあああああああい!」

これでユウキとコツコロは安心した表情を浮かべる。

だが――

「ぐっ……!」

その幻覚を払い除け、男は虫料理を地面に叩きつける。

「まずい飯出す店は何ぞぶっ潰して……あ?」

その男の前に無言で三日月が立ちふさがる。

「ミカ、流石にそいつはミカでも……!」

「……………」

「あ?なんだこのチビ、お前から潰されたいのかあ?ならその願い通りにしてやらあ!」

そして男は拳を一気に三日月に向け、殴ろうとする。

だが――

「……………なっ!」

「……………何?」

三日月はその拳を少し横に避け、腕のところ受けて止める。

なお言うまでもなく現在の三日月は左右双方使えるが、それでも片手だけで受け止めたのである。

「(、)、(、)の……!?!」

「……………」

三日月は無言のままだが、目は既に怒りの目であった。ペコリーヌという仲間が作った料理を男が無残に扱ったためか、彼を敵と完全に認識しているのだ。

「……………」

そして男には三日月のその気迫に冷や汗をかき始めていた。

三日月は転生前の戦場での戦い。そして転生後の数々の世界での戦い。それらを経験してきたいわば悪魔をも超越した「何か」である。

それを敵に回した時点で彼は完全に詰んでいたのだ。

「く、くそっ!」

それをなんとか振り払い、一歩下がったが、今度は後ろを掴まれる。

「ひっ!」

「食べ物を粗末に扱う悪い子には……お仕置きです!」

ペコリーヌのその装備が光り、男は軽々しく投げ飛ばされ、店の外へ追い出された。

「ぎゃああああああっ!?!」

「……………めっ!ですよ」

「やったぜペコ姉さん!三日月のあんちゃん!!」

もちろんそれを見ていた客たちから歓声が上がった。

「…よかった」

三日月もいつもの優しそうな目に戻っていた。

そんな三日月に心配したオルガが駆け寄る。

「大丈夫か？ミカ。あいつ力結構なもんだったのに」

「うん。昭弘とかより全然弱かったから大丈夫。ハッシユよりは強かったけど」

「そ、そうなのか…？」

（す、すぎるぞ…ミカ…）

オルガはミカを改めてすごいと認識すると同時に自分の弱さを悔いていたのであった。

（守るのが俺の仕事なのによ…）

「あ、ありました主様」

その後、俺達は店の修繕作業をし、それが落ち着いたんで、そこで改めて申請書を書くことにしたんだが…その申請書はコッコロより先にキヤルが拾い上げた。

「ん？」

「キヤルちゃん？」

「しょうがないわね……アンタたちだけじゃ頼りないから、アタシも入ってあげる。か・ん・し・ゃ……しなさいよね？」

「ほ、本当か!？」

「あはあつ!ありがとうキヤルちゃん!!」

ペコリー又はキヤルに抱きついた。

「んんむつ、こらああああ!抱きつくなー!」

やつとか……やつとギルドを結成できるのか……。

なんとなく長い道のりだったな。

「オルガ、これでまだ終わりじゃないからね?」

「ああ、わかつてる……」

「さあ!いよいよ始動ですよ!私達の目的はこの世界のありとあらゆる料理や食材を追求、探求し、その名も『美食殿』!」

カリンから案内されたギルドハウスに到着するなり、ペコリー又はこう高らかに宣言する。

「さあ、始めましょう!ここから!!」

ランドソル某所にはあるギルドの拠点が存在する。

その名は商業ギルド「モンターク商会」

このギルド自体は名前こそ違っていたが古くからあり、堅実な経営で安定していたが、その分、知名度自体はとも低いのであった。だがギルドマスターが「モンターク」に交代し、ギルド名を「モンターク商会」に改名した途端、急速に成長し、現在ではアストルムの商業ギルドとしては五本指に入るほどである。

そしてその拠点では、「仮面の男」とその側近が何かを話していたようであった。

「准将、趣味に口を出すつもりはございませんが、不審な行動を取られますと下手すればギルド活動に支障が」

「心配いらんよ。私は不審な者ではないからな」

「そういう問題では……」

仮面の男は「モンターク」いや、いつものマクギリス・ファリドである。

オルガが転生すると高確率で彼も同じ世界で転生してくるのだ。

なおその側近は「石動・カミーチエ」

前世においてもマクギリスの副官であり、この世界においてはギルドマスターとなったマクギリスの副官を務めている。

「……ところで石動、独自調査の結果は？」

「……やはり「ユースティアナ」の情報は追いきれませんでした。王宮騎士団の情報までは入手できたのですが」

「ふむ……「彼女」が治世しているというのはわかるが、どうにもしつくりこない点は多々ある。我々が今まで訪れた異世界と比べても……」

「どうにも怪しいと私は考えます。掴みきれない気味の悪さが」

「ああ、そして「影」の件もある。詳細の情報収集を急ぐべきだろう」

「はい……それと准将。先程の外出で鉄華団のあの二人とは……」

石動はそう質問するが、マクギリスは首を横に振った。

「いや、彼らの近くにはいれたが、騒動で接触は出来なかった。まあ、オルガ団長には意図的に避けられていたというのものもあるがね……私は前世の件もあって嫌われているのでな」

「当然です。不審者を相手にするほど鉄華団は暇ではないのでしょうか」

なお石動は前世とは違い、マクギリスにはたまに辛辣な態度を取る。

アグニカバエルロリコンバカな態度には流石にうんざりしているようだ。

「……ところで石動、フォレストイエとの件はどうだ？」

「はっ、数週間後に——」

その後、二人は本来の仕事である商会の活動に戻っていった。

なおマクギリスは終始その仮面を外さなかったという……一応商会在るかいなかでオンオフしている——というマクギリスの談であった。

Menu 4 ようこそ美食殿 夕のとばりにビーフシ チユーク

前編

「さあ、始めましょう！ここから！」

ペコリーヌがギルドハウスのドアを思いつき開けると……

「ヴアアアアアアアアアアアアッ！」

中から物凄い埃が舞い上がり、オルガはその衝撃で死んでしまった。

いつも通り耐久性がなさすぎるのである。

そしてそのオルガの死体（？）の近くには虫まで舞い降りてきた。

「ムシイ!？」

その虫はあまりにも大きいものだったからか、虫嫌いなキヤルは声にもならないような悲鳴を上げていたそうなの。

その後、色々と話した結果、オルガ達はこのギルドハウスの掃除をすることになった。

(道理でペーパーな俺たちに与えられる物件にしては立派すぎるわけだ。まあ死体とかねえ分マシだが……)

ちなみにオルガは――

「待てよ……待てつてぐおおおおおおおつ！」

害虫駆除中であった。

でさえ虫にも度々遭遇するため、またまた死んでいるのであった。

「まさか最初にやるのが掃除とはねえ……あ、コロ助。そこに外したカーテンあるから洗つといて」

キヤルははたきで埃を払いつつ、コツコロに指示を出す。

「コロ……わ、わかりました」

急にコロ助と言われてちよつと驚いたようだが、まあ普通にそれに従う。

「ミカ、あんたはあつちのゴミ捨てやつといて」

「うん、良いけど……ん？」

三日月はキヤルから急に「ミカ」と呼ばれたことに首を傾げる。

なにせミカと呼ぶのは実はオルガしかいないためだ。

だいたい三日月とフルで呼ばれるため、ある種新鮮であった。

「……なによ。呼びやすいからそう呼んだだけよ。オルガも言ってるじゃない」

「…あ、うん…わかった」

三日月も三日月でキャルの言うことに従うのであった。

なお――

「…こんなところで寝てたら風邪引くよ？」

「こんくれえなんてこたねえ…！」

オルガはまた死に倒れており、掃除中の三日月により、外に引つ張り出されることとなった。

こんなんでも害虫駆除には一応役に立ってはいいるが、

「よいしょー！」

一方、ペコリーヌとユウキはギルドハウスの中であつた家具などを外へ運び出し、整理をしていた。

「ダンスにソファと…いたれりつくせりですね〜」

「うん」

ユウキは親指を上げ、サムズアップをしている。

物置状態故に放置されていた家具であつたが、少し直せば使えそうなものばかりであつた。

だが、ペコリーヌはあるものが足りないと感じづく。

「ん……あわああああつ！」

「どうした？急に驚いて」

「どうされました？」

「この家には重大な問題がありました！」

両腕をブンブン上下させて、いかにも深刻な問題があるとペコリーヌは言う。

「ううん？何を今更……虫や蛇が住み着いているこの家でこれ以上何の問題があるって言うのよ？」

キヤルの言うこともぶもつともであるが、ペコリーヌは続けてこうも言う。

「無いんです……重要なものが」

「重要なもの？なんなんだよそいつは」

「私達のご飯を食べる食卓が！」

「は？」

「なんだと!？」

「確かにそれはダメだ」

「なるほど」

ペコリーヌのその発言にキヤル以外の4人は「そうだ。そうだったな」という反応をし、特にコッコロとユウキはポンつと手を打つが、キヤルはやれやれとした態度のまま

であつた。

「はあ……何かと思えば……無いんだつたら街に行つて買つてくればいいじゃない」

キヤルはまあもつともらしいことを言うが、ペコリーヌはそのままキヤルに近づいて、それを否定する。

「キヤルちゃん！」

「な、なに急に……」

「私達の活動目的はなんですか？」

「え、あー……えつと……食べること……？」

「違うよ」

キヤルのその言葉に間髪入れずに訂正してくる三日月。

続けてこつとも話す。

「俺たちみんなで楽しく……だよ」

「ミカ……？」

「三日月君の言うとおりです！ 大事なテーブルをそんな適当に決めるわけにはいきませ
ん！」

「は、はあつ……」

「私が作ります！ みんなで食事ができるテーブルを！」

「……そ、そうね……」

（作るの…あんた……）

ペコリーヌのやけに気合が入った宣言にキヤルは声に出して突っ込むのも放棄したのか、ただただ心のなかで突っ込んでいた。

（そして作るって…木材買うんじゃないかって切るところから…？）

「キヤル様、オルガ様」

「どうしたの कोरो助」

「どうしたんだ？」

そしてペコリーヌがフンヌ！フンヌ！と周辺の木を伐採する中、 कोरोコロはいつもの服装に整えて、キヤルとオルガへ話しかけた。

「わたくし、必要なものを買い出しにいったって参りますので、お掃除の方、よろしくお願ひいたします」

「ああ…だが流石に कोरोコロ一人だけってわけにはいかねえな。ミカ、荷物持ちやらでついて行ってやってくれ」

オルガは कोरोコロの付添を三日月へ頼んだ。

万が一重いものを買ってきても三日月なら荷物持ちが可能だからだ。

「いいよー。じゃあそっちは任せる。オルガ、キヤル」

もちろん三日月は快く引き受け、残りの掃除はオルガとキヤルへ頼んだ。

「もちろんよ……つてキヤル？」

「……なんか変？」

「……別に。まあ任せなさい。完璧に仕上げておいてあげるから」

キヤルは自信満々にそう答えた。

（俺は残りの害虫駆除だな……なんでああも多いんだ……）

なおオルガはまた自分が死ぬと計算しつつも、害虫駆除に戻っていくのだった。死んで生き返る能力は便利だが、死ぬほど痛いを地で行くのは言うまでもない。

なので、未だにこの能力を行使するのは慣れていないオルガであった。

「ヴァアアアアアアアアアアアアッ!？」

そしてまた、銃声は響き渡ったような。

「ドラゴンの褒賞金が残っていて助かりました」

「うん、意外と多く貰えたよね」

「はい。でも確かに……ドラゴンなんて滅多に見るものじゃありませんから」

「ふーん……」

二人はまあ他愛もない話をしつつ、街まで歩いている。

一応護衛みたいなものなので、三日月は周囲を警戒するが、特に殺気なども感じないため、あまり気は出さず、火星ヤシをかじりつつであった。

「とは言え、節約に越したことはありません。財布の紐を緩めず参りましょう！」

「ごめん、そういう金の使い方よくわかんないから」

「三日月様……主様のようにはわからないのですか？」

「そこまでじゃないけど、今までそういうのは他のやつに任せてきたから」

三日月は戦闘やらはもちろんこなしたが、反面日常生活を送る上の行動には疎い。

異世界を巡る中である程度は改善したものの「お金の使い方」というものには興味も

ないため、三日月自身の言う通り「わからないもの」になっていたのだ。

(……こは、わたくしがしっかりしていかないと……い)

なおその三日月の言葉を聞いて、改めて決心するコッコロであった。

一方、掃除組はウキは窓を拭き、オルガは害虫駆除で死に、ペコリーヌは木を整え、キヤルは掃除の前の確認をしていた。

「虫、無し！」

「蛇、無し！」

「幽霊は……よし！」

三段で確認していたのだった。

一応任せなさいと言った手前、集中して徹底的に掃除しようとするキャルであった。

そして視点は戻り、街のバザーでは、コッコロがある皿を欲しそうに見ていた。

なお三日月は興味がないからか、買い物の荷物を持ちつつも後ろで火星ヤシを頬張っているだけだ。

「……かわいい」

そう口にした後、コッコロはサイフの中身を確認するが、それを見てため息をつく。

どうやら、あまりないらしい

だが、そんな様子のコッコロに話しかける一人の女性が居た。

「あら、その食器気に入ってくれたの？」

「あ、はい。でも少し予算が…」

「ここはバザーよ？値段交渉も楽しまなくちゃ！」

そういつて彼女はその皿を手取る。

「ふふっ、負けてあげるわ」

「ありがとうございます。あ、わたくしはコッコロと申します」

「…三日月・オルガス」

「あたしはサレン」

「……………」

特に可もなく不可もなく、名を名乗るが

三日月は「オルガ」がいたら間違いないここで自己紹介するんだろうなと思っていた。

「…オルガ？」

そしてその幻聴まで聞こえた気がしたが、三日月はとりあえず無視した。

なおサレンの自己紹介は続く。

「この街でサレンティア救護院を運営しているの」

「なんと立派な…」

(すごいな……救護院って孤児院ってことだよな……まるでクーデリアみたいだ)

三日月はその雰囲気とかつての元いた世界での「彼女」を思い出していた。

彼女、クーデリアはエドモンソンでの戦いの後にアドモス商会を設立し、得ることができたハーフメタルの利権を元に商売を行う傍ら、孤児院や学校などの経営を行っているのだ。

もちろん、三日月やオルガが死んだ以降のその彼女の動向は定かではない。

だが、今も彼女は前へ進めているのだろう…と三日月は思っていた。

「ううん…あたしのほうが子供たちに力をもらつてくるくらいよ。他になにか必要なものはあるかしら？サービスしちゃうわ」

「と、止まつてええええええつ!!」

そんな会話を割つて出るなにかの叫び声。

その方へ振り向くと、ロバが暴走しているようで、その女の子はそれに引きずられてしまっていた。

「誰かああああああ!!」

そしてその暴走ロバが通り過ぎたと同時にミカはすぐさま追いかけて、そしてバルバトスに変身し、そのロバをなんとか止めた。

「申し訳ありません！お嬢様!!」

「びっくりしたわよ。まさかと思つたら、通り過ぎていつちやうんだもん。三日月君が止めなければそのまま街の外へ出る勢いだったし」

「も、も、も、申し訳ありません!」

その女の子はただだサレンへと頭を下げている。

どうやらドジっ子の気があるようだ。

「でもよかつたわ。怪我もないようだし」

「はい、バザーに出す品も無事でした……ところで、こちらの方々は……」

「はじめまして、コツコロと申します」

「三日月・オーガス……です」

「これはご丁寧に、わたくしはサレン様にお使いしているメイドで、スズメと申します」

一方、場所は戻し、ギルドハウスではバスルームを滅茶苦茶綺麗にしたキャルの姿があった。

「かんぺき……完璧な仕事だわ！さすがあたし！」

どうやら相当苦戦したようで汗も滲んでいた。

だがかなり埃やらカビだらけだったのに比べれば新品同然になっていた。

「んーぐっ！……どんだんやるわよー！ペコリーヌ、そっちの進み具合はどう？」

外へ出て、ペコリーヌのほうを確認するが、ペコリーヌは木を鉋で整えているところだった。

「ふんっ！」

「……まだかかりそうね……」

「止まるんじゃないぞ……」

なおオルガはまた死んでいたの言うまでもない。

後編

「きゅっ……」

「なにこれ」

「ここは……どこでしょう……?」

どうしてこんなことになっているんだろう。

厚意で買った荷物をサレンのメイドのスズメが運んでくれることになったんだ。

街の中を歩きながら、サレンが救護院を作った時の話を聞いたたり

主と仕えるものの関係の話とかを聞いて、死ぬ前のオルガとの色々なことを思い出したりで、少しボーッと歩いていて……気づいたらこうなっていた。

「バルバトス、これどう思う?」

「……」

「まあ、わかってる。ただ聞きたかっただけだ」

ここからへんの道を知らないコツコロとここの世界に来て浅い俺がたぶん方向音痴の

人に案内されたら、普通こうなる。

「しかし、昼間だと言うのに、随分暗いというか…魔物とか…」

「ままままま魔物!?ど、どこどこですか!？」

スズメがそう周りを気にした瞬間、コウモリが大群で飛び去った。
「で、でたあああああああああ!」

スズメはそれに勘違いして、ロバとともにその場から走り出した。
だがスズメはすぐ木の根っこに引っかけ、ころんだ。

「大丈夫ですか?」

「大丈夫?」

「だ、大丈夫です……あ!ロバは!」

「何処かへ……」

「ど、どうしましょう!ロバがいないと荷馬車が!」

荷馬車……ここはバルバトスで牽引するしか……

「ん?」

そう思った時、奥からなんか音が聞こえてくる。

「逃げたロバかもしれない」

その奥を覗いてみるとたしかにロバのような何かが見える。

「あれは……」

「ロバ？馬？……え？」

「荷台に会ったロープをお借りしますね……」

「どうすんの？」

「あの動物を捕まえて、荷馬車を引いてもらいましょう」

「ナイスアイデアです」

コッコロは勢いをつけて、ロープをその馬かなにかのほうへ投げつける。

それでかかったのは――

「リマリマー!？」

「「え？」」

「苦しい……!食べないでリマー!!」

「喋ったーっ!？」

なんか喋るもふもふしたものだっただった。

そんなに驚くこと？動物が喋るのなんて、白い虎とかで見飽きてるけど……。

ロバか何かと捕まえた動物の正体は二足歩行で喋るもふもふの毛で包まれている獣人のような女性だった。

彼女の名前は「リマ」ロバでも魔物でもないらしい。

この森を抜けた先にある「牧場」エリザベスパークという所で働いているという。

リマはロバが居ない一行のために自ら荷馬車を引くことを提案してくれ、一行はその親切をありがたく受けることにした。

「……………」

なお、三日月は終始無表情ながらもこの親切な正体不明に頭を少し悩ませていた。

なにせ、今までの世界で喋る動物はあれど、ここまでしつかりと動物の姿であるにも関わらず、二足歩行で喋るものはリマしかいなかったからだ。

また場所をギルドハウスへ戻すと、オルガはもちろん死んでいた。

「だから雑に殺すんじゃないぞ……」

そしてキヤルは椅子を二段にしていた。

「ねえ、あの窓拭きたいんだけど、手伝って」

「……………うん」

ユウキはサムズアップしてそれを引き受けた。

そして上へ上り、窓を拭き始める。

「……………そうそう、生活の乱れは心の乱れって言ってね。生活の基盤になる家なんだから、

ピッカピカにするわよ♪」

「ま、そういうもんだな」

(あんまりよくわかんねえが…)

「何言ってるかわかんないけど、キヤルは頭いい？」

「むっ…良いに決まってるでしょ。バカにしてるの？あんたもちよつとは勉強しなさいよ。記憶がないってことに甘えてたらダメよ？」

「ああ、読み書きとかは大切だからよ」

「おいすっ〜」

ユウキにとつてはまだ難しいことだからか、理解できていないようだ。

「ちよい!やる気ないでし…ひゃああああああああああつ!」

その上、キヤルの足の所に虫がひつつき、キヤルは悲鳴を上げる。

「どうした!」

「うぎやつ、ぎゃあああつ!」

「あ、あ、あわあつ!」

「え?……ヴァアアアアアアアアアツ!」

キヤルの支えを失った椅子が崩れ、オルガのほうへユウキごと崩れてた。

「ちよ!?!あんたら大丈夫!?!ねえつたら!起きなさいよ!」

そしてふたりとも気を失ってしまった。

「ほい、久しぶり」

「ん？」

「……勘弁してくれよ……」

そしてオルガとユウキはアメス様のところに居た……いや、気絶と同時に意識が飛ばされたと言うべきか。

「まあ、久しぶりじゃないのもいるみたいだけど……三日月」

「あ？」

オルガは急に胸ぐらを掴まれる。

その相手はもちろん三日月であった

「み、ミカ……おう」

「おうじゃないよ……ねえ、なにこれ？」

「まあ、おそらくはあんた達二人が気を失った時にオルガとのリンクが強い三日月もそれに引つ張られたのね。安心して、死んでるとかじゃないから」

「ふーん……」

アメスのその答えに三日月はまあ納得したのか、とりあえず胸ぐらを掴むのを止め

た。

(だから勘弁してくれよ……)

そしてアメスの話は続いた。

「無事にギルドを結成できたみたいだけど……やつぱり意外なメンツというか……この世界の謎に関わる子たちとギルドを組むことになったわね……」

「謎？」

「そう、あの世界に住む人達が当たり前と想っている真実は真実ではないの」
(どういうことだ？そいつは……)

「ま、ペコリーヌちゃんにキヤルちゃん……そしてコツコロたん……彼女たちにはそれぞれの問題や使命があるの。特に、キヤルちゃんは難しい立場にいるわ」

「……まあそうだよね」

三日月はそれで今までのことを回想する。

そして少し考え込むような仕草を取った。

「今、あんた達に私が知りうるすべてを伝えたとしても、解決にはならない……むしろ、行動しにくくなるだけ……気をつけて、敵もあんた達の存在に気づいているわ」

「わかってる」

「ミカ……」

三日月は考える仕草を止め、再び目を前へ向ける。

それと同時に3人はこの場所から離れるような感覚がした。

「これから彼女たちと紡いでいく絆が、きつとあんた……ユウキを成長させる。その時が来たら、昔のようにあんたの力になるから」

「ん？」

(昔……?)

オルガはその発言に少し引つかかるが、続けてアメスはオルガ達に話す。

「それまでユウキのサポートは頼んだわよ。オルガ……そしてキヤルちゃんのこともね。三日月」

「ああ、わかってる」

「うん、わかった」

それと同時にこの空間より三人は転送され、元の地点へ戻っていった。

そして一人となったアメスはため息を付き、あることをつぶやいた。

「……オルガ・イツカ、三日月・オーガス……この世界には本来はいない……だからこの「終わらない戦い」を……きつと……」

そしてアメスは再びなにかの作業に戻っていくのであった。

「三日月様？」

「…ん？」

「どうなさいましたか？心、ここにあらずというご様子でしたが……」

「いや、別に……」

三日月はアメスの言った言葉が引つかかっていた。

それと同時に、これからなるべく気にかけていこうと思うのであった。

同時刻、オルガとユウキが目を覚ますと目の前にはキヤルがいた。

「はあ…よかった…ふたりとも死んで事故物件になるとこだったじゃない」

「なんて声出してやがる…こんくれえなんてこたねえ……」

「うん、大丈夫」

オルガはいつも通りの詠唱をして、ユウキもガッツポーズをしていた。

「はあ…大丈夫みたいね」

そしてそれから数分後、やっと机を作れたペコリーヌの姿があった。

「おー」

「どうですか？美味しくご飯、食べられそうですよね？」

「いいんじやねえの?」

見掛け倒しではなく、意外と頑丈に作られていた。

(DIY…つてやつか? そういうのも得意とはすげえよ…ペコリーヌは…)

「あんた料理といい、ホント器用よね」

「いやあ、修行の旅のおかげですかね☆」

「うん、いいね」

「ありがたいございます! さあ、テーブルを中に運んじやいましょう」

そうして4人でテーブルを持ち上げ、家の中に入れようとするが…?

「あれ?」

「あ?」

「ちよ」

「?」

どう角度を変えても玄関に入らないのだ。

この家で一番大きな入口であるにも関わらずである。

そしてその事実を知った時、オルガとペコリーヌは項垂れた。

「ヴァアアアアアアアアアアアアアアアアツ……」

「オーマイ……」

「…ドンマイ」

なおそんな二人にドンマイと言うユウキであった。

結局、ペコリーヌはその机を切り、サイズを小さくする作業をする羽目になったのであった。

「リマリマリマリマ〜♪」

そして場面は再び森の中、荷馬車をリマに引いてもらっている最中であつた。

「助かりました…」

「もう一時はどうなることかと…」

「うん、すごいよ」

「大げさだよ。まあ、この森に魔物は居ないけどたまに…」

リマが話している最中に道を塞ぐ輩が居た。

「え？」

「げへへへへへっ！」

「ひひひひひっ！」

「は？」

どうやら盗賊に出くわしてしまったようだ。

「でたー!!」

「え? え?」

「盗賊よー!!」

「えーっ!!」

(迷惑だな……)

「おい、ここを通りたかつたらそのロバを…ロバ? 馬?」

なお盗賊の一人はそのリマを奪いたいらしいが、ロバでも馬でもないその彼女を見て何かと決めかねていた。

「ひどいっ! せっかくおしやれしてるのに!」

「ロバじゃないのか!」

「構わねえ! とっ捕まえて見世物小屋だ!!」

盗賊達はとりあえず考えることを止めて、リマを捕まえようと3人で取り掛かった。

「やめてえ、こういうことはお互いをよく知ってから」

「リマ様!」

(……こうなったら……)

そして三日月は静かにバルバトスを展開しようとするが――

「ちきしょうあばれんなこのロバ！」

「カツチーン……だから……ロバじゃないって……言ってるのに……！」

リマは静かに剣を抜き、そしてまとわりついていた盗賊たちを振り払った。

「こんなお洒落したロバがいるわけないでしょ……！」

「ひっ!?」

「必殺!もふもふストライク!!!」

その必殺技により爆発が引き起こされ、盗賊たちは一斉に何処かへふつとばされた。

「ふんっ強引な人は嫌い!」

(すごいな……アイツ)

三日月はその強さに感心しているとぐうつとリマのお腹の音になる。

「リマア……戦ったらおなかすいちやったあ」

そうするとどこからかリングゴを取り出す。

「貴重なものだけど、背に腹は代えられないし。はむっ」

そのリングゴをリマがかじると途端にリマが光りだした。

そしていつの間にかそのリマは……獣人からキャルなどと同様に獣耳が生えた「人」となっていたのだ。

「メタモルアップルを食べると……はむっ。みんなと同じ、人間の姿で居られるの!すごい」

いでしょ?」

「あ……………あ…」

「え……………」

(この世界の動物って人間に変身できる…………いや、それもなんか違う気がする)

コッコロとスズメが言葉を失う中、三日月は三日月で考えていたが、答えは出ないの
は言うまでもない。

「うーん! ……はあ…終わったわね…」

「なんとか日が暮れる前に片付きましたね」

「かんぺき!」

「ああ、なんとかな」

時は夕暮れ、掃除組はなんとか掃除を完了したようで、彼らの前にはまるで見違える
かのように綺麗なギルドハウスがあった。

「…ところでコロ助とミカ達遅いわね…」

「心配ですね。ちよつと見に行つてきましようか」

「ああ、なんかあったのかもしれないねえ」

そうペコリーヌ、キャル、オルガが話していると、ユウキはふと後ろのほうを向く。

すると…。

「おかえり」

「え？」

「ん？」

「ただいま戻りました」

「ただいま」

ちやうど二人の姿があつたのだ。

買い物荷物を二人で持ちつつも。

「ミカ…」

「どうでしたか？二人共、いい買い物できましたか？」

「はい。とても」

「まあ、うん」

「全く、遅かったじゃない。コロ助、ミカ」

「うん、色々だね」

ミカその言葉でキヤルはとりあえず察する。

なにかがあつたんだらうと

「色々として…まあ、まず中を見てご覧なさい」

それを言ったキヤルの表情はとても自慢げであった。

ギルドハウスの内装も様変わりし、6人住むのに十分なものになった。

とてもじゃないが、「あの」汚い物件だったとは到底思えないほどだ。

「すごい…」

「そうでしょ。そうでしょ！あたしの掃除スキルを褒め称えなさい」

「うん、確かにすごい。」

「俺も頑張ったんだぞお……」

キヤルは引き続き自慢げのまま、オルガは死にかけのまま話を進めようとするが、そこへペコリーヌの呼びかけが入る。

「コツコロちゃん！三日月君！」

ペコリーヌがそう呼んで軽く叩いているそれはペコリーヌが作っていたテーブルであった。

「へー……これって……」

「これは……なんとも素敵な」

コツコロはそのテーブルの丸太の椅子に座る。

「どうですか？ヤバいですよね☆」

「はい。とつてもヤバいです」

コッコロのその表情はとても綺麗な笑顔であった。

皆で囲む食卓……というのが実現できそうだからというのがあるからだろうか。

一方の三日月はじつと見るものの、そこまで表情を表に出すことはなかった。

そんな様子の三日月にキヤルは声をかける。

「全く、ミカもコロ助みたいに素直になつたら？」

「……やっぱりこういうの出しにくい」

「出しにくい？表情が？」

「うん。こういうの慣れてない。直ってきたと思つてたけど、なんか」

「ふーん、まあ努力することね。オルガみたいになるのは勘弁してほしいけど」

「じゃあ、キヤルもだね」

「……あたしが？なんで……」

「なんとなく」

「はあ……？」

三日月のその言葉の真意をいまいち理解できていないからか、はてなを浮かべているキヤルであった。

Menu5 愛情たつぷりポリッジ くトワイライトな
運命をのせてく

前編

「ハアハア……」

ユウキは風邪を引いてしまったらしく、寝ながらも息を荒げていた。

「ちよ、ちよつと顔赤いわね……熱っ!？」

キヤルがユウキの額を触るとその尋常じゃない暑さであった。

「ヤバいな……普通じゃない」

三日月（とオルガ）の場合長きに渡りヒューマンデブリとして扱われていたため、劣悪な環境故に病気だのはある意味慣れたようなものであったが、その三日月の目にも普通じゃないと映っていた。

「ええ、これってちよつとまずいじゃない!？」

一方のコツコ口はゴリゴリとすり鉢で薬を作っている真つ最中であった。

「今、里でよく飲んでいたお薬を作っておりますの……で」

なおご丁寧に虫もきちんと入れていた。

「ちよつと待った！あんななにしれつと変な虫入れてんのよ！」

そして案の定キヤルの強烈なツツコミが炸裂する。

「ですがわたくしの里では……」

「そんな田舎の民間療法やめなさい！……はっ」

そこでキヤルはふと何かに気がついたようでキツチンの方を見ていると、案の定虫を使ったおかゆを作っているペコリーヌの姿があった。

「こらそこ！何おかゆに入れようとしてんのよ！」

「えっ？でも栄養満点……」

「なんでも虫で解決できるとは思わないでええ！」

「……なら火星ヤシ」

「それでも解決できないわよ！」

「俺は鉄華丼……」

「それもダメ!!」

ボケ4人になんとか突っ込みをして、流石に疲れたキヤル。

だがユウキの体調は悪化するばかりであった。

「はあっ……しようがないわね！ちゃんとした病院に連れて行くわよ！」

「オルガ、連れて行ってくれるんだろう？」

「ああ、わかったよ!!連れてってやるよ!連れてきや良いんだろ!」

何故か急にキレ気味になったオルガの言葉で、一行はユウキを背負いつつランドソルへ繰り出すこととなった。

「……で、なんであなたはキレ気味なのよ」

「なんかこうしねえと雰囲気が出ねえ感じがするからよ……」

「雰囲気？」

オルガのその迫真の（？）ものに当然ながら事情を知らないキャルは首を傾げるしかなかったのは言うまでもない。

—————

「すみませーん、急患でーす!」

一行は案内を頼りにある病院らしき何かの建物にたどり着いた。

「はいはい、どうぞされました?」

それに応えたのは変な帽子と変なメガネのようなものをした女性であった。

名前はナナカと言うらしい。

「あー……あの、ここ病院であってます?」

「あってますあってます♪」

キヤルの問いにそう答えるが、どうにも病院にしてはなにか胡散臭い。

だが背に腹は代えられない。なのでユウキを見てもらうことにした。

「主様……この方が昨日の夜から熱を出してしましまして……」

「ほほう……これは……診察室へどうぞ！」

そしてそのまま診察室へ案内された御一行。

(……なにこれ)

(なんだありや……)

なおその診察室にはホルマリン漬けの虫などが置いてあった。

診察室というより実験室の印象が映る。

「はい大きく口をあけてえ〜」

そして診察する医者もこれまた不思議な格好であった。

名前はミツキと言う。

だが、やっていることは普通の医者とは一応何ら変わりがない。

「奇妙な格好をした先生と看護師さんだけど、一応ちゃんと見てもらえそうね……」

「キヤルちゃん、人を見た目で判断してはダメですよ？」

「そうだぞ、見かけで人となりなんかわかんねえぞ？見かけがよくても中身がヤバイや

つなんて結構いるぞ？」

「…それとは話は違うわよ…。あの格好を見て不安にならないほうがおかしいから…」

「まあなんだっていいよ、ユウキが治ればいいし」

「ミカ、あんたもね……」

ユウキを心配し続けているコツココを除く4人がそう話していると――

「皆様、お静かに」

「すみませんでした」

「なんかごめん」

そのコツココに注意されるのであった。

そうしている内に診察は進み――

「これは……アレ、ですね……」

『『アレ』……ね』

「ん？」

「ナナカちゃん！すぐにオペの用意を!!」

「イエス！ドクター!!」

「「えーっ!?!」」

「なんだと!?!」

突然の手術用意に三日月を除く4人は驚きの表情を隠せず、三日月も表情が険しく

なった。

「先生大丈夫なんですか!？」

「外野は黙ってて!」

ペコリーヌのそれにも厳しくそう返す。

「頼む!俺ならどうにでも殺してくれ!何度でも殺してくれ!首を跳ねてそこらに晒してくれてもいい!!そいつの命だけは!!」

「あなたも黙ってて!!3割増しで元気にしてあげるから!!」

オルガのいつもの命乞いも受け流されてしまった。

「なんか大事になってない!？」

「か、風邪は万病の元と言いますから……」

手術室前でそう待っている面々、コッコロはご乱心なのか、なぜかお焚き上げまで始めている。

「アラ・タマ・キヨ・タマ……偉大なるアメス様……主様に力をー!」

「何やってんだコッコロオオオオオオオッ!」

「や、やめい!!」

キヤルはすぐさまお焚き上げの台を外に放り出す。

「しつかりしてコッコロちゃん！」

「アラ…タマ…キヨ……」

「ここ病院の中よ!? 下手すると大火事になるわ！」

「はっ……す、すみません……居ても立っても居られなくて…」

「勘弁してくれよ……」

その瞬間――

「ぎゃあああああああああああああああつ!?!」

とても手術しているような音ではないなにかとユウキの悲鳴が聞こえてくる。

「あ、主様が! 主様が!」

「し、しつかりなさい!」

キヤルとペコリーヌは再びお焚き上げしようとするコッコロを止めに入った。

まあこの状態で心配するなつても変ではあるのだが……。

実際三人の顔は真っ青になっていたからだ。

「こいつは……」

「まるで阿頼耶識の施術の時みたいだね」

「ああ…あんま思い出したくねえことだがな……」

一方のオルガと三日月は前世における阿頼耶識施術のことを思い出していた。

オルガはその施術を1回、三日月はそれを3回も行った……いや、行わされたというのが正しいが。

「まあ流石にそんなことはされてないとは思うけどね」

「ああ、そうだと思いたい……」

そんな一行の横を走り抜けようとする痩せこけた男が一人いた。

だがペコリーヌの足に引っかけりそのままコケた。

「ろ、廊下でたむろってるんじゃねえぞお前……つてお前ら!」

「あれ、あんた。コカトリス亭にイチャモンつけてきたやつじゃない!」

なんとあんなに太っていたあの男であった。

「い、今手術中なんだろう?」

「はい、それが……」

「今しかねえんだよ……今このチャンスを逃したら地獄から抜け出すことができなくなる

んだよお!」

「どういう意味だ?」

「ここはホスピタルじゃねえ!プリズンなんだよ!」

「「え!」」

「なんだと!」

まさかの告発?にもちろん一同は驚く。

「わりぃが……あの悪魔たちが居ない内に俺はここを抜けさせてもらおうううっ!」

そのまま男は全速力で駆け出していくが……。

「ひでぶろううっ!」

角を曲がって暫く進んだくらいのところ、その男の悲鳴のようなものが響く。

「……………な、なんだ?」

そしてその角からはなにかのオーラを発しているような折れた角を生やし、目を文字通り光らせている女性が、さっきの男を引きずり戻してきたのだ。

「あいつ……………」

「クスクスクス……………お行儀の悪い患者さんです……ベッドに戻りましょうね……………私、忙しいんですよ……………運命の人を探さないといけないんですから……………」

そして得物である斧も引きずって真っ青な顔をしている4人及び1人のところを通り過ぎていく……………。

「クスクスクス……………」

4人はもはや声にならない悲鳴であったが、三日月は冷静に見ていた。

(今のは……………この前行き倒れになってた人だよ。ユウキにおにぎり渡されてた……)

三日月はなんとなくだが運命の人について察しが付いた。

そして手術後、まさかの面会途絶であった。

「す、す、すみません。一体何の病気なんですか!？」

「コッコロちゃん!？」

なおコッコロは気絶してしまった。

「……今日のところは、お引取りを」

たがナナカはそうとしか返さなかった。

後編

そして翌日、美食殿の面々は一斉に駆け出していた。

ペコリーヌに急がされたためだ。

「急いで！急いで！」

「ちよつとちよつと、急に慌ててどうしたのよ？」

「思い出したんです。この街で噂のギルドを！」

「ど、どのような……？？」

「それは……」

ペコリーヌが言おうとした時、その診療所の前にはいかにもどこかヤバいゴロツキ連中が束で集まっていた。

「ででこいやー！」

そしてそのゴロツキ達の前に出たのはミツキであった。

「なんだありや……」

「こんな大勢で押しかけて何の用かしら？」

「ふざけんな！この街から盗んだお宝横取りしやがって！」

「…ナナカちゃん、なにか知ってる？」

「私ってば、ああいう界限の人には興味がないのできつくぱくり」

「とぼけやがって！ここにあいつがいるのはわかってんだぞ！」

一触即発のその時、どこからか大きな斧が突き刺さった。

「うわっ!？」

「朝から騒々しいですね……私の大切な人が落ち着いて休めないのですが……この、『ゴ
ミ虫』」

エリコは上階の窓からゴロツキ達の前に飛び降りる。

「エリコちゃん、知り合いなの？」

「ケンカなんかよしましょう…？《おともだち》じゃないですか…」

「話にならねえ！やっちゃまえ！」

棍棒を持ったゴロツキ達は彼女たちへ襲いかかった。

「そう……覚悟は良いですわね…？」

「……………」

なおこの戦いを終始見ていたオルガはのちにこう語る

「あれは戦いなんていうちゃちな物じゃねえ……それよりはひどい……蹂躪と言って良

「いものだ……ダインスレイヴを一斉に浴びせられたマクギリスの革命軍みてえな……」

「助けに参りましょう！」

「当然だ！」

「そうね、ここはヤバイわ」

「そうと決まればすぐに実行しましょう……ユウキ君奪還作戦を！」

『あれ』をみて諦めかけていたが、なんとか意を決した一行であった。

そしてさっさと音を立てずに内部へと侵入する。

「上手くいきそうですね……」

「主さま、今お助けしま……あつ！」

コッコロがそのユウキがいる部屋でみたものは、先程もヤバイ雰囲気放っていたエリコであった。

「あわわわわわ……」

「一番物騒な人がいるじゃない……っ！」

「……そうそう、さつき来たお友達から素敵なものを頂いたんです……きつと喜んでもらえると思いますわ……」

骸骨のようななにかから出たのはいかにもヤバそうなりングであった。

虫のように動きそうでもある。

「呪いのエンゲージリング……」

「「あああつ」」

「これどうすんの……？このままじゃ……」

「どうしましよどうしましよ……！」

「かくなる上は……」

「強固突破しかねえ……」

「ダメだよ二人共、あれに勝つのは正直俺でもキツイ」

三日月ですら難色を示すレベルであった。

「病んでいる」ような敵とは相性が悪い。

何故なら普通の敵なら踏み込まない間合いに恐れを知らずに入り込んでくるからである。

これまでの異世界でも似たような案件があった。

「ミカでもキツイのね……そしてここで騒ぎを起こしたら下の先生たちまで来ちゃうじゃない」

「ですが……！」

だがキヤルは妙案があるようで――

「……いい？あんたが鍵よ」

「……鍵？」

「クスクスクス……」

一方、こちらは今にも呪いのエンゲージリングをユウキへ掴めそうなところであった。

なおユウキには拒否権はない。

だがそんなときに何かの煙が入ってくる。

「んっ……くっさ」

それもそのはず、コツコロが下の階の一室に侵入し、お焚き上げ用のありったけの草などを燃やしていたからだ。

「偉大なるアメス様、わたくしに力をー！」

「ミツキさんとナナカさんは何をやってるのかしら……」

一方のミツキとナナカは先程のゴロツキ達に何かしらの薬を投与しているようだ

「先生、患者が泡吹いて踊りだしました！」

「オツケー！予想通りの反応ね！傷は浅いわ安心して」

この状況に気づいていないようだ。

「…仕方がありません。貴方様は休んでらして」

侵入者を許したのでは？と思つたエリコはその場より離れ、煙が発せられている地点へ向かう。

「ユウキ大丈夫よね!？」

「大丈夫か？気分はどうだ!？」

「大丈夫?」

「今のうちに!」

キヤル、オルガ、ペコリーヌ、三日月に手引でユウキは拘束をとくことができた。

「……なにかしら?」

一方のコツコロもエリコに気づかれる前に精霊の力を借りて、部屋から脱出できた。

「コツコロちゃん大丈夫でしょうか?」

「大丈夫よ、アレでコロ助はやるときはやるやつだし」

その時――

「ナナカちゃん、試したい薬があるからちよつとこつちみてて」

「はいはい。かしこまり〜」

(なんだと!?)

そうしてこちらに向かってくるミツキ。

「ど、どうしましょう…」

「仕方ない、一旦上に…」

「駄目だ」

「駄目？」

そして上にもエリコが迫ってきていた。

目をかなり光らせている。

「う、上からも!？」

「万事休すです！」

「こんなところで見つかったら何の言い訳も聞かないわ！」

「仕方がねえ…ここは俺が！」

「オルガ!？」

オルガは急激に階段を上がってしまった。

一方下からくるミツキには…。

「…こうなったら…!？」

「あー忙しい忙しい」

「あいた…」

倒れ込む演技をするキャル。

「あいたたたたたた…急に差し込みが…あいたたたた」

「あら大変。どうしたの？お腹痛いの？ちよつと見せて。そうそう、壁に持たれてもいいから」

この茶番を利用して三日月とペコリーヌ、ユウキが窓より脱出する。

一方のエリコは…

「クスクスクス…愛しいあの人と続きを…」

「うおおおおおおおおお！」

オルガがそこへ走り、特攻するが――

「ぐっ!?!」

まるでハエを落とすかのように斧を使ったただけであった。

当然ながらオルガは死んだ。

「ご無事ですか？主さま」

「ううっ……」

なんとかコツコロの妖精達によるキャッチで離脱できた。

ペコリーヌもそれに続く。

「キヤルは……?」

殿の三日月はキヤルについて気にするが――

「うーんと痛いのはどのへんかしら……」

ミツキに診てもらっている最中であつた。

そして三日月へ向けてグッドサインを出す。

「くっ……」

三日月は助けられないと少し後悔した。

一方――

「ミカ……」

「オルガ?」

「止まるんじや……」

「じゃあ」

「ちよ、ミカあ!」

オルガのいつもの希望の花は無視して、そのまま下へ降りていった。

散々見慣れたからであろう。

その後、普通の医者にユウキのことを診てもらい、実は治療自体は適正であつたこと

が判明。

ただ少々癖があるだけであつた。

「ミツキ先生の診療所……退院した人は3割増しで元気になるそうですから……」
そして一同は振り返り夕日を見る。

「明日、3割増しで元気になったキヤルちゃんとオルガ君を迎えに行きましょう」
その夕日にはキヤルとオルガの止まるんじやねえぞ……が映っているように見えたそ
うな。

Menu 5. 5 悩み多き猫と悪魔を操る少年

悪魔を尾行する猫

「……………」

キヤルは『陛下』の指示もあり、現在は美食殿に入り、ギルドの活動に勤しみつつ、ペコリーヌとユウキなどのギルドメンバーの監視を行っていた。

そして今回は――

「……………モグツ」

火星ヤシを頬張っているその男。

MS「ガンダム・バルバトス」を操る三日月・オーガスを尾行していた。

彼の力は強い。キヤルが『チート』と評したペコリーヌに負けず劣らず…いや、それ以上に強いのは言うまでもない。

そのため、その力が陛下に危害が及ぶかも知れないという彼女の考えもあり、ここ最近はその情報を集めているのだ。

そのための尾行なのだが……

(なんの変哲もないじゃない……！)

さつきから三日月がやっていることはたまに店に入ってはすぐに出たりで特になにもない。いや何もなさすぎると言っている。

(まさかあたしの尾行に気づいて……いや、あたしの尾行は完璧のはず……。足音とかも消して、極めつけは魔法で気配も遮断してるし。うん、大丈夫大丈夫)

いくら三日月と言えど、魔法の耐性などはない……とキヤルは考えていた。

実際彼はバルバトスを身に纏う装着魔法を除き、魔法は一切使っていない。いや覚えていないのだ。

魔装具などを持っていれば話は別かもしれないが、そういう類のも一切持っていないとキヤルは確認している。

(……でも、流石に単調すぎてダレてきたわ……。飽きるわよこれ……)

集中力がないキヤルは流石にこの状況に少し疲れてきたようだ。

そんな時、どこからか「やー」と声がしてくる。

「あつ。猫がいる……。猫くおいでおいで」

「にゃー……ゴロゴロ」

「ふふつ、かわいいわね……。陛下に褒められながらこういことばかりできる生活とか無いかしら……。あつー！」

と話していると、キヤルは三日月が居なくなっている事に気づいた。

「ミカがいない!？」

(しまった!一瞬こんなことしてたせいで見失っちゃったわ……どこいったの!?)

「そうだ。こういう時の魔法よ!探知魔法で探れば……え?」

魔法をすぐに展開するが、その探知の反応を見てキヤルは首をかしげる。

「え?あたしの後ろにミカの気配が……?」

先程まで前に居たはずなのに、なぜか後ろに居たのだ。

「おかしいわね……他の反応と混ざっちゃったの?でも……」

「キヤル?」

「きやああああああ!？」

急に後ろから声をかけられてびっくりするキヤル。

すぐに振り向くと、三日月が居たのだ。

「み、ミカ……?」

「どうしたの?こんなところで」

「きゅ、急に話しかけんな!びっくりしたじゃない!」

「…なんか、ごめん。食べる?」

お詫びの印かのようにミカは火星ヤシをキヤルに差し出す。

「あんたね……」

キヤルはその火星ヤシを頬張る。

「で、どうして俺のこと尾行してたの？」

「んぐっ!？」

そのミカからの発言にキヤルは火星ヤシを詰まらせる。

「ぐぐぐっ…ゴクンツ…な、な、なに!？」

「だって、さつきから俺の後ろに居たよね？」

まさかの尾行していたことに気づかれていたことにキヤルは混乱する。

（う、うそ?!バレてたの!?!だからあんな風に歩いてたわけ!?!）

「な、なんのことかしら?あたしは通りすがりのただの猫よ♪ただただ歩いていただけ

よ♪殺すわよ♪」

無理にごまかそうとするためか、どこかテンションが酷くなっていた。

「ふーん。ところで野菜の苗とか種扱ってる店知らない？」

「扱ってる店?」

「どこにあるかわからないんだけど、キヤルなら知ってる?」

どうやら今までミカが店を見ていたのはそういう野菜の苗やらを探していたからら

しい。

（なんだ。そういうことね……）

「うーん。確かそんな店があったような……」

「案内できる？」

「まあ、できなくはないわ。うろ覚えだけど」

「じゃあ、お願い」

というところでキヤルはその店の道案内をすることとなった。

「……………」

「……………」

だがミカが無口である以上、途中はどうにも気まずい雰囲気になっていた。

（ちよつと、何か話さないよ！あーもう……………！）

仕方ないのでキヤルから話すことにした。

「でも野菜の苗とか買って、本当に開拓するつもりなの？」

「少しだけ。あそこらへんの土とかどうなってるかわからないし」

「土とか気にするわけ？そんなのどこでも良いんじゃないの？」

「いや、場所によって土の質が違って、悪いと他に色々としなないといけないし」

「ふーん……………そういうものなのね……………」

その後、店で苗などを買った後、小腹がすいた二人（というよりお腹の音を鳴らした

キヤル）はケバブを買ってベンチに座って食べていた。

（なんであたし、監視していた相手の買い物の付き合った上にお腹の音鳴らして奢られてるのよ……）

何やっているのだろうか……とキヤルは自分にツツコんでいた。

ミカももちろんケバブを食べている。

なお時間はすっかり夕暮れであった。

「……で、聞き忘れてたけどどんな苗買ったわけ？」

「キュウリとトマトの苗。あと肥料も買った」

「ああそう……」

（道理でやけに荷物があるわけだ……）

「よく持てるわね。その量」

「別に、普通でしょ？俺より物持てるやつもいたし」

「そ、そうなの……？」

（どんだけ力持ちなのよそいつ……）

そしてキヤルはケバブを食べているが、キヤルの中には何かが渦巻いていた。

（これはあくまでも監視のためよ……あくまでも一時的……一時的……なのに……なによ
（これ……の感じ）

ペコリーヌなどの面々と居るときにも感じたこの胸のモヤモヤ。

これにキヤルは胸が締め付けられるような感覚がしたのだ。

(くっ……あたしはあくまでも陛下に仕える身……陛下のためにやってることなの……
やってることなの……!)

キヤルはそのモヤモヤを消すためにそう念じるが、そのモヤモヤは消えずむしろ一層
増えていくのであった。

農業の本

「ふあああああつ……眠いわねえ……」

美食殿のギルドハウスではキヤルがソファに寝そべり、ファッションの本を見つつあくびをしていた。

ペコリーヌ、オルガはお店の手伝いに、ユウキとコツコロは店に買い出しに行っており、不在である。

そして三日月はというと――

「……」

テーブルのほうの椅子に座り、分厚そうな本をペラペラめくりつつ見ている。

表紙には「農業のすべて」と書かれてあった。

「……」

(まさかこいつと一緒に留守番なんてね……)

キヤルは本を読むふりをしつつ、三日月のほうを見る。

かなり真剣に本を読んでいるようだ。

(あいつ……戦いも物凄く強いけど、こういう趣味もあるのね……でも、あんまり喋らない

から詳しくわかんないのよね……。でも一応陛下に報告しないといけないから何か知っておかないと……。戦いに強いつてだけじゃ情報不足だし)

キヤルは読んでた本を横に置き、ソファから立ち上がり、三日月のほうに近づく。

「…何？」

三日月は本を読みつつも、キヤルがこちらに目線を向けてきたことに気づき、彼女に問いかける。

(反応早いわね!?!私まだ何も喋りかけてないのに……)

「べ、別に…ミカ、あんたやけに分厚い本を読んできると思ってた」

「これ？農業の本だよ」

「農業の…あんたペコリーヌみたいになんか農業やりたいわけ？手伝いやってたとさ、やけに積極的とは思ってたけど」

「うん、いつかは農場を作りたいと思って。前からそういうのは考えてたけど、色々とおあってできなかったし」

「ふーん……。それがあんたの夢なわけ？」

「まあね。道のりは険しそうだけど……。読む？」

「わ、あたしは良いわよ。そもそも肉体労働苦手だし」

「なら良いけど」

そうするとミカは再び本の方を読み始める。

(会話が続かないわね……やっぱりこういうの苦手……)

暫く沈黙が続いたが――

「ねえ。キヤル」

「にゃ!？」

急にミカに声かけられたことにより、驚くキヤル。

「きゅ、急に話しかけんなー!ぶっころすわよ!？」

「…なんかごめん」

「はあ……」

(ホントこいつのペースはわかんないわね……マイペースって言うのかしら?)

「で、何?」

「いや、キヤルにはなんか夢はあるの?」

「夢?」

キヤルはそう聞かれると少し考え始める。

(夢なんて……私は陛下に仕えて褒めてもらえるだけでいい。褒められれば……)

「別にないわよ。こうやってゴロゴロでできればいいし」

本音は言えるはずもなくとりあえず適当なことを話すキヤル。

「ふーん。そっか……………」

ミカはそれを聞いた後、再びモクモクと本を読み続ける。
何やらメモもしているようだ。

「本当に熱心ね……………」

「ねえ、ここらへんの森とかつて開拓していいのかな」

「そんなの…管理協会のあいつに聞かないとわかんないけど、家庭菜園とかそういうのなら良いんじゃないの？つかあんた、開拓なんてできるの？」

「うん。バルバトス使えばいいし」

（ああ、そういうえばそんなのあつたわね…………ミカが持つ装着魔法…って言って良いのかしら？でもあの感じ、間違いなく悪魔よ…………しかも結構ヤバイの）

キヤルはバルバトスに対して恐れても警戒しても居た。

彼のバルバトスの力が仮に陛下に牙を向けば、いくら陛下と言えどひとたまりもないとキヤルは考えていたからだ。

（もつともつと監視しないと…………）

キヤルはそうやってバレないように色々とミカのことを見ているのだが——
（また見てる…………どうしたのかな？）

ミカはその目にとつくのとうに気づいているのは言うまでもない。

眼帯銀髪少女とツンツン猫娘

「……………」

キヤルは微妙な表情をしていた。

寝ていたはずが何故かいつの間にかテーブルに向かつて座っているのはまだいい。

そしてその上に何故か紅茶とお菓子をご用意されていたのもまだいい。

だが、その前に居る人がどうにも掴めない人だからだ。

「うむ、夢の中というのはこういうものか……」

自分より背が低い、銀髪で長髪そして左目を隠す眼帯をつけている女の子。名前はラ

ウラ・ボー・ドヴィツヒ。

だが話を聞く限りではどうやらキヤルよりは年上らしい。

何故知ったかと言うとキヤルも流石に話ができないわけではない。この夢の最初こ

そは一応自己紹介をしたからである。

だがそこからが問題であった。二人共社交的な存在が身近にいるけれど、当人自体は社交的ではないため、会話というのが生まれなかったからだ。

（全く……早く覚めないかしら………こういうときに限ってあたしはなんかよく寝てたりす

るのよね……」

「ミカに似てるわね……」

そうボソつとキヤルが呟いた時、ラウラは急に反応を示す。

「ミカ……だと？」

「……ん？なによ」

「いや、私の嫁もミカ……本名は三日月・オーガスと言つてな」

「……はあ!？」

キヤルは二重の意味で驚いた。

まさかの三日月の名前が出るとは……とそれを「嫁」と呼称したことであつた。

「なに？そつちにもミカがいるわけ？あと嫁つてなに……？」

「嫁は嫁だ。そういうものと聞いたのでな」

（絶対違う気がする……）

「まあともかくだ。お前のほうにもミカがいるのは……恐らく、平行世界の同一人物というやつだろう」

「同一人物？平行世界つてのはあんたとあたしのでだいたいわかるけど」

「ああ、漫画で読んだことがあるからな。平行世界というものは無数に存在するらしい。ならそこに同じような人物が居ても不思議ではなからう」

、（マンガで分かるもんなの…それ…）

微妙に突っ込みたくはなるが、筋は通っていたためキヤルはまあ納得した。

（でもあつちのミカはこいつと『そういう関係』になつちやつてることよね…いや、あたしには関係ないけど…あたしは陛下に仕えてるだけで十分だし）

なんとなく考え事をしているキヤルにラウラは――

「しかしキヤルと言ったな。お前、何か悩んでいることがあるようだな」

「……！」

急に急所を突いたことを良い、キヤルを驚かせた。

「な、何言ってるのよ！あたしに悩みなんてあるはずが」

「そうか？顔に書いてある…というやつになっていたが」

「書いてあるわけ無いでしょ！全く……」

当然ながらキヤルは全面的にそれを否定する。

「うむ？そうか…だが、悩みがあるなら誰かに相談すると良い。ミカやオルガ団長やその仲間たちに…」

「だから無いって……はあはあっ」

ぶんすかというような感じで少し怒っているキヤルである。

まさしく凶星というやつであった。

「……だが、最後には必ず自分で決めないといけないということは忘れるのではないぞ？」

「……自分で？」

「うむ。ミカやオルガ団長もそうやって自分自身で道を切り開いたと聞いている。他人のラジコンのようにならずにとも言うべきか」

「ラジコン……」

そうキヤルが呟いた瞬間、辺りが急に光り輝き始める。

「どうやら、終わりの時間のようだな」

「……ふんつ、やっと終われるのね」

キヤルは清々したという表情であった。

「では、またどこかでだな」

「多分あんたとはこれつきりよ。そもそも別の世界の人が簡単に会えるわけないでしょ」

「いやわからんぞ。事實は小説よりなんとやらということわざがあつたはずだ」

「事實は小説より奇なり……ね」

そうしてそれぞれ元の世界へ戻っていくのであるが、キヤルはやはりといいか、考え事をしていった。

(ラジコン：いや私はラジコンじゃないわよ。あたし自身の考えで陛下にお仕えしているだけ。それがあたしなんだから)

本人はそうは思っているんだが、モヤモヤしたなにかが晴れることはなかったのは言うまでもない。

Menu 6 旅立ちの調べくぼっちも動き出す?く 美食殿始動です!

「たっだいまー!」

「帰ったぞお……」

「キヤルちゃん!オルガ君!3割増しで元気になったんですね!本当に良かったー!」

「……寝るっ!」

「寝るぞお……!」

「「お、おやすみ……」」

キヤルとオルガはそのまま寝室へ入ってしまった。

「……なにこれ」

色々と察しつつもミカはこう言うしかなかったのであった。

翌日

皆で朝食を取っていると、ペコリーヌは初のクエストを取ったと報告してきた。

当然ながら色々であったキヤルとオルガは乗り気ではなかったが――

「うるうるうる…び、美食殿の初めてのクエストは…みんなでやりたい…なつて」
「……」

ペコリーヌが泣き出しかけており、ユウキとコツコロは寂しそうな表情。

「……勘弁してくれよ……」

「ねえ………」

「!?」

そんな様子オルガをやけに眼力強く見る三日月である。

(ミカお前………)

「あのね……あーもう！わかったわよ！行くわよ、行けばいいんでしょー!」

「ああわかったよー！いくよー！いきや良いんだろー！」

勢いで押し込まれ観念したキヤルとオルガ。

なんとかこの二人を引っ張ることに成功した4人であった。

その後、タルグム村へ出発し、順調に旅をする美食殿御一行。

その途中地点で当然ながら野宿を取ることとなる。

そんな時、キヤルは池で釣りをしていた。

「釣れないわね……いやいや……あたしが魚を釣らないと何を食材にされるかわかんない

わ! 頑張らなくちゃ!」

「……」

そんな様子を火星ヤシをかじりつつ見ている三日月である。

「大丈夫?」

「大丈夫よ! このあたしに……きたきた!」

何か掴んだようでも引つ張り上げるが、その先には貝の抜け殻のようなものしかなかった。

その後ろでコツコロは草陰の中で虫を見つけたようで皆に知らせようとする。

「ああ、こんなところに美味しそうな虫が……」

「ま、待ってくれ!」

「ちよつとコロ助! あたしがもつと美味しそうな魚釣つてあげるからそんな虫ほつときなさい!」

「そうだぞお……」

虫に未だに抵抗があるキヤルとオルガが全力でコツコロを止めるのであった。

だが結局そのあとに釣れたのは食用にもならないおたまじゃくししか釣れず。

キヤルは焚き火のところに木の即席竿を捨てるのであった。

「…あの池駄目だわ。魚居ないわ……」

「大丈夫、火星ヤシならあるから」

「ミカ……そんなデーツだけじゃ足りないわよ……はあ……」

ミカの安心させる策（？）も不発に終わってしまった。

キヤルが色々と落ち込んでいたそんな時、森からペコリーヌが帰還する。

「ただいまー！美味しそうな鳥、捕まえちゃいましたよー！」

「おかえりー」

「でかした！今日のアんたは最高にイカしてるわ！」

なんとかゲテモノ料理を回避したキヤル（とオルガであった）

「さあさあ！お待たせしました！たーんと召し上がれ！」

夜、ペコリーヌの言葉とともに料理を食べ始める面々。

「おいしー！」

「うめえじゃねえか……」

「うん、いける」

……こだわりが特に無い男性陣も舌鼓を打つ。

「鳥肉ってここまでジューシーになるの!?!?こんな初めて!」

「一緒に蒸した野菜も、甘みが増しておいしいですね」

「でしよでしよ?旅先で習った調理法なんですよ」

当然ながら面々の箸が進んでいく。

「やっぱりおいしい料理にはマトモな食材。虫とかカエル使おうなんてしちやダメよ。聞いてんの?コロ助」

キヤルがそう声をかけるとコロ助は木の实のことを見つめていた。

「どうやら知らない種類らしい。」

「…何?それ」

「ああ!鳥と一緒に採ってきた果物ですね!キヤルちゃんもユウキ君も、オルガ君と三日月君もどうぞどうぞ!」

「こんな実があるんだな…:…どれどれ」

オルガはその実の皮を剥いて食べてみた。

「おっ、結構あまいじゃねえか…!」

「とつても熟してますね〜!」

「あまーい!」

「もつとちようだい!」

「まだまだありますよ！どんどん食べちゃってください！」

ユウキ、キヤル、オルガ、ペコリーヌの4人は特に気にせずに木の実を食していく。

だがコツコロと三日月は食べようとしたときに――

「プクー…プクー」

「初めて見る果物でしたけど、採ってきて正解でしたねえ！」

木の実を食べていたカエルがプクプクと寝てしまっていたのを目撃した。

「……………」

「ヤバいな……………」

薄々その実のことに気づき始めたその瞬間、コツコロに絡むようにキヤルが入ってきた。

「コロ助えく…！ちよつとあんた子供のくせにしつかりすぎく！」

「ど…どうされたのですか、キヤル様」

「ううつ…あたし…あたしだって、本当はもつとしつかりして、あのお方のため…わあああ!!」

まるで泣き上戸のように絡んできていた。

どうやらこの実にはお酒を飲んだときのように酔っ払う作用があるらしい。

なお他の面々も似たような形になってるため、どうやら確定のようだ。

だが三日月はキヤルのある漏れた言葉を見逃さなかったようである。

(なんとなくわかってたけど、誰かがキヤルの上にいる…か。ペコリーヌと俺達を監視でもしてるのかな)

「おらおら、なにやってんだ。今日はとことんまで」

「うるさいなあ…」

オルガはまあ酒に弱いので、言うまでもなくうざ絡みをしてきたのであった。そのせいで三日月の考えはあまりまとまらなかつた。

「おはよう」

「おう、おはよう」

ユウキとオルガはちょうど同じくらいに起きたようで、池の畔に来ていた。どうやら二人共顔を洗いに来たらしい。

「大丈夫か？お前は初めての旅なんだろう？」

「うん、平気。オルガは旅したことあるの？」

「……まあな、将棋とかデカイカエルとか色々あったが……」

「しようぎっ？」

「あ、いや、こつちの話だ。そういやあいつらはまだ……」

そんな時、突如としてユウキの後ろに狼のようなモンスターが現れた

「…おい！ユウキ！」

「？」

ユウキは気づいていないのか特に表情が変わっていない。

そしてその狼がユウキを食べようとしたその時…

「くっ！」

（仲間を守るのは俺の仕事だ！）

その狼にオルガが飛び込んだ。

そしてそのまま狼に食べられた。

「ぐっ!?!」

「そろそろ……オルガさま!?!」

そして続いてコッコロとキヤルが気づいた途端に、モンスターは凄まじい勢いで走り去った。

「「わあああああああああ!?!」」

当然ならペコリーヌ、キヤル、コッコロの3人は驚いた。

ユウキはキョトンとした表情で状況を理解できておらず、三日月は「また？」とやれ

やれとした表情になっていたような。

狼のような怪物に食われかけていた俺は、急に口から放されて木に激突した。

それで暫く気絶していたんだが、横からある声が聞こえてくる。

「あ、頭から突っ込んだじゃってましたよ!」

「だから言ったじゃないか!もうちよつとひきつけてからって!」

口調は違うが、同じような声質な気がした。

それで目を開けると、目の前には木を切った置物に顔が書いてあるようなものがあった。

なんだ…これ?

「お、お怪我はありませんか?」

「……は?」

その声はどこかダミ声であった。

いや本来は普通に話せるやつがダミ声を出している感じってやつだ。

「よ、余計なことかとお、おもいましたが、魔物に襲われていたご様子だったので」

「……」

とりあえず起き上がることにする。

ちなみに俺の体はなんともねえ……いや、恐らく途中で希望の花が発動して蘇生したからだろう。

昔より体の耐久力が減っちゃまったんだよなあ……

なおその木の置物には細工がしてある様子はない……でも声が聞こえるのは……魔法かなんかか？

そう思い、辺りを見回すと……

「は、はわわ……」

その木の陰に一人のエルフの少女がいた。

全体的に緑色の装いで、後ろには弓と矢を抱えている。

「……お前が助けてくれたのか？」

「ん……んぐぐぐぐ……」

「サンキューな、助かった」

それで置物を彼女に渡した。

「ど、ど、どういたしました！あつ！私つ、アオイといいます！」

「俺は……鉄華団……じゃねえ……美食殿の……オルガ・イツカだぞお……！」

彼女の自己紹介に俺はいつもの返しで返す。

今の俺は団長じゃねえから、こういうのになっちゃったが。

癖になっちまってな……

「ところで気になってたんだが、お前の他にも誰か居たのか?話してたみてえだが……」
「わ、私、怪しいものでは!ただ人形と話すというだけで」

十分怪しいじゃねえか……

まあ今まで色々と変なやつを見てきたから、今更人形で変とは思わねえけどな……。
バエルバカ、将棋やらデスデス言うやつ、女神っぽくねえ女神やら……。

希望の花を持つ自分で言うのもアレだがオンパレードすぎて感覚が麻痺してんだよ……。

「え、えつと……この木の物は友達ができた時のための練習用人形「だいじよぶマイフレンド君1号」です」

「なんなんだよそいつは……」

「私、動物や植物とはお話できるんですけど、人間の友達が一人も居なくて……友達が欲しいって、ずっとずーっと思ってたんです……それから早数年……自分でこしらえたのだいじよぶマイフレンド君1号と話していたんですが、流石に会話のレパートリーも枯渇してしまい……きつと私みたいな者には友達なんて10年早いんです」

……深刻だな……

よほどの引っ込み思案ってやつか?

まあ友達なあ……

「そんなにか？」

「だって友達ができるって、凄いいことでもん……でも、いつかは……いつかは……ぼつちとさよならしたい！それが……私のささやかな夢なんです……」

「ささやかな夢……か」

それが夢つてのは俺にとつては夢にはならないだろうと思う。

だがアオイの様子を見る限り、あいつにとつては多分相当なものなんだろう。

やけに表情が明るく出そうにも暗い雰囲気のままなのはその証拠だ。

「あ、すみません。長々とお話してしまつて……ではオルガさん、まずここから魔物がいないところに……」

「……いや、ちよつと待て」

「え？」

なんというか、こいつ……アオイのを見ているとどうにも放つておけねえ。こういうやつとは出会つたことは今までなかった分、余計にそう思う。

……なら、俺が一肌脱がねえとな……！

「俺も友達つてやつは少ない……いや、殆どいないつて言つても良い」

実際俺も友達つてのはよくわからねえ。

ミカとは相棒だし、鉄華団のあいっらとは家族だったし、名瀬の兄貴は兄貴分、マクギリスは論外。今までの異世界のあいっらともなんか違う。今の美食殿とも家族と言えるだろう。

まあアオイにとっては違うかもしれないねえが…少なくとも俺はそうだ。

「だからよ……一緒に友達を作る方法ってやつを考えてみようじゃねえか?」

「作る方法……え?……ええええええええ!!」

それをアオイが聞いた途端、言い表しにくい悲鳴的なものが響く。

「ほ、ほんとですか!? そんなエルフ栄誉賞レベルの素晴らしいことを、お願いしてしまつて良いんですか!?!」

「おう」

エルフ栄誉賞レベルって……大げさじゃねえか……。

だがアオイの目はキラキラと輝いていた。

「オルガさんと一緒に友だちを作っていく! 新チーム結成です! わーーーーー!」

だから大げさだぞお……

まあ喜んでくれるのは何よりってやつだが。

「じゃあ名前は……BB団ですわね!」

「BB団？」

「バイバイぼっち団の略称です！もちろんオルガさんが団長です！」

「……お、おう？」

久しぶりに団長と呼ばれた俺…。

だが悪い気はしねえな……

そう何か盛り上がりはじめたその時に――

「オルガさまー！」

「オルガくん！大丈夫ですかー？」

そこにコッコロとペコリーヌ、キヤル、ミカ、ユウキが駆けつけた。

「大丈夫、オルガ？」

「お前ら……こんくれえなんてこたねえ……！」

「いつも通りの強がりねえ……ホントあんた打たれ弱いんだから」

「ぐっ……」

キヤルの言う通り、打たれ弱すぎる俺だぞお……。

あんま否定できねえのが……！

だがそんな風に話していたからか。

「……………」

アオイはいつの間にかコンピューターのフリーズのように固まってしまった。
……こりや道のりはなげえぞ……。

アグニカ仮面、襲来

そのあと、一同はアオイの後ろからの案内もあり村へ到着。

そこで出迎えたのはフォレストイエのギルドマスターであるミサトであった。

なお到着した途端、アオイはすぐにミサトの後ろに隠れてしまった。

「ようこそ、タルグム村へ」

「あの…この募集を見まして」

「あなた達のギルド名は？」

「わ、わたくしたちは…その…」

「鉄華d」

「オルガは黙ってて」

「すみませんでした」

オルガはわかっではいるものの、何故かいたくなくなるようであった。

「はいはい！ 私たち、美食殿っていうんです」

コッコロにぺろっとした表情をするペコリーヌである。

「私は、フォレストイエのミサトです。この子の他にも、ハツネという子がこの村に来て

るんですが……今はどこかでお昼寝中みたい。ふふ」

ミサトは良く微笑んでいる。

ミサトは普段は保育士として活動しているため、母性というものがよく出ている。

「今年は豊作で、人手が足りなかったから助かるわ。他にも、エリザベスパークの子たちと……」

「エリザベスパーク？」

「どうしたの？」

「以前、お世話になった方がそのギルドに……」

「うん、お世話になった」

コツコロに同調する三日月である。

「あら。顔見知り？それは……」

そんなところにある声が割り込む。

「ミサト。こちらの準備のほうが終わったのだが……」

「あら、モンタークさん」

「……あ？」

オルガと三日月にとってはやけに聞き覚えのある声。

その方向へ向くと、スーツ姿で金色の仮面に灰色の髪……間違はなく「アイツ」であつ

た。

「この方は……?」

「ああ、紹介するわ。収穫をお手伝いをしてくださる「モンターク商会」のギルドマスター。モンタークさん」

「ご紹介に預かったモンターク」

「何やってんだあああああああ!」

ドゴツ!

「准将!」

そのモンタークをいきなりぶん殴るオルガであった。

その殴られたモンタークは後ろに居た副官に支えられ、倒れることはなかった。

そして仮面が少しズレ、隙間からは金髪が少し見える。

そう、言うまでもないがこのモンタークこそ「マクギリス・フェアイド」である。

アグニカバカ、バエルバカ、ロリコンの三重苦だが、本人はとくに気にしていない。

なおその後ろの副官は「石動・カミーチエ」マクギリスを前世から引き続き支えている人である。

「あら? お知り合い?」

「ちよ、オルガ!? 急に初対面の人殴っちゃ不味いでしょ!」

「お、オルガさま……」

「？」

「大丈夫だ、初対面じゃねえからな」

「あらあら、感動の再会というものですな」

「感動の…再会…？」

ミサトは天然であるためか目の前でモニターが殴られても特に動じてなかった。

それに対してキヤルは言うまでもなく首を傾げていた

「全く…久しぶりの再会なのだが、急に殴るとは想定外だった」

「准将、大丈夫ですか？」

「ああ、まあ殴られること自体はなれているのでね…」

仮面と髪を直しつつもそうボヤク。

そしてオルガ達はペコリーヌ達に話を聞かれないように少し場所を違うところで話すこととなった。

「なんでチョココの人がいんの？」

「何、私は取引先の手伝いをしに来ただけだ。それ以上でもそれ以下でもない」

「本当か？またなにか仕組んでいるんじゃないのか？」

「私とて愚かではない。今後も君たちとは良い関係でいたいのでな」

「あのな……」

マクギリスに上手くかわされてしまったオルガであった。

「准将のおっしやるとおりだ。我々は君たちに害を与えることはしない。これは誓おう」

「石動もいんのかよ……どつかの世界ぶりだが……お前、相変わらずこんなアグニカバカでもついでいくのか？」

「妙なあだ名で呼ぶな。私はどこまでも准将についていくと誓った身だ。それを破ることはない」

「はあ……」

オルガは見たことがある面子とやつと出会えたのだが、むしろ厄介事を押し付けるやつだったため、ただただため息をつくしかなかった。

対する三日月はまあなれていたこともあり、普通に火星ヤシを食べているだけであった。

その後、村を見て回る美食殿の面々だが、何故か寝ながら空中浮遊している女の子を目撃した。

「な……なにあれ……」

「おおう女の子が宙に浮かんでますね」

「楽しそうに言っている場合じゃないでしょ!？」

「あ…」

そうこう言っている内に村の中央にあった鐘に衝突し「ゴーン」と鐘を鳴らして、その女の子は落ちていった。

「「うわあああああああああああああ!?!」」

「ヴアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?!」

落ちたところに一目散に駆け寄るとプカプカと寝たままの女の子の姿があった。

「まだ寝てる……」

「あの…」

「ふがつ?！」

コッコロが呼びかけた途端に鼻提灯をパチンと割って起きた。

「あれ?なんでこんなところに?」

「大丈夫ですか?あなた、あそこから落ちてきたんですよ?」

「えー!?!私また空を!?!」

ペコリーヌの説明に彼女は「また」と言う辺り、どうやらよくあることらしい。

「また?」

「あー！気にしないで！私はハツネ。ちょっと寝ぼけてただけの普通の女の子だから（いくらなんでも寝ながら空を飛ぶ女の子なんて聞いたことねえぞ……）」

様々な世界を回っているオルガでも流石にこれはツツコミたくもなかった。

一方ユウキはただただ関心しているだけであり、三日月も火星ヤシを食べているだけだった。

その頃、マヒル、リマ、リン、シオリからなるギルド「エリザベスパーク」の面々はタルグム村へ向かう途中。その一行と同じ姿なまさに「ドツペルゲンガー」な不気味な魔物らしきものと遭遇し交戦していた。

「タイミング合わせて！シオシオ！」

「はい、マヒルさん！」

マヒルは間合いを詰めて技を放つ。

「フォークスラーツシュ！」

そしてシオリは弓を放ち、黒いリマの体制を崩す。

「いくよー！」

「オツケー！」

リンはリマの肩に乗り――

「ダブルヒップアタック!!」

同時攻撃であった。

「ナイス、リンちゃん!」

「リマも流石ですなあー」

「前衛を崩せばこつちのもんだべ!」

最初は対処に手間取っていた面々だが、徐々に技量の差で追い詰めていたのだ。

「ダイ……ジョウ……ブ……ダイジョウブ……」

「同じことしか喋らないし、動きもぎこちない……この調子なら……」

だがその時、別の方向から何者かによる衝撃波が放たれた。

それと同時にその魔物と、巻き添えで味方の面々が吹き飛ばされてしまった。

「わああああああああああつ!」

「うああああつ!」

それはまさに森の一部を抉ったも同然であった。

木はなぎ倒され、土煙は舞い上がった。

「楽しそうな催しが行われているではないか……あながち、私の勘も的外れではなかつ

たようだ。始めまして、かわいい獣人達ビースト：私はクリステイナー！」

そしてその先にいたのは：なんと王宮騎士団「NIGHTMARE」の副団長。「クリステイナー・モーガン」であつた。

「立ち上がるが良い、まだ踊れるだろう？私をがっかりさせないでくれ」

「へー、あなた達も収穫に？」

「よろしくお願ひいたします」

「こつちこそよろしくねー。なんだか賑やかになりそう♪わつくわくだよ〜久しぶりに妹にも会えるし」

「妹さんがいらつしやるんですか？」

「そうなの。エリザベスパークにね。病気で療養中だったんだけど、少し具合が良くなったみたいなの」

こゝうハツネが美食殿の面々に話している中、当のシオリは衝撃波に吹き飛ばされ、気を失いかけていた。

「さっきのは…一体…ゴホツ…ゴホツ…ハアハアハアツ…」

病弱であるがゆえに彼女も限界であつたのだ。

「おねえ…ちゃん…」

「ダイ……ジヨウ……ブ……」

そして彼女の目の前には彼女と同じ姿をした先程の魔物が居た。

まるで壊れたテープのように同じ言葉を繰り返していた。

「……………」

そしてその魔物が近づき、彼女の目と鼻の先についた瞬間、その魔物に混ざるがごとく包まれ、そしてどこかへ消えてしまった。

一方、村の高台では双眼鏡を手に取り、森のほうの様子を見ていたモニタークことマクギリス。

どうやらその「異変」に気づいたようだ。

（やはり「彼女」の言っていた通りか……これは……）

「准将、やはり……」

「ああ、この場を頼む」

「ハッ！」

（アレに関しては予想通りとも言えるが……先程の遠方の衝撃波は間違いなくあのナイ

トメアの「副団長」によるものだ。厄介な者まで来ることになるとは……全く、困ったものだ。）

マクギリスは仮面をつけつつもその表情は笑いはない、むしろ緊張したものであった。

ここからまた一波乱が始まるのは言うまでもなかった。

Menu7 闇穿つ光

シャドウ達の調べ

そのような騒動を知らない美食殿の6人は依頼通りに収穫作業に精を出していた。

「水はけの良い土でございますね。常日頃、手入れされておられるのでしょうか」

そんなコツコロに相槌を打つユウキである。

「へえ、これがスパイスの元になる植物？」

「へー、こんな形なんだ」

「キヤルちゃん、三日月君。この香りを嗅いでみてください」

ペコリーヌが持ってきたのは何かの実のようである。

キヤルとペコリーヌは近くで匂いを吸い、三日月はそこから少し離れて匂いを吸ってみると

「いいにおーい。お腹空いてきちやうわ〜」

「うん、メシ食いたくなる」

「ですよねえ〜」

「おいおい、まだ早えぞ?」

「わかってるわよ。オルガ」

そうしているとハツネ、ミサト…とその後ろに隠れているアオイが様子を見に来てくれたようだ。

「おーい」

「旅の疲れは取れましたか？」

「おいつすー！元氣百倍ですよー！」

「今は空飛んでこなかったの？」

「大切な収穫だからね。超能力使うと眠くなっちゃうから今日は封印なの」

「？」

目をパチクリさせる三人。それすらしないユウキ君。

「超能力？」

「……なるほどな」

なんとなく経験から察した三日月とオルガ。

「「ええ!!」」

「あ…あ、ごめん！今のなし！忘れて!!」

「ちよ、ちよつと待って！あれってなんかの魔法とかじゃなくてなんかの超能力だった

の!？」

「わたくし、超能力者に初めて会いました…みらくる〜」

「もう手遅れよ？」皆さんいい人そうだし、ここだけの話にしてもらいましょう」

「秘密つてやつですぬ！やばいですね☆」

「軽いわね！あんたちよつとは動揺しなさいよ！！つかなんで男3人も驚いていないのよ！」

「もうそういうの慣れちまった」

「うん、まあ…よくあることだよね」

「オツケー」

「ユウキはともかくオルガとミカはなんでそこまで冷静なのよ!？」

そうキヤルがぜえぜえしながら突つ込むと何かの大声が耳に届く。

「た、大変だー!!」

「ん?」

その声の方向へ一同が駆けつけると村の中央の大木近くで住人たちに囲まれて介抱されている3人の姿があつた。

それはマヒル、リマ、リンと牧^{エリザベスパーク}場の面々であつた。

「リマさまー!」

「大丈夫？」

「ここ、コッコロちゃんに…三日月君？」

「一体何があつたの？」

ミサトがそう言うのと痛みを我慢しつつもマヒルがなんとか話し始める。

「うっ…村に来る途中…オラ達と同じ姿の奴らに襲われたと思つたら黒ずくめの女剣士が現れて……」

「……！」

それになんともなく勘づくキヤル。

「シオリン…シオリンはどこ？」

「ごめん、襲われている途中で見失っちゃつて…」

「でも、リマ頑張つたんだよ？ボロボロになるまで戦つて…あたしとマヒーをここまで運んでくれて…」

「リマ様、お手当を……！」

一番傷が深めのリマにコッコロは駆け寄る。

「ありがとうコッコロちゃん。でもどうしてここに？」

「わたくし達も収穫のお手伝いに……」

「こいつは……」

「噂はほんとうだったんだ！」

「……？」

「噂？」

ハツネと三日月が村人に耳を傾ける。

「森の中で自分と同じ姿を見かけたり、そいつを守るか如くゴーレムがその周りにいるとかって話が後を絶たなくなっただけな」

「そーいや宿屋のところが旦那も行方知れずだし……」

「!?」

それを聞いたハツネは顔色を変えてリマに駆け寄る。

「ちよつとごめんね！」

「？」

そしてリマの額と自分の額を合わせて超能力の一つ「サイコメトリー」を使用する。

それにより相手の記憶を読み取ることができるようになるのだ。

それを感じた後、更に表情は慌てたものとなる。

「シオリン……！」

一方の森の中、騎士団副団長のクリステイナは自身が暴れたせいでズタズタに荒れ

たところに佇んでいた。

そしてその周りには黒きシャドウと呼ばれるものが集まっていた

「派手にやりすぎたか……」

そして剣をそのシャドウのほうへ向けると同時に発生した衝撃波でそのシャドウの一部を消滅させる。

「あれがシャドウか……あの御方は一体、何をしようとしているのか……まあいいさ。あの御方ほど私の渴望を満たしてくれる存在は居ないのだから……」

そしてそのままクリステーナは立ち上がる。

「さあ……そろそろ第二幕の始まりだ……」

それとともにシャドウは一気に動き始める。

「コロセ……ファセ……コロセ……」

黒い人形のような……いや人形とっていいか怪しいものだが

着実に何かを求めていた。

「楽しいなあ……次はどんな調べを奏でてくれる？ さあ、盛大に行こうではないか！」

その中にはシオリのような人影と

その人の形よりも大きい機械のようなシャドウも多数動き始めていた。

「離して！シオリンを助けに行かなきゃ！」

「落ち着いて…一人じゃ無理よ？」

「でも…！」

無理にでも行こうとするハツネをなんとかミサトは止める。

そこに――

「待って！私も一緒に行く！シオリちゃん、お姉ちゃんに会うの楽しみにしてたから」

「リマ様…」

そう言うと同時にオルガとユウキも前に出てくる。

「……ならさすがに女だけってわけにはいかねえな。俺とユウキもいくぞ」

「うん」

「お、オルガさんとユウキさんも!？」

「俺達はお前らみたいに強くねえから盾くらいにしかならねえが…今回はそれでも行かねえといけねえ気がするんだ。長年の団長としての勤だがな」

「うん、カン」

「だ、団長として……わ、わかりました！私も行きます！ほ、ほら…森の中だと私もミジンコくらいには役に立ちますし…」

「そこまで卑屈にならなくてもいいぞ…ミカ、お前はここに残っててくれ」

「うん、わかった」

「主様、オルガ様。わたくしも同行いたします」

「ウン」

「みんな…ありがとう」

感謝を述べるハツネ。

その光景を見ていたペコリーヌも…

「私達も…?」

それ乗ろうとするが後ろに行っているキヤルの姿に気づく。

「…キヤルちゃん?」

「……?」

当然ながら三日月も何かを察しながらも火星ヤシを食べていた。

そして森の中。

オルガ、ユウキ、アオイ、ハツネ、リマ、コツコロの6人は森の中を探していたのだが、アオイは妙な違和感に気づく。

「森の気配がおかしいですね…何かに怯えて息を殺しているような…」

「息を殺している…だと?」

「私、空から様子見てくるね」

そしてそのまま空を飛ぶハツネ。

「リママ!? ハツネちゃん空飛べるの?」

「あれは魔法です」

「超能力つじや…むぐつ」

「まあそういうことだ」

(それ言っちゃ意味ねえぞお…!)

やれやれと思いつつユウキの口を塞いだオルガであった。

(シオリン…どこにいるの…?)

そう様子を見ているとハツネはどこからか射撃を受ける。

なんとか直撃は免れたが、そのままハツネは落下してしまった。

「今のは…!?!」

「あ!」

「ハツネ様!」

「ハツネさん!」

「こいつは…!?!」

そのまま落ちる方へ一同は一斉に駆け出す。

「あれは…」

なんとかハツネが起き上がるとその前には一本の矢。

そしてハツネが脳内である一つの可能性が芽生えたがそれに考える余裕も与えられずに後ろより草を掻き分ける音。

「……！」

そしてハツネの目の前にはその「シオリ」が姿を表した。

「シオリン！良かった…無事だったんだね……!?!」

駆け寄ろうとするが雰囲気が違うことにハツネはすぐに気がつく。

それと同時にシオリが全体的に赤紫に染まった。

「…シオリン…?」

そして左手を変化させ弓なようなものを出したと思いきや

「…エンチャント…アロー…」

それと同時にその弓をなんのこともなくそのまま発射。

ハツネはギリギリでシールドを貼る。

「シオリン…どうして!?!」

その威力は通常のよりはとてつもなく、辺り一面の木々をクレーターのごとく消し飛ばしてしまふ。

ただ平らな開けた場所になってしまった。

「フヤセ…フヤセ…ワレヲ…フヤセ…」

そしてその場に一同が駆けつけた。

「ハツネさん！」

「ど、どうしたんだ…?」

体操座りのごとくそのまま佇んでしまったハツネ。

そしてその近くのは弓矢が刺さっていた。

「その矢…」

「まさか…さっきの攻撃は…」

「シオリン…」

シオリがハツネに弓を向けた

これが明確に表された瞬間だった。

だがユウキとオルガはそれでも意志は折れなかった。

「行こう！」

「ああ、恐らくシオリに何かがあつたに違いねえ…行くぞ」

「…そうだね。行ってちゃんと確かめようよ！」

「……！」

そしてその涙をハツネは拭う。

「……もう一度会って確かめる！」

一方、村の高台で何かを見つめるキヤル。

その表情はどこか悩みのものであった。

「……多分、そういうことよね……この騒ぎを起こしている魔物つてあのお方の……」
手を頭に抱える。

(……あたしの使命はペコリーヌの監視……シャドウの動向には聞かされていなかった。恐らく、このままだと村ごと……！)

「……キヤル？」

そこに声をかけたのは三日月であった。

「あんた……」

「よかった」

「よかった……？」

「また難しい顔してたから、少しだけ心配だったんだ」

「な、何言ってるの？ たまたまそう見えただけでしょ？」

「そっか、わかった」

そうしてそのまま立ち去ろうとする三日月だが、そこでも少し足を止める。

「キヤルが何考えてるのかよくわかんないけど、それは多分、キヤルが自分で決めないといけないことだと思う。俺はキヤルがきちんと自分で決めたことなら何も言わないから」

「……………」

「それじゃあ、あとペコリーヌも探してたからあとで行つといたほうが良いよ?」

「……………ふんっ!」

そして三日月はそのまま村の表へ向かっていった。

「……………」

(自分で決めること……………そんなの……………)

だがその次の瞬間

「きやああああああああ!」

村人の悲鳴が聞こえてくる。

そして村の表ではシャドウが村にまで迫ってきていたのだ。

「皆さん!落ち着いてください!避難してください!」

そしてその村人に避難を呼びかけているのは石動であった。

「チヨコの副官！これは…」

「私まで妙な名前で呼ぶな！シャドウがこつちにまで現れたようだ」

「うわあああああん！」

「子供が…！」

「まずい！」

躓いてころんだ子供が今にもシャドウに襲われそうになったその時

「お待たせー!!」

「あっ…」

「もう大丈夫！悪い魔物はやつつけちゃいますよー！」

「ありがとうお姉ちゃん！」

「…！」

そしてどこからか射撃音

「ちっ！」

即座にバルバトスルプスレクスを身にまとった三日月が前に出てそれらを全て弾く。

阿頼耶識により即座に対応できる特性は変わっていないようだ。

「三日月君！」

「大丈夫？ペコリーヌ」

「はい！ゴーレムみたいなシャドウが…」

「厳密にはゴーレムじゃないけどね…」

「ゴーレムじゃない？」

「…なんでもない」

（モビルスーツ…何故…？）

そう前にいるのは村の入口の門の上のシオリの他にも量産型モビルスーツ「グレイズ」「グレイズシルト」の形をしたシャドウの姿も他の人の形のシャドウとは別に存在していたのだ。

三日月も流石にここは悩んでしまう。

モビルスーツは一部例外を除き言うまでもなく三日月の世界にしか存在し得ないものだ。

それが急にここに現れた以上、無理はない。

（…久しぶりだけど…やばいな）

「あれは！」

「まさか村が襲われて……！」

「急いで戻らないと！」

「ミカがいるとは言え……こいつは……！」

村の様子を遠くから確認した一同は戻ろうとするもそれを呼び止める一人の女性。

「まてまて……今から楽しい幕が開けようかというのに……つまらんことはしてくるなよ？」

「ああ？おばさ……ぐっ?!」

全てを言う前に斬撃でオルガが死に、言うまでもなく希望の花が咲いた。

「オルガさん!」

「勘弁してくれよ……!こんくれえなんてこたねえ……!」

「ほう、立ち上がれるか……」

「みんな気をつけて、私達を襲った剣士よ!」

「あなた、この騒ぎについてなにか知っているんじゃないですか？」

「ふふふっ……知りたいことがあるなら……剣で語り合おう……!」

そして少し歩き出したと思いきや急に勢いよく、そしてまずはリマに

「ふんっ!」

だがその剣は当たらずにそのままギリギリ……いや本来はあたっているはずなのに避けられました。

「リマー!？」

「!？」

「しまっ……!」

ハツネの前にユウキが出て庇おうとするが剣すらそのまままるで意味がないかのごとく通しそうになるが、コツコロがかけた魔法でなんとか致命傷自体は避けられた。

だがそのまま転がり、気を失ってしまった

「主様!」

「ユウキ君!」

「ユウキさん!」

「ユウキ!!ちっ!あああああああああ!」

いつもどおりのオルガの銃撃も通用しない。

「結構あたんねえじゃねえか……」

「ほう、なんとも奇妙な飛び道具を使ってくるとはな。だが……!」

「しまっ!」

だがそこから別方向から撃たれた「レールガン」

「待ちたまえ」

その方に来たのは黒いスーツに仮面を被った男。

モンタークであった。

「ほう…なんだ？変な仮面をつけているようだな」

「も、モンタークさん…？」

アオイがそう言うとその男は仮面を外す。

「君の相手は私がしよう」

その仮面から出てきた素顔は言うまでもなくマクギリスであった。

「マクギリスじゃねえか…」

光と 闇 (シャドウ)

「ほう、また一人…どうやらお前は子羊よりは楽しめそうだな」

「レデイと戦うのは心苦しいが団長達を助けたいわけにはいかなのでね…はあっ！」

それとともにマクギリスはあるものを身に纏う。

もちろん言うまでもなくそれはモビルスーツ「ASW—G—01 ガンダム・バエル」であった。

ガンダムフレームと呼ばれるモビルスーツで一番早くに作られ、厄祭戦においての英雄「アグニカ・カイエル」が搭乗した原初にして最強のガンダム。

「ほう…なかなか奇抜な鎧だな」

「気に入ってくれてなにより。アグニカ・カイエルの伝説の機体だ」

(またお前は…アグニカバカじゃねえか…)

「面白い！」

「…！」

クリステイーナがまず接近しバエルに攻撃をしようとする。

だが

「何?」

バエルの軽快な動きで回避されてしまった。

バエルは阿頼耶識システムにより一見重いその装甲となっていてもまるで新体操のように身軽に回避できるものだ。

バエルの阿頼耶識システムは厄祭戦当時のオリジナルであり、なおかつマクギリスとの相性は格段に高いため、常人では回避できないことでも回避が可能なのである。

「君のその能力の正体は相手の行動や能力を瞬時に計算することで当てるルートや防げるルートを導き出すもの…逆に言えば当人の予測できないことには対処はできない」

「オマエ…どこでそれを知った?」

「何、私の知り合いにそういうことに詳しい人が居てね。そこから聞いただけだ」

「なるほど…そうこなくてはな!だが次はそうも行かんぞ」

「ほほう…これだけでバエルの全てがわかるとは心外だな。アグニカ・カイエルの力はそれだけでは測り得ないものだ。もともと私もそのアグニカ・カイエルを再現できているかと言われればNOと言えるが」

「……」

(もう黙ってるお前)

マクギリスのアグニカアグニカに流石に切れ始めたオルガである。

「オルガさん、あの仮面…金髪さんってオルガさんの知り合いですか？」

「腐れ縁ってやつだな…そういうやユウキはどうした！」

リマとコッコロが即座に駆け寄って容体を確認する。

「気を失っているだけね…でもこのままじゃ」

「ど、ど、どうすれば…！」

「コッコロちゃん、気をしっかり！」

あわあわするコッコロにハツネとオルガがなんとか落ち着かせようとする

「おい、しっかりしろ!!ユウ…！」

その時、オルガも意識がどこかへ飛んでしまった。

「急にと思ったらまたか…！」

「ここは…！」

そうするとユウキとオルガはまた不思議な空間へ呼び出されていた。

当然ながらアメスもこの場に一緒だ。

「みんなは?！」

だがユウキは先程の戦いもあり、それを気にしていた。

「ここは夢みたいなものだからあんたを一時的に…だけど、急いで呼んだからあんたも

また巻き込んだりやってみたね…」

「だろ？…まあこういうのには慣れてるんでな…」

オルガは頭をかきつつもそう伝える。

幾多もの世界を巡回した余裕というものが見える。

「コッコロたん達はなんとかあの金髪の…マクギリスつてやつと戦ってるわ」

「ああ、だがあいつであのおば…クリスティーナには勝てるのか？」

「…あいつ相手なら本来は戦いにもならないけどどういうわけかあのマクギリスはあいつの異能を知っているようね…でも決定打がなければジリ貧になる」

「依然厳しいってわけか…」

「もどして！いますぐに！！」

「こんなに早くクリスティーナと再会するなんて…」

そう独り言のようにアメスが言う。

「あつたことが…？」

「何度もね…でもそれはクリスティーナですら覚えてないけど…」

「どういうことだ？」

「…まだ団長にも説明できないわ。話が複雑なのよ…色々と」

「そうか…」

(…あんまり深追いは出来ねえな…)

特に追求もせずにアメスは続けて話す。

「コッコロたん達を今助けられるのは…あんただけよ。プリンセスナイトの力を開放するしかクリステイーナに対抗する術はないわ」

そうしてユウキの胸にアメスは手を当てる。

「ぷりんせす…ないと?」

(プリンセスナイト? そういやコッコロもそんな事を言つてたような…)

「あんたは記憶を失う前、この力を使っていた。思い出して…あんただけの…」あんただけが自由に使っていた力」を…あたしたちと冒険していた…あの日々を…」

「…」

そしてユウキの頭の中にはある記憶がかすかに蘇る。

ともに旅をしていたある3人の女の子…そして小さな妖精のことを…

(…:…どうやらアメスとユウキの間にはなにかあるらしいな…:…まあ今はいったところ
でしやーねえが…)

そして二人は再び光に包まれ、この空間より消えていった。

「オルガ様!」

「お、おう！」

「大丈夫でしたか？主様に続いて止まっておられましたか？」

「いや、大丈夫だ…それよりマクギリスは？」

「それは…」

そしてクリステイーナとマクギリスは…双方が息を切らしており、まさに互角であった。

「なかなか、やるようだな。面白い！」

「レディが楽しんでくれてなにより…だ」

だが徐々にマクギリスが推されつつあった。クリステイーナの演算を上回れるように身をこなししてきたが、クリスに学習されるにつれてそれが難しくなってきたからである。

ハツネ、リマ、アオイ、コッコロの援護もあるが焼け石に水もなかった

(殺さぬようにとは…本当に難しいな)

「ほう…終わりか？ではこの幕はここまでとしよう」

「させない…させない！」

「ん？」

倒れていたユウキは肩肘をつきながらも立ち上がる。

「くうっ……はああああああっっっ!!」

そしてユウキはそれとともにその力を開放する。

それと同時に光に包まれる。

「え……なに？」

「力が……」

「力が……湧いてくる……!」

「こいつは……!!」

ハツネ、アオイ、リマ、オルガ、コッコロの5人にもその光が集まっていく。

「いざ……参りましょう!」

「これは……お前の力なのか……?」

ユウキの目には魔法陣のようなものがある。

だが魔法ではない。別のなにかであった。

「ほう……」

(……どうやら、私の役割はここまでのようだ)

「また会おう、鉄華団……いや、美食殿の諸君」

そうしてマクギリスは静かにその場を立ち去る。

どうやらマクギリス自身の目的は果たされたようだった。

「いっくよー！メタモルアップル！」

「これは……俺の「王の椅子」じゃねえか……」

そしてリマは人間態となり、オルガはなんとオルガ専用獅電を身に纏う。

前世においては乗る機会はなく、そのまま死んでいったオルガ。

だがこの異世界を巡る旅においてはどういうわけか世界によつては使われるものがある。

この世界ではユウキの強化能力により使えるようになる特殊な形態という位置づけであろう。

「リマリマー！ありがとうユウキ君！はあああつ!!」

「ふっ……なに？」

リマの攻撃には身のこなしで避けたがギリギリのところまでクリスの髪の毛が切れた。

恐らくは身軽となったリマの攻撃を回避できなくなった……とも言えるが、それだけではないように見える。

「……捉えました……ふっ！」

そして今度はアオイの射撃。コレ自体は普通に避けるクリスだが狙いはそこではない

「！」

「星に願いを…シューティングスター！」

ハツネの魔法による飽和攻撃である。

クリスの能力は自身で瞬時に演算してのものであり、飽和攻撃等ではその演算に手間取り、身動きがほぼ取れなくなる。

ハツネの攻撃には威力はそこまでのものではないためかクリス自身にそこまでは傷が生じなかったが…。

「くっ…!？」

「おらああああああっ！」

「はああああっ！」

「ぐ武運を…!？」

そのスキをつき、コツココの補助魔法を受けつつもオルガの獅電のパルチザンとユウキの剣の攻撃である。

突撃し、一太刀を浴びせようと言うのだ。

「ちっ…!？」

オルガの攻撃は紙一重で回避し、続くユウキの剣は回避しきれない故に剣で受け止める。

「…面白い…仲間の力が見違えるほど上昇したぞ…。魔法…ではないな」

そしてクリスはユウキを蹴飛ばした。

この能力はユウキ自体には強化されない。それ故である。

「主様!」

「フツ…貴様、名は?」

「俺は…鉄華団だんちよ」

便乗して名乗ろうとしたオルガはクリスの斬撃で文字通り黙らされた。

「だからよ…止まるんじゃねえぞ……」

「オルガさん!」

アオイが駆け寄ったのは言うまでもない。

「……ユウキ」

「…今日は思わぬ収穫があった。あのマクギリスとやらはもう居ないようだが…久方ぶりに楽しめたぞ」

そしてハツネの前に止まり思い出したかのように――

「そうそう。あのビーストの弓使いだがな…恐らくあれはシャドウに取り込まれている。自我が残っていれば…あるいは……」

「……!」

助言とも取れることを告げるクリステイーナであった。

「…シオリン！」

一方の村ではペコリーヌと三日月がシャドウの対処にあたっていたが――

「ペコリーヌ！」

「三日月君、そつちは…」

「ちよつとキツイ……はあつ！」

「こちらもちらでシャドウの物量に押されつつあった。

また三日月は久しぶりの対MS戦闘により感覚を取り戻すのに手間取ったのもあった。

(やばいな…)

三日月としては珍しく少し焦る表情である。

それはペコリーヌも同様だ。

「こんなことなら朝ごはんもつと頂いておけばよかったです…！」

「俺もメシまともに食っておけばよかったかな…」

「フヤセ…フヤセ……」

そして屋根上においてはシオリがいつの間にか現れており、ただでさえジリ貧な状況が更に悪化し始めていた。

その時――

「!」

複数の魔法陣が展開され、前方のシャドウを吹き飛ばした。

「何やってんのよ……ペコリーヌ、ミカ」

そう、美食殿の後衛魔術師「キヤル」であった。

「とつととそいつら片付けて、スパイス収穫するんでしょ!」

「…はい!」

「キヤル……!」

そしてキヤルの持つ魔術書がめくられ、詠唱とともに魔法が放たれる。

「覚悟は良いかしら…グリムバースト!!」

それとともにさらなる魔法陣が展開し、シャドウ達が吹き飛び同時に土煙が舞い上がる。

そして――

「シオリン!」

「負けないで!今助けるから!!」

ハツネがシオリンの懐に飛び込み、顔の額と額をあわせる。

それとともに虹色の光が飛び出る。

「ハツネちゃん!？」

ペコリーヌがその光景に驚くと同時にコッコロ達が村へ到着。

「ご無事でしたか!？」

「大丈夫か!？」

「一体どうなってるの!？」

「あいつは妹を助けようとしてるんだ。ハツネなりの方法でな」

そしてその次の瞬間、シオリンの中からは大きなシャドウが吹き出るように現れる。

「どうやらこれが「元凶」だろう。」

「キヤルちゃん!？」

「キヤル!？」

「わかってるわよ、うまくやりなさい!ダークボルテックス!!」

そして空中の魔法陣によりそのシャドウを引き寄せ、そこへ

「はあああつ!？」

三日月のバルバトスの太刀で切込みを入れ

「全力、全開!!プリンセスストライク!!」

ペコリーヌの最大火力をダイレクトにぶつける。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ」

!!!!!!!

結果、断末魔とともにいつもの王冠の衝撃波が形成される。
無事「退治」できたようであった。

「だらしないわね……飯足りてないんじゃない？」

「えへへ……おなかぺこぺこ……」

「……よかった」

ペコリーヌを受け止めたキャルをふっと笑みを出しつつも見守る三日月であった。

そして他の一同はシオリの周りへ集まった。

「大丈夫か!? 正気に戻ったのか!？」

「シオリ……ちゃん……?」

恐る恐るリマが声をかけると

「……リマさん……」

いつものシオリの姿がそこにあった。

それと同時に一同の緊張していたのが取れる。

「よかった……いつものシオリちゃんだ……」

リマは涙を流しても居た。

「は、ハツネさんは!？」

アオイとオルガがそのシオリ脳での中にある様子を見ると、ぐっすりと眠っている様子が見えた。

「寝てる…？」

「みたいだな」

「…シーっ」

起こさないように人差し指でそのジエスチャーをするシオリであった。

『そうか…クリステイナーと…』

「まあなんとか君が教えてくれた特性…いや、異能の情報のおかげで対応はできた。もつとも彼等へ繋ぐ時間稼ぎにしかならなかったが…不殺というものは意外にも難しいものだな」

マクギリスはどこからかで繋いだ通信のようなものと会話をしていた。

『まあ彼女の異能は厄介だ…今の所は「彼」のプリンセスナイトの力がないと対応はしにくい…もつとも今は彼にはあまり使ってほしくはないものだが…君には色々と面倒なことを頼んでしまつて申し訳ない』

「構わんよ。私もこの世界ではある程度は好きにやらせてもらっているのね。そしてあのシャドウはかなりの数だった。あの村でのシャドウは団長達により対処はできた

ようだが」

『あれは序の口さ。シャドウは人の魂を求めて襲いかかる存在である以上、「あちら」は更に攻勢を立てる可能性が高い：アタシのほうでも色々と探りは入れるつもりだけど』
「ああ、我々のほうでもなるべく見つけ次第退治はするつもりさ。石動にもそうは伝えたが：如何せん戦力が足りないのがネックだ。我々は君たちのように魔法は扱えないのでね」

彼の持つモニターク商会は表向きは商業ギルドだが、裏では密かに戦力が整えられつつあった。

共に革命軍の面々等が転生してきたというのもあるが、徐々に現地民の志願者が増えてきたというのもある。

……バエルを崇める新興宗教と勘違いされないか心配である。

『ふつ、アタシもここで「ロボット」を扱うなんて思わなかったよ。君たちが来るのも予想外の中の予想外だ』

「まあ私も数ある世界を団長に引つ張られる形で歩いては来たが、このような世界は始めてだ……なにせここは」

マクギリスがそう言い掛けるとその相手のほうに別の通信の通知音のようなものが入る。

『おつとそろそろ時間だ。すまないがここで一旦切らせてもらおうよ？あの子達からの定期連絡だ』

「ああ、了解した」

通信は切られ、マクギリスは背を向け、窓の外の「王宮」を眺めこう呟いた

「カイザーインサイト「**覇**瞳皇帝」……か」

Menu 7. 5 BB団ものがたり

いいお天気ですね！

「さてと……このはずだが……」

俺はある時に世話になったアオイってやつのとこに向かっていた。

アオイが考えた俺との二人だけの団——BB団。バイバイぼっち団の活動をするためだ。

俺はぼっち……つーわけでもないが、友達の作り方なんか実際ようわかんねえし、まあ助けられた恩もある。そしてあの感じはどうにも放っておけねえ……。

つーわけで俺はランドソルより少し遠くの街の近くにあるアオイが定住しているエルフの森の中に足を進めているわけだ。

しかしここの内部構造はいまいちわかんねえな……。

似たような木ぼっかりだしよ……。

「らんらんら〜、BB団〜♪まだかな、まだかな、BB団〜♪」

……この声と歌は……間違いねえな。

「アオイじゃねえか……」

「ああ!お、お待ちしてました!この日が来るのを、一日千秋の思いで、待ち望んでました!」

「そこまでオーバーになる必要あるか?別れたからまだ数日も経つちやいねえぞ?」

「では、数日前から待ち望んでました!やんや、やんや!」

たく、相変わらず変なところでテンションが高えな……。

「大丈夫か?」

「え、ええ!」

大丈夫には全く見えねえしよ……。

声が裏返つちまつてるぞ……。

アオイは少し咳払いをした後、本題を話し始めた。

「で、では…考えていきましよう。と、友達を作るために……わ、私たち、何をすればいいんでしょうか?」

「どうすれば……か?」

つつてもなあ……改めて聞かれるとなあ……盃を交わすのは友達じゃねえしな。

手を組む……いや、そんなでもないか……?

共に駆け上がる……いや。つかそれじゃ破滅しちまう。

「オルガさんも悩むくらいですし。やはり一筋縄でできるものではなさそうですね。友

達……!!」

考えている間にアオイはそう言う。

まあ確かに一筋縄じゃ無理かもしれねえな……。

「というところで……。ええと、次は実践的なアドバイスの質問をお聞きしたく……」

「実践的?」

「例えば、私がある日道でふと人間の方にお会いしたとしたら、どのように話しかければ良いんでしょうか?」

ふと人間の方に?

友達になりてえなら……そりゃ決まってるんだろ

「友達になってくれとか言えば良いんじゃないやねえのか?」

そう俺が言っただけだ——

「な、な、な、なんですってエエエエ!!」

アオイはものすごい声で勢いよく叫んだ。

目も少し白目になっちゃってる……。

「そ、それは!ハードルが高すぎますっ!激高です!!」

「そんなに高いもんか?」

「は、はい!は、ハードルたかくて……たつたかつ……たかたか……たからくじ!!」

「宝くじ?」

「す、すみません、動揺しすぎてまたわけのわからないことを言っちゃいました……」
「別にいいんだけどよ……つつても話せないことには何も始まらねえぞ……?」

「そ、そうですけど……」

アオイは相変わらずモジモジしている。

やる気は十分なんだが、どうしても人見知りが強くなっちゃってるようだ。

そこで俺はふと、ある存在を思い出した。

「なあアオイ。前に出してた『だいじょぶマイフレンドくん1号』を相手に練習するのはどうだ?」

「あ、なるほど……それならよく話してるので、練習には良いかもですね。オルガさん、目の付け所が違います……」

そんなに違うか? それ

まあそれでアオイは木で出てきた『だいじょぶマイフレンドくん1号』を持ってきて……
……つてそれって人形みてえだが……?

確か前は木の置物だったはずだが……。

「なあそれって……」

「あ、これは正確にはだいじょぶマイフレンドくん1号『改』です。もつと友達作りの練

習が捗るようにつて考えて、人形の形にしたんです。もちろん1号を元にです！」

確かにこれのほうが人の形に近いからやりやすいかもな。

しかしこんな人形を作れるとは、すげえよアオイは……。

まあともかく、気を取り直して練習を始めようとした。

だが――

「こ、こつこつ、こんにち、こんにち……こんにちの社会情勢は……しよ、少子高齢化の一途を辿り、出口の見えない不景気が我々を苛んでいます……」

内容がよくわからねえが、まるテレビのニュースみてえな話をしてしまっている。

こういうのはやっぱアオイの癖なのか？

「お、おい？大丈夫か？」

「はっ！し、しまった……また空回りして変な話を……」

「もつとなんつーか……個人な話がいいんじやねえのか？アオイ自身の」

「こ、個人的な……個人的……個人的にはお肉より野菜のほうが好きです」

いやまあ合ってたんだが……

「もつとこう……なんだろう……気楽な話つてののか？」

「そうだ！ここはクイズにしましょう！友という字と達という字を組み合わせるとどんな単語になりますか――！」

「クイズに逃げるんじゃないぞ……」

そうこうしているうちに、アオイはすっかりと項垂れてしまった。

「ううっ……今日のところは無理なようです……。やっぱり、私のようなものが、友達に憧れるなんて、10万年早いみたいです……。友達になつてくれって、一生言えないかもです……」

たく……少しオーバーじゃねえのか……?

……でも、どうにも放っておけねえしよ……。

「あんま謙虚なのはよくねえぞ……?」

「ううっ、わかってるんですけど……。いきなり友達と言わないまでも……なんとか、会話をするのに良い導入は無いものでしょうか?」

導入か……アオイでもできそうな導入……あんのか……??

暑い上にここまで考えることになっちまったから汗が止まんねえ……。

「しかし今日は結構暑いな……雲も一つもねえし」

「はい……今日は快晴みたいです……。いい天気ですけど、いい天気すぎるのもちよつと

……ですよね……」

そうだな……つてちよつと待て!

今のは……!

「おい、アオイ。今のが良いんじゃないか?」

「今って?」

「天気のことだ。これなら誰にでも言えちゃうし、変なほうに話がそれることもねえ」

「な、なるほど! それぐらいなら……見ててください! オルガさん!」

アオイはすうつと息を吸って、その「だいじょぶマイフレンドくん1号改」に話しかけた。

「こんにちは! いいお天気ですね!」

よし、これならアオイにも大丈夫なやつだ。

「良いんじゃないの? なあ?」

「ほ、ほんとうですか!!!」

「ああ、本当だ」

「で、できました……オルガさんのおかげです……ありがとうございます……私、嬉しくて嬉しくて、もう!」

物凄く小さな一歩だがよ……アオイにとっては大きな一歩らしい。

とても笑顔で飛び跳ねるくらい喜んでいた。

団員が喜んでるなら、俺も安心だしよ……。

そんでまあその後は俺を練習相手に天気の話が続いた。

あまりにも話しすぎていつの間にか夕方の時間になっちまってるほどだ。

「それにしてもオルガさん、いいお天気ですね! ちょっと曇ってきましたが、いいお天気ですね!」

アオイはキラキラとした様子で引き続きこんな調子だ。

もちろん先程よりか全然良くなっている。

「話はぜんぜんかわりますが、いいお天気ですね!」

まあたまにはこんな感じだがよ……。

そして夜になり――

「夜も更けてきました、いいお天気ですね! もう何も見えなくなってきましたが、いいお天気ですね!」

アオイは引き続きこんな感じである。

森もすっかり暗くなってしまった。

まあ、実際は何も見えねえってことはねえが……ランタンの火もついてるしよ。

「明日も、明後日も、もちろん明々後日もいいお天気ですね！」

色々トリズムに乗ってきたのか、よくわかんねえことも言い出している。

まあアオイが楽しいならそれで良いんだけどよ

けど――

「裏の畑でポチが鳴く！そう、いいお天気ですね！」

俺を開放してくれねえか……？

かなりの時間になっちまってるぞ……!?

けど、この様子だとあんまり言えねえ……アオイも楽しいままだしよ……！

この後、ミカがバルバトスで迎いに来るまで、俺はアオイの練習に付き合っちゃまった

のと言うまでもねえ……。

命がけの友達作り

「オルガさん！今日は友達作りのための作戦を考えたんです！」

俺が来て急にこんなことを言い始めた。

結構自信があるみたいじゃねえか……。

「なんと、秘密兵器を作ったんです！」

「秘密兵器？」

おいおい、ダインスレイヴみたいなものじゃねえよな……？

いや、警戒する俺がおかしいかもしれないねえが……

「見てください！じゃじゃーん！これが、秘密兵器です！」

…なんだこれ。

バネみてえなのできてる……服か？

「名付けて、『友達養成ギプス』です！持ってみてください、オルガさん」

アオイからその服を手渡される。

ぐっ……!?この重さは……！

「結構重いじゃねえか……」

「なにしろ銅と鉄をふんだんに使いましたから！ちよつとやそつとじゃ千切れません！」

「なるほどな……で、これで何をするつもりだ？」

「まず、誰かに会った私が、『友達になつてくれませんか』と言つたとします。すると当然断られます」

当然断られるのか……？

「私の存在価値は、ぬけた眉毛以下ですから」

「ま、眉毛以下あ……？」

あまりにも卑屈に見過ぎじゃねえのか……？

そいつはおかしいんじゃないのか……？と突つ込もうとしたが、アオイは話をそのまま勧めていく。

「しかし、そこで！私がさつと上着を脱ぐと！そこには、このギプスを着用した私が！相手は、『こ、こいつ！今までこんな重いものをつけて友だちになろうつて言ってきたのか……！』と衝撃を受け、友達にさせてくれ！つて言ってくれるんです！」

「そういうもんじゃねえような……」

「いいええ、まんがでそんな感じの話を読みましたから、きつと正しいと思います！」

そんな漫画あるのかよ……？

俺もよく知らねえが、少なくともそういうやつじゃねえ気がするぞ……。

「だいたい、結構重いギプスを付けて動けるのか？俺やミカでも無理な気がするぞ……」
昭弘ならいけるかもしれねえが……。

「それなら、試しにつけてみます」

そうするとアオイはその重いギプスを着けはじめた。

「よいしょ……つと……あ、バ、バネが結構強いですね……これ、想像以上に、バネが……強……
きよわ!!」

そうするとアオイはそのバネの力に抗えず、きれいな感じで丸まった。

動物のアルマジロってやつか？ともかく、間違いなく実用じゃねえ……。

つか大丈夫か!?

「おい！大丈夫か!？」

「た、たすけて……くださーい……」

その後、なんとかそのギプスのバネを切り、アオイを救出する。

それでも結構固く、ほとんど壊しちまったがな……

「ふ、ふう……おせわさまです……」

「こんくれえなんてこたねえ……でも壊しちまったな」

「いえ、あれは私には使いこなせないものですし……でも！挫けませんよ！ギプスは失敗しましたが、実はまだ、友達作りの作戦はまだあるのです！」

その意志はやつぱかてえじやねえか……

そういうのはいい傾向だ。止まるんじゃないやねえぞ……

「名付けて「限界突破友達作りデスレース作戦」です！」

「……なんなんだそれ」

その作戦名少し物騒じゃねえのか……？

だがそんな俺の思いを他所にアオイはその作戦の説明をし始める。

「ここに、スイツチがあります。これをオンにすると10秒後に丸太が勢いよく飛び出してくる仕掛けになっています」

なんで丸太なんだ……

つかそれが何の役に立つんだ……？

「その前に『友だちになつてください』と言わないと、装置は止まりません。タイムリミットを超えてこの丸太に弾き出されてしまうと、私の体は深さ10mの落とし穴に落ち！命はありません！」

「い、いくらなんでもやりすぎなんじゃないやねえのか……つか、そんな装置いつの間にか作つたのかよ……」

「いえいえ、友達をつくるほうがもつと大変ですので……」

「そこまで大変なのか……？ 装置は結構凝ってるようだが……」

「これ作ってる暇があるなら……と言おうともしたが、アオイの頑張ってるのを冷ますような気がしたから、思いとどまる。」

「では、始めますよ！ 限界突破友達作りデスレース！ 見届けてください、オルガさん！」
アオイは予めつけておいた印の上に立つ。

そのアオイの目の前にはロープで吊るされて固定されていた丸太があった。

そんな太いものじゃないが、俺が当たれば確実に死ぬやつだ。

「スイッチ、オーン！」

その掛け声と同時にスイッチが押され、カウントダウンが始まる。

「わ、わっ、わたしと……とも……ともぐい……じゃない、とも……ともだ……ともだおれに……！」

アオイは一向に言えていない。

よほど空回りしちまっているようだ。

「わ、わたし……わたあた……わたあめ！ ああ、もうダメですっ！」

「おい、アオイ！」

それと同時に仕掛けに備え付けの目覚まし時計が鳴り、丸太が勢いよく飛び出してい

く。

……ああ、わかってる……団員を守るのは俺の仕事だ！

「きやあつー！」

「危ねえー！」

俺はアオイをとつさに庇う。

「ぐっ!?!うおおおおおつ!!!」

そしてそのまま丸太の直撃を俺は食らい、そんで銃撃で丸太を破壊した。

「はあつ……はあつ……なんだよ……結構あたんじゃねえか……」

「お、オルガさん……また……!」

「なんて、声……出してやがる……アオイ……!」

「そんな、私なんかのために……!」

「団員を守るのは俺の仕事だ……!」

アオイが無事で何よりだ……。

「だからよ……止まるんじやねえぞ……」

そしてここで「希望の花」が発動し、再び立ち上がる。

「ほ、本当に大丈夫なんですか!?!」

当然ながらアオイは驚いている。

まあ死んで生き返る能力はこの世界じゃねえらしいから、当然だが…。

「ああ……俺はそういう能力を持つているからよ……気にしなくていい」

「そ、そう言われましても……ん？」

アオイはなにかいいかけるとなんかに気づいたのか、周囲を見回す。

すると急に叫びだした。

「あああああ！だいじよぶマイフレンドくん1号改が……！」

その人形は無残にも粉々になっていた。

この感じは銃だよな……？

つまり、俺が撃つた時にこいつが……!?

「す、すまねえ！俺がやつちまった！俺ならどうにでも殺してくれ！何度でも殺してくれ！首をはねてそこらに晒してくれても良い！」

「い、いえ！オルガさんが私を守ってくれたからそれでこうなっても仕方ありません……けど、ううつ……友達作り一歩後退してしまいました……」

アオイは項垂れてしまった。

完全にやつちまった……！

「本当にすまねえ……お前の大事な物を壊しちまって……」

「いえ……いいんです……オルガさん、知ってると思いますが、この森は僻地で人は滅

多に来ません。まあ、いつものことですが…それでも寂しいものなんです…もちろん、ギルドには入ってて、皆さんよくしてくれて、大好きなんですけど…」

アオイはギルド「フォレスティエ」に入ってて、俺達もその収穫の手伝いをしたことがあつた。

確かに雰囲気も良くて、アオイも恥ずかしながらも色々働いていたな…。

「いつも会えるわけじゃないし、なにより、明るいみんなの足を引っ張りたくないから…私は私で友だちを作りたかつたんです」

……なるほどな……。

「…真面目に頑張ってるんだな…すげえよ、アオイは」

「真面目なんて…私なんか、くそまじめなだけで…どちらかというたくそ寄りのくそまじめですから……」

「真面目には変わらねえよ。そういうのはもつと誇つても良いんじゃないやねえのか？」

「誇ることもなくて…本当にくそ寄りですから…」

相変わらず卑屈だな…まあ、こういうのはゆっくり変えるしかねえからな。

……だけど、いまいぢわからねえ。果たしてこういう感じがいいのか…？

そう俺が思っていると、アオイは再びそのマイフレンドくんの残骸を見てため息をつく。

「……でも、「だいじよぶマイフレンドくん1号改」…新しいの作るのにどれくらいかかるかなあ……」

……これはどう考えても俺が悪い……ならやることは一つしかねえ!

「わかった。俺はあんたに乗ってやる」

「え?」

「俺がそいつの代わりになつてやる。壊しちまった償い…にもならねえかもしれねえが……」

「……ええええええつ!? さ、さすがBB団の団長ですつ……」

そうするとアオイは跳ね上がるように驚く。

「こんくれえなんてこたねえ……」

「お、お願いします! なんなら、これからオルガさんを「だいじよぶマイフレンドくん2号さん」と……」

「いや、そんなことしないでいいぞお……?」

「い、嫌ですか…すみません、また差し出がましいまねでした……!」

「そういうことじゃなくてだな……」

こりや先が思いやられるな……けど、この頑張りようは間違いねえ。

俺もこれくらい頑張れるようにしねえとな……。

つーわけで、俺とアオイの友達づくりの計画つてやつが進んでいく……。
まだまだ道は長いが、止まんねえからよ……。止まるんじやねえぞ……。！

守られるだけじゃいられない

「こんにちは！オルガさん」

「おおう」

「ええと、BB団の活動、今日は何をしましょうか……う？」

今日もまあBB団の活動のために俺はこの森に来た。

だが前に歌を作ろうとして失敗しちゃったし、他になにかできることか……

「それにしても、今日は気になることが……」

「気になること？」

「いえ。ちよつと気になる程度なんです……今朝、森の入口にある大木が倒されてたんです」

「あの大木がか？」

確かに俺がさつき来た時、いつもはある大きな木が何故かぶつ倒されていた。

当然だが人間だけじゃ出来ねえ大きさだ。

魔法とか使っても数日はかかるだろう。

「はい。あの大木が倒されていたってことは……もしかしたら結界の一部が壊れたのかも

…

「結界？」

「ああ、ええと、この森と人間の街には、ひとつながりの魔物が嫌うような結界が張つてあるんです。もしそれが壊れたら、森や街に魔物が……」

「グオオオオオオオオオオ!!!」

俺達が話していると魔物のうめき声がこの森に鳴り響く。

こいつは…!?

「…? 今のは、魔物の声……どこから……?」

アオイが辺りを見回すと、アオイからは死角の方からデカイ狼のような魔物が突進してきた。

「グオオオオオオオオ!!!」

「きゃあつ!?!」

「危ねえ!」

俺はとつさにアオイの前に出て、魔物の引つかき攻撃からアオイを庇う。

「ぐうっ!?!」

「きゃっ…オルガさん!?!」

俺からは当然ながら血が出ている。

痛えじゃねえか……!!

「そ、そんな……オルガさん、私をかばって、背中に攻撃を受けて……!」

「なんて声……出してやがる……アオイ……!俺はBB団、団長……オルガ・イツカだぞお……こんくれえなんてこたねえ……!」

「なんてことはないって……? そ、そんなふうには見えません!」

たく、今更何言ってやがる……俺が小さくとも大きくとも攻撃を受けたらこんな感じになるのはいつものことじゃねえか……。

「俺を心配する必要はねえ……どうせすぐに「希望の花」をするからよ……」
「でも……あつ!オルガさん!次の攻撃が!!」

「チツ!ぐおおおおおおおつ!」

俺はミカの銃を握りしめて発砲し、応戦する。

「グオオオオオオツ!!」

だがあんまり効いちやいねえ……むしろ殺気を強くしちまった……。

「オルガさん!私も戦います!強敵そうですが、二人で戦えばなんとかか……」

アオイは弓を構えようとする。

駄目だ。俺とアオイじゃこいつを抑えきれねえ……!

「アオイは逃げろ!」

「でもっ…!!」

「俺はここに放置していつてもどうせ死なねえからよ…! 良いから行け!」

「……………くっ……………」

アオイは、俺に背を向けて大きく飛び退いた。

無事逃げて応援を呼んでくればいい…あとどれくらい希望の花になっちまうか…:

そういや、あん時生かしたライドはどうなっちまったんだろう? 今更ながら気になっちまった…。

そんなことを俺が考えていたその瞬間――

「いいえっ! 私はオルガさんを置いて、逃げたりしません! 矢を打ちやすい距離まで、退いただけです!」

アオイは少し遠いところで矢を構えていた。

「私にとって一番大切なBB団とオルガさんは、絶対に私が守ります!」

「お前…………俺のために…………?」

へっ、立派に成長したじゃねえか…。

仲間を守るために…………ってやつか

「……………決めなきや! 特別な矢を使って…!」

その矢はいつもアオイが使うやつより大きいやつだ。

その分威力は強そうだが、打つものにも手間がかかりそうなものだ。

「すう……！」

アオイは息を吸い、打つ精神を整える。

そして俺はいつの間にかこう叫んでいた。

「やっちまえ……アオイ!!!」

「くらえ……退魔の矢!!!」

その矢は魔物へ一直線へ飛び……無事こめかみに命中した。

「やった! あたったっ!!」

アオイはあたったことを確認して、すぐにこつちに駆け込んできた。

「どうでしょう? やったんでしようか?」

「わからねえな……一応倒れてくれたが……!?!」

「ぐっ……ぐおおおおおっ!!」

だがその魔物はすぐに飛び上がり、再び叫び声を響かせた。

なんだよ……まだ生きてるじゃねえか!?!

「わ、わわ……まだ生きて……きやつ……こ、こつちにすごい勢いで向かってくる……!」

勘弁してくれよ……だが、団員を守るのは俺の仕事だ。

そう思っていると、アオイはすぐになにかに気づく。

「…待つてください！あの場所は……そうだ！オルガさん！そこにあるスイッチを押してくださいっ！」

「スイッチ？…わかった！」

そして俺はアオイが作ったと思われる手作り感のあるスイッチをすぐさま押す。

「グオツ？」

「今押したのは、この間BB団の特訓で使った、『限界突破友達づくりデスレース』のスィッチです！もちろん丸太も新調したやつです！押せば丸太が飛んできて……！」

そして魔物のところに丸太が直撃し、奈落へ突き落とされた。

なんとか……なったか……！

「ふ、ふうっ……なんとか……倒せました……」

アオイは気が抜けたのか急に肩の力が抜ける。

まあ確かにあれは緊張するよな……俺もかなり力が抜けた。

「大丈夫か？アオイ」

「は、はい……オルガさん……ありがとうございませ……あはは……まだ足が震えて……ガクガクいつてます……」

……本当に足がガクガクしてんな……

だがそんなガクガクな足を動かし、俺の前に来る

「…オルガさんは、BB団の団長さんで…オルガさんがいないと、友達が作れなくなっちゃうから…」

「んなこと…俺は「希望の花」が…」

「確かにその能力があるのはわかっています。でも死ななくても連れ去られたりするかもしれないじゃないですか。最初会ったときも魔物に連れ去られてましたし…」

あ、そうだな…死なないことはないが、連れ去られちまうことを考えていなかった。何してんだ俺は……。

「そして私はオルガさんが死ぬことを見るのも嫌なんです。今にもいなくなりそうで怖くて……！だから……いなく、ならないって約束してください……オルガさんに庇われて助かってても、私、あんまり嬉しくくないです……！」

「アオイ……」

アオイはいつの間にか涙目の表情だった。

……くっ…団員になんて顔させてんだ俺は……！！

守ろうとしているその存在に……！なんて悲しい表情させてんだ……俺は……！

「ああ…わかった。約束する。お前の前からは居なくならねえ。絶対にな」

「……はいっ！BB団は永遠に…不滅ですから……！！」

アオイは涙目な表情をなんとか吹こうとして笑顔を見せる。

ああ、あの時の鉄華団の二の舞は御免だ。

美食殿やBB団も……今度は絶対に壊させねえ……！

俺は改めて誓うのであった。

あの時の悲劇は繰り返させねえ……と。

Menu 8 クエスト？

リトルでリリカルな

あのタルグム村での騒動後、美食殿はそれなりの依頼をこなしつつ着々と経験を積んでいた。

モンスター退治やダンジョン攻略、薬草採集やらをこつこつとこなしているからか、ギルド管理協会のカリンからも感心されていた。

…ただギルドマスターであるペコリーヌの方針？により――

「こちら…そこ苗曲がつてる！一列植えたら確認する！」

「お、おっす」

「勘弁してくれよ…」

こういう田植え…というか農作業の手伝いをすることもある。

この世界は言うまでもなく田植え機などという便利なものはなく、魔法もそこまで便利なものではないため基本は手作業である。

そのために美食殿が手伝いのクエストを受けたということである。

なお一番文句を言っていたのはキヤルだが、いざこなすことになる熱が入るのであ

る。

「オルガ、また曲がつてるよ」

「ミカ、これくらいどうつてことねえだろ？」

「それは駄目だ。曲がつてたら育たなくなる」

キヤルと同等に熱が入ってるのは以外にも三日月であった。

彼は元の世界の時から戦い以外では農業をやりたいとそこらへんは熱心であり、情勢の悪化で結果農作業できない体になってからは諦めていたが異世界に入つて以降はその望みを思い出したこともあり、知識を身に着けつつあるのもあった。

「頼りになりますね！」

「几帳面なキヤル様と三日月様…素敵です」

（几帳面すぎるぞお…）

農業にあまり興味ないオルガにとっては微妙な感じだったが、あえてその愚痴は飲み込んだのは言うまでもない。

「はむっ！ふむんむ…うまーい！」

いかにも美味しそうに食べるペコリーヌである。

そして他の面々のおにぎりより大きいのはもはや誰も突っ込まない。

「ランドソルのお米の大半はここで収穫されてるんですよ」

「風光明媚でございますね…はむっ」

見渡す限り、田んぼ田んぼとある。

現代ではないため形はバラバラであるがそれもまた風景であろう。

「お米が好きなランドソルのお姫様が一念発起して稲作を始めたみたいです」

「なるほど…プリンセスのお米でプリ米…なのですね」

「はい！」

「なるほどな…」

（しかし…冬夜とかからは聞いたことあるが…この世界にも稲作ってやつがあるのか…）

自分達の世界には畑自体には触れるが稲作といったものには触れたことはなかったオルガである。

ミカは知識で知っていたようであるが。

「でも最近、この田んぼを野生動物が荒らして困ってるみたいなんですよ」

「ああ、イノシシか鳥なんかでしょ？作物を食べちゃうとか？」

「そうなんです！農家さんが退治しようとしてもうまくいかないらしいんですよ」
いきなりぐいつとペコリーヌが来たからかキヤルは少し驚いていた。

「そこで！私達が農家さんをお手伝いしようというのが今回のクエストです…はむ」
「ふーん」

「だろうよ」

相槌をするオルガミカである。

「報酬はこの田んぼで取れたプリ米ですよ！」

「あんたが選ぶクエスト、食べ物ばかりじゃない！ちゃんとした報酬がもらえるのにして」

度々こういった文句を言うキヤルである

「ですが、このお手伝いというクエストも素敵ですね。主様も楽しそうですし…ならこれを…」

どこからか、ユウキとコッコロが何かを取り出す。

「アメス様のカカシ、アメス様です。わたくしと主様で作りました」

「アメス様って…」

「こんな感じなの…」

（いやちげえぞ…つかユウキお前な…）

直接知らないコッコロはともかくユウキはなぜそう作ったのか首をかしげるオルガ

「はあ…結局コロ助はユウキが楽しければなんでもいいのよね。とにかく、次のクエスト

トは儲かるやつに……」

「えいー！」

「!?……もぐもぐ……おいしい！」

そんな言葉？を黙らせるペコリーヌの料理である

「あんた、ホント料理は上手よね……」

「お褒めに預かり光荣です☆」

いつもどおり機嫌が良いペコリーヌを横にキヤルはどこか微妙な表情を浮かべていた。

理由は少し前に遡る

スパイ活動の報告にランドソル城で陛下に報告をしていたキヤル。

「……タルグム村の報告は以上です」

もちろん推測はしているがシャドウの件に関しては全く知らないことで通した。

「キヤル？」

「は、はいー！」

「うふっ……緊張しているの……？」

「!?」

そしていつのまにかキヤルを取り囲むシャドウ達。

紛れもなく陛下が生み出した存在であることを証明していた。

「シャドウのこと、あなたには伝えていなかったわね…」

そして階段を降りてくる陛下

「ところで…あなたがやっているギルド《ごっこ》の男の子達のことなんだけど…」

「ユウキ…オルガ…三日月…」

シャドウに取り囲まれていることもあり、キヤルからは冷や汗以上のものが大量に出ている。

「彼らの監視も同時に進めて頂戴…また何かあつたらこうして私に伝えてくれればいいわ…」

「…」

「できるわね? 私のかわいいキヤル…」

「…はい、陛下…」

その後、ランドソル城から戻ろうとするが、文字通り「厄介」なやつと遭遇する

「イオク…!」

「ほう、陛下のお気に入りのキヤルではないか。今日もスパイの報告か?」

イオク・クジャン

言うまでもなくオルガが居た世界においてオルガ達を破滅させた原因の一人である。

最期は名乗ったばかりに昭弘のグシオンリベイクフルシティで文字通りペシヤン
コにされたが、どうやらこの世界に転生したようである。

なおお供達も同時に転生したようで、ともに陛下直属の親衛隊として雇われているよ
うだ。

もちろん何故か親衛隊隊長はこいつである。

「あんたに話すことなんかない…」

「むっ……私とお前は同じ陛下に忠誠を誓った同志というのに……冷たいぞ」

「うざい……だいたいあんたこそなんでここにいるのよ。陛下から宝物庫守護を任せられ
たはずでしょ。持ち場から離れてていいわけ？」

「今日はその件について意見具申に来たのだ！今は魔物も凶暴化している中、騎士団の
士気も下がっているだろう。そこで私も前線に出て戦い、私自ら手本を示し、士気を上
げ、そこから陛下の力を世に知らしめるべきなのだ!!今なら陛下もいらっしやるのだろ
う？」

「あつそ……なら好きにすれば……私は帰るから」

「今度こそわかってくれる……私が言うのだからな」

関わりたくないタイプであったのでイオクからは早急に離れるキャル

(たく、なんで陛下はあんな使えないやつを拾ってくるわけ？私だけで十分だったのに……陛下は「盾くらいになる」とか言ってたけどあいつじや絶対盾にもならないわよ！)
陛下のお気に入りは私という自負があるキャルにとって同じく拾われたような存在であるイオクのことを邪魔だと思っているのだ。

まあ間違っていないが……本当に邪魔である。

拾った理由としては「お供は役立つ」「暇つぶし」らしい。

閑話休題

「主さまー！そちらにいきましたよー！」

「フギヤツ！」

カエルに襲われて文字通り見えなくなり田んぼへ倒れる。

「主さま!?!」

「ユウキ君！それ、今晚のおかずにしましよう！」

「勘弁してくれよ……」

「良いんじゃない？」

「……」

そんな様子を見て一言。

「ホントに監視する意味があるのかしら……」

いかにもとくに重要そうではない人たちであった。

そしてもうひとつ気になるのは

（しかしイオク……ペツシヤンだったつけ？あいつの雰囲気なんかミカ達に似てる気がするのよね……全く違うのに……なんというか……体格？いやなんだろう……）

あたりといえばあたりだが微妙に違うのである。

だがその答えを知ることとはなく……。

「？」

ミカはそんな悩むキヤルの視線に気づいて首が傾げたそうなの。

その後、ギルド管理協会に依頼を漁る美食殿。

「うーん……」

「いいのあんのか？これ」

オルガとキヤルは唸っていた。

「キヤルちゃんオルガ君！これにしましょうよ！漁師さんのお手伝いで報酬はお魚食べ放題！」

「却下！」

「そうだぞ……」

（つかペコリーヌの場合、海ごと吸い尽くすんじやねえか……？）
有り得そうなやつである。

一方ミカとユウキとコツコロも同様に漁っているが……

「良いのないね」

「そうでございますね……主さまは……」

「……ん……」

「そちら……ですか？……師匠募集？」

そんな言葉がまるで子供が書いたような文字で書かれていた。

「ギルド活動のことを教えてくれる優しい先生を探しています」

「俺はすぐくたくさんだよ、すごいよ……なにこれ？」

「「？」」

一同は首をかしげるがそこへカリンが入ってくる。

「あ、その張り紙、また貼ってあったんですか……すみません、また剥がしますね」

「カリン様……」

「どういふことだ？」

「これは正式認可したクエストではないんです。何度剥がしてもいつの間にか新しいのがはられてしまつて」

「だつてさ、ま、このクエストも却下ね」

「……」

そんな会話を他所にその紙をじーつと見ているユウキであった。

そして管理協会の外へ出るが、ユウキはその紙を見続けている。

(やつぱり気になるのか……あんまり良い予感がしねえ気がするが……)

オルガがそう思っていると……。

「オーイヨイヨイヨーイ」

「あ?」

後ろから声が聞こえたのでユウキ達が振り向くと

「おーいよいよいよいよ」

「なかなかでーミソギー」

「あきらめちゃだめだよー」

バレバレな棒読みで何かを話す女の子3人

エルフとやんちゃそうな子とうさ耳である。

「どうしたんでしようね?」

「学芸会の練習でしよ、いくわよ」

それをほっぽって行こうとするが

シユパーンつとその3人がキャルの前に出て文字通り回り込まれてしまった。

「オヨヨヨー!」

「みそぎー」

「みそぎちやーん」

「え!?なに!」

「延長上映ですか!」

「意味がわかんねえぞお…」

「フツ!」

そう言った瞬間、オルガへ吹き矢の…吸盤型のようなやつが直撃する

「ぐうっ!」

またまた希望の花が咲いた。

こんなんでも咲くのは言うまでもないが久しぶりである。

「あ…えつと…」

本当はポスターに当てるつもりが矢受けの加護のせいである。

「……ゴホン……そのクエストに……興味が？」

「え？」

ミスのスルーして呆気にとられる他の5人だが、そこへまた乱入者が来る。

「もちろんだ」

「あ？」

オルガが起き上がると同じくらい金の髪の子……まあ言うまでもないだろう。

マクギリスである。

「話を聞こう。天使達」

「あなた、あの時の……」

「ていうかなんで勝手に話を進めてるのよー」

キヤルはごもつともな突っ込みをした。

マクギリスは現在美食殿の協力者ではあるがギルドメンバーではなく部外者である。

だが――

「あなた……誰ですか？」

「エルフの天使か……怖がらせてしまったようだね。私はマクギリス・フェアリド、アグニカ・カイエルの伝説を受け継ぐ者にしてこのギルド「美食殿」のオブザーバーだよ」

. . .

「「「は!?!」」」」

「?」

言うまでもなく他の5人はものすごく驚いたという。ユウキもはてなを浮かべていた。

そして地味に何かを盛ったマクギリスである。

振り回されて

コカトリス亭にて

とりあえず話を聞くことにした面々。言うまでもなく金髪も一緒。

『ちよつと、なんであいつがいつの間にかオプザーバーになってんのよ!』

『知らねえぞ……あいつが勝手に名乗りやがった…』

キヤルとオルガの耳打ちを他所に話は進む

「師匠にですか?」

「はい、本当のギルドがどんなことをしているのかわからなくて」

キョウカ、ミソギ、ミミの順で座っている。

そしてその前には子供らしくジュースがある。

なお他の面子はコーヒーのようだが、ペコリーヌはまた食っていた。

「教えてくれる人を探してたんだ」

「ミミ達リトルリリカルの師匠になってください!」

「ああ、わかって」

「金髪は黙って!……はあっ……お子様のギルドごっこ?」

「ごっこじゃないもん」

「あつそ、でもどうしてそんなにギルド活動したいわけ？」

「……………」

一瞬黙るが、キョウカが喋る。

「ランドソルの平和を守るためです」

「……………」

（とにかく、次のクエストは儲かるやつに）

「…………ぐっ……」

（報酬はお魚食べ放題♪）

「……………！」

（わたくしと主様で作りました）

「……………」

（笑いたいんだ。火星の王とかよ、名前はどうかだっていい。俺はよ、たどりついた場所でバカ笑いしてえ）

「…………もぐもぐ」

ミカを除く美食殿の面々は軒並み黙り込む。

なおミカは

(ふーん、いいんじゃない)

と特に自分に思うことはなかったそうなの。

そして当のロリコンことマクギリスは

「ほう、純粹でまさに天使だ……素晴らしい」

ただただ褒めていた。

そしてだまっていた面子も喋りだす

「わ、わかるわ……私達も同じなのー」

「本当？」

「ら、ランドソルの平和……大事でございますね……」

「でしよー？」

「三人とも偉いですねー」

「そ、そんなー」

「ああ、いいじゃねえか……」

他の3人はともかくオルガとミカに関しては平和なんか考える余裕がなかった環境なので一応同情の余地はある。

「素晴らしい」

なおマクギリスはもはやbotであつた。

「お願い！ミソギ達のギルドの師匠になって！」

「あ、ああ……わかった。乗ってやる」

「うん」

「私も同行しよう」

「良いんじゃない？」

「「やったー!!」」

喜ぶリトリリ達であった。

なおマクギリスは完全に「ご満悦でどきどきに紛れて参加することになった。

「はあっ……程よく安全で程よく危なくて程よく苦勞しそうな場所……はあ……遠足の行き先を考える学校の先生になった気分ね」

「ああ、だが彼女たちには過度な危害を加えないようにしないとイケない」

「ええ……っていうかなんであんたここに居るのよ！」

普通に美食殿のギルドハウスに居座るマクギリス

「どうやらペコリーヌの手伝いをして居るらしい。」

「準備の手伝いだよ。天使達に不手際をさせたくないのよね」

「はあっ……てかオルガもなんでこの変人を追い出さないのよ！」

「追い出したいのは山々だがよ……こいつに突っ込む気力がもはやねえ…昔、どれだけこいつに振り回されたと思ってるんだ」

「その昔になにがあつたのよ……」

「いろいろな…」

話せば確実に長くなるやつなのでキヤルも詳しくは聞かなかつたそうなの。

「…で、あんたはその金髪に手伝わせて何作ってるわけ…」

「えへへ、明日のお楽しみです☆」

「ふふつ、なんだかわたくし達までワクワクいたしますね」

「ユウキは？」

「クエストのお宝を作っておいでです」

ユウキは机に向かって熱心に絵を描いていた？

「お前、絵なんか描け……ヴェエ？」

「一体どうしたのよ……」

オルガが絶句しているときに他の3人が近づくと……

そこにはどこか禍々しい人のようななにかとも言えないような言えるようなものが描かれていた

「「きゃあああああああああああああああつ！」「」」

言うまでもなく一斉に悲鳴を上げたような。

そして当口。

リトルリリカルの3人にペコリーヌが教官のごとく命じる。

「整列！番号！」

「1！」

「2！」

「3！」

「4」

空気も読まずにマクギリスが乱入する

「なんで？」

「は!？」

「私も居なければいけn」

そのままバルバトスで引つ張られるマクギリスであった。

そんなことは無視して続けるペコリーヌ。

「今日は諸君にこのクエストを担当してもらおう！」

ペコリーヌがバサッと開いた紙にはキヤルが考えていた道が描かれていた。

「「おおー！」」

「お宝はこの地図のこの地点にありますよ。ちゃんと持って帰ってきてくださいね☆」

「昨日お伝えしたキャンプ道具は持ってきましたか？」

「はい！」

ミミがそう返事をする、三人はその道具を出す。

「お弁当と」

「水筒と」

「おやつも持ってきたよー」

まるでピクニック…というよりもピクニックである。

「ユウキ君、三人のことよろしくおねがいますね」

「うん」

サムズアップをするユウキ。

「よろしくおねがいます！師匠！」

そしてその4人を見送る他の面々だが

（大丈夫なのか…？）

オルガが首をかき上げている。

今までの経験からかやはり良い予感がしてないようだ。

「いいではないか、あの天使達は……なぜ私を同行させなかったのか理解に苦しむ」

「あんたみたいなバカをつけるくらいならユウキのほうがマシよ！」

「バエルを持つ私に逆らうか……」

「だからバエルってなんなのよ……はあ……でも大丈夫かしら……」

「地図の通りに進めば危険な魔物はいませんから」

「そうですね……主様も一緒ですし」

「今のアイツなら変な真似はしねえだろ……少し前ならともかく……」

「……」

(ユウキ、地図の読み方わかってたっけ)

他が失念したことをミカだけが思っていた。

……案の定、最初の分岐で躓く。

「違うでしょ……コンパスは常に北を指してるの……!」

ペコ、コッコロ、キヤル、オルガ、ミカ、マクギリスの6人は一応後ろのほうについできていた。

「天使だ……」

「やっぱり地図の読み方教えてないよね」

「……あ」

そしてまたまた案の定、方向を間違える。

いろいろな意味で失策だが、更に重なった。

「あいつ……もつと重点的に言っておけばよかった……!」

「天使だ……!」

マクギリスはもうそれしか言わない。

(こいつ状況わかってんのか!?)

オルガは頭を抱える。

そして途中の蜘蛛とだけでもちよつとした騒動になり、度々進路変更をユウキに指示しても従う気配もない。

かといって実力行使も使えない。

「ど、どうしましょう……」

「やべえな……このままだとあいつらは確実に殺されるぞ」

「あたしの完璧なルートセッティングが……」

「こうなったらやむを得ません!これを使います!」

大きな布で包まれたなにかであった。

おそらく作っていたモノであろう。

そしてリトリリリの3人が鼻歌を歌いつつ機嫌よく前に進んでいると

「？」

「わるいこはいねーかー！」

「「きやあああああああああああああー！」」

ペコリーヌが中に入った魔物……のようななかである。

「こつちの道はあぶねえーぞー」

「ま、まもの!？」

「お、おつきいよ……」

「ひきかえさないと……たべちやうぞー！」

「……あいつが言うのと冗談に聞こえないわ」

「昨夜作っていたものは魔物の着ぐるみだったんですね」

「なるほどな……つてお前何してんだ」

一方のマクギリスは双眼鏡で彼女たちを観察していた。

「天使たちを観察しているのだよ。あれはアグニカ・カイエルの伝説の一場面には不可

欠だ」

「お前な……つかそれしかねえのかお前は」

「無論だ」

バカも突き抜けるともはや芸能である。

だがまあそのペコリーヌの魔物のことを素直に聞くわけもなく……。

「あーれー！めがあああああああああああああ」

そのままやられてしまった。

「「やったあ！」」

「チビ共にやられてどうすんのよ……」

そのためそのまま真つすぐ進んでいくユウキ以下の一行。

言うまでもなくヤバい方向に向かってる。

「このまま進むとどうなっちまうんだ……？」

「怖い魔物がいっぱいいるところよ……」

「え……」

それで案の定4人は狼系の魔物に遭遇する。

「!？」

「まずい……!」

ユウキが前にも出るも雑魚同然なため食われかける。

「皆でししよーを助けよう！」

ミソギの声でなんとか突撃？するも

「グリムバースト……！」

キヤルの魔法でなんとか狼は倒れる。

「これ……ししよーが？」

ユウキはまあGOODとサムズアップをする。

「ししよーすーいー！」

その裏でキヤルが疲れてたのは言うまでもない。

その後、総出で魔物退治することになる。

「たあつ！」

「ええい！」

「ヴァツ！」パンパンパンパン！

「……多い」

「天使の邪魔だ……！」

コッコロとキヤルは魔法、オルガはいつもの発砲、三日月とマクギリスはレールガンとたまに近接攻撃でなるべく悟らせずに動いている。

だがまあそれが長く続くのであつて……最終的にはかなりの疲労困憊になった。

「はあはっ……ちまちまは面倒くさい……」

「天使たちを守るためには仕方がないが……」

「止まるんじゃねえぞ……」

オルガは希望の花発動という上で……。

その後、後ろより何か近づき……。

「キヤルちゃん、コツコロちゃん！あとオルガ君、三日月君にマクギリスさんも！」

「きやあつ！……びつくりさせるんじゃないわよ！アホリーヌ！」

先程の被り物が落ちた時の衝撃かでボロボロになっていた。

言うまでもなく中身はペコリーヌ。

「すみません、このキグルミが脱げなくなっちゃって……そんなことより、このままだと巨大な怪鳥の巣に行っちゃいます！やばいです！」

「なんだと？」

「なにそれ」

「ふっ……そういうことか」

（いや、お前は何も理解してねえだろ……）

オルガは死にかけながらも突っ込む

「怪鳥の巣？」

「私、時々ここに取りに行くので「怪鳥の卵」…美味しいんですよ！キヤルちゃんも昨日、気に入ってたじゃないですか！」

「あれ魔物の卵だったの!?なんてもん食わせんのよ!!」

「そう言ってる場合じゃないよ…キヤル。そう話してる間に…」

三日月の勘通りに…

「ししよー!!」

振り向くと…その怪鳥に啜えられて運ばれるユウキの姿があった。

「ししよーをかえせー!!」

リトルリリカルの3人はそのまま怪鳥の巣まで突撃する。

時刻はすでに夕暮れである。

「ししよー!!」

「クカークカー!!」

「うわあああ!!」

だが大きな怪鳥に今の彼女たちが適うはずもなく、ただ逃げるだけしかできない。

結果、コッコロたちが到着した際には3人とも気絶してしまった。

「くあwせdrftgyふじーp」

「あんたなにを…つてあの3人も気絶しちやつてるじゃない！」

「主様も…！」

「なんということだ…」

「ちっ！」

完全に死んでいるオルガをほっぽりだしてマクギリスと三日月が怪鳥を相手取るも、先程までの疲労が重なり、うまく行動が取れない。

「はあはあ…！」

「これは…！」

「主様！」

コツコロが巢の木を切つて中に顔を出すと気絶しているユウキとカカシアメス様がいた。

「あ、アメスさま…？」

「もしかして田んぼを荒らしてたのってこのデカイ鳥!？」

「農家さんが太刀打ちできないわけですね…」

「グアアアアッ！」

そして怪鳥は大きいからかきぐるみのペコリーヌを襲う。

バルバトスとバエルもそれを止めようとするが払いのけられる。

ちなみにバルバトスとバエルは本来なら従来のMSのサイズへ大きくなることが可能だが、当人の疲労がたまって限界に近いため現状は不可能である。

「まずい……！」

「ちっ！」

そしてついには変身のようなものが解除されてしまった。

「やっぱ！グリムバーストオ!!」

それに気づいたキヤルが魔法を放ち、鳥をひるませる。

「さすがキヤル様……もつと魔法を！」

と横を見た途端にボロボロになっているキヤル。

「む、むり……今日一日魔物と戦ってたから魔力がすつからかんなのよ……コロ助も同じでしょ……」

「そりや……そうだな……」

オルガがなんとか起き上がると同時にある「魔術師」を思い出していた。

(コッコロやキヤルが何発も放つてやつとすつからかんなになる魔力を一発で消費していたあいつは一体なんだったんだ……?)

「ドブグシユ！」

そして当のペコリーヌはやられっぱなしであった。

「ちよつと！いつもの馬鹿力はどうしたのよ!!」

「お腹が空いて力が……きぐるみが脱げなくてお昼ごはんが食べられなかったんですよー!」

「ただだけ足引つ張るのよそのキグルミい……!」

「…おや?」

そしてその怪鳥はキグルミごとペコリーヌを突き…

「ペコリーヌ!?!」

そのキグルミは二人の目の前に捨てられた。最悪のパターンを想定した二人だったが…。

「おいしー!!うんうん」

「グアアツ!?!」

「あの子達、いい冒険者になりますよ!」

どうやらリトリリの3人の弁当の残りや焼いていた魚があつたようだ。

「全力、全開!!」

「プリンセスストライク!!!」

そしてその怪鳥を倒したペコリーヌ。

今回は珍しくオルガたちは見ていることしかできなかった。

「なんとかなったようだな…」

「うーん…ここまで動きすぎるとバルバトスも展開できなくなるんだ…」

「そのようだ。私のバエルも例外ではないようだ」

やはり三日月のバルバトス展開とマクギリスのバエル展開は体力に依存しているという間に間違いはないようだ。

なおユウキの力によるブーストがなければ展開できないオルガは例外とする。

「今回は俺たちも振り回されちゃったな…」

「まあ、慣れっただけだね」

「ああ」

「いやテメーにも振り回されたんだが…」

「細かいことは気にしないことだ。では私は失礼する」

「あいつらに会わなくていいの？」

「どうやらわたしは遠くから天使たちを見ていたほうが性に合っているのですね…」

立ち去ろうと…する前に何かを思い出したかのようにマクギリスは口を開く

「オルガ団長」

「あ?」

「団長はこの世界をどう思っている?」

「どう思うって…今までの世界とあんま変わんねえだろ。スマホとかそういうやつがなだけで魔法はあるし、魔物も大勢いる。これに近い世界つつたらやつぱカズマの…」
「そうか…:ならばこれからもその絆を育むといい…:「彼女たち」を救うための切っ掛けになるかもしれないからな」

「は?」

「では失礼する」

オルガからしてみればよくわからない言葉をかけられたわけであたただ疑問を抱く。

だが一応の助言ということで心には留め置くことにした。

一方の三日月も前のアメスからの言葉もあり、こちらは素直に留め置くことにした。

(彼女って…やつぱりキヤルの…)

卵から孵ったヒナをみて喜んでるリトリリや疲れの表情を隠せないペコ、キヤル、コツコ口の3人を見つつ、少し考えている三日月であった。

Menu 9 海です！

イカなのかタコなのか：

コツコロが商店街の福引で一等にあて、その景品として海水浴に来た美食殿御一行。

「いやっほおおお！海ですよ！海！ヤバいですね☆」

ペコリーヌはいつもどおりといえはいいかはしゃいでいる。

「コツコロちゃん！ありがとうー！！」

「喜んでいただけ嬉しです」

「んっ」

サムズアツプするユウキ君。

「ここが海か…こうやってじっくり見るのは初めてかもな。ミカ」

「うん、今までなかったね」

三日月とオルガも水着に着替えている。

ちなみに双方にあった阿頼耶識システムのピアスは転生と同時に消失しているので普通の背中になっている。当然普通に寝転がる。

一方のキヤルは木の陰に隠れようとするも…。

「キヤルちゃんみーっけ！」

ペコリーヌに当然のごとく見つかる。

「ほらほら、そんなところで隠れてないで〜」

「ちよ、ちよつと!!」

それを見るコツコロ達

「こつちみんなー!ぶつ殺すぞー!」

「別にいいと思うけど」

三日月のフォローもキヤルには聞こえず。

「…んんっ!」

(まさか監視を仰せつかって早々海に来ることになるなんて…!)

猫なので言うまでもなく水辺を嫌うのである。

当然泳げないのであった。

そんなこんなで美食殿の皆は海で遊ぶ。

一方オルガとミカはそんな面々を見つつ眩く。

「ミカ、こつちやってゆつくりするのは久しぶりじゃねえか?」

「だね…暫くこつちに来て色々とあつたし」

「ああ…だがなんかここは妙な異世界だと思わねえか？」

「妙？まあ…今までの異世界で妙じゃなかったのある？」

「そう言われると答えに困るじゃねえか…」

オルガたちが巡った異世界は数多くあり、最初の冬夜の世界やサトウの世界のようなゲームのステータスがあるような世界やら、共にやり直したことがあるスバルの世界、ギャグのようでどこか容赦がないカズマの世界などいくつもの世界を渡り歩き、そして今に至る。

「けどな…感覚っーのか…」

「まあ確かに妙な胸騒ぎはするけど…今から考えても仕方ないと思うよ」

「まあそうだけどな…」

「今は今でできることをやればいいと思う」

三日月はヤシをかじりつつ海を見つめた。そこではユウキが目には海水が入ってコックロに介抱されている姿もある。

「…だな」

同じくその光景を見たオルガは少しふつと笑った。

そしてその遊びが一段落したようで、立てたパラソルの付近で休んでいる面々である。

「ぜえ…はあつ…はあつ…」

「いやあく帰りへたばつちやってやばかったですね☆」

「やばかったですね☆じゃないわ！海舐めんなあ!!」

ペコリーヌが招待？した人力クルーズで途中で戻る時に疲れてしまったようだ。

ただこれはいつものペコリーヌの姿を見る限りでは珍しいことだ。

「珍しいですね…疲れ知らずのペコリーヌ様が…」

「実はここだけの話なんです…私が普段身につけている装備には筋力増強、滋養強壮、疲労回復に冷え性肩こりまでいろんな効果があるんですよ」

「なんと…」

「でもその代わりに使った分だけお腹がペコペコになっちゃうんです。やばいですね☆…だから私、この装備がないと普通の女の子と変わらないんですよ」

それと同時につけているティアラを指差す。どうやらそれも装備の一部のようだ。

「ペコリーヌ様の強さと食欲にはそのような秘密が…」

「なるほどな…」

コツコロが頷くと同時にオルガも頷く。

「ちよ、ちよつと。そんな話、アタシ達にしているの？」

「?…もちろん、仲間ですから」

「……」

キヤルは少しだけ驚いていたようだ。

その驚きの方向は……少し別な方向ではあるが。

その様子を三日月はヤシをかじりつつ気にかかるように見ていた。

「だからもしなにかあったら…三日月君、お願いしますね」

「いいよー」

現状でメイン戦力となるのはペコリーヌ以外には言うまでもなく三日月しかないのは言うまでもない。

コッコロは補助と回復、ユウキはプリンセスナイトのバフしかなく、キヤルも魔法の遠距離のみ、そしてオルガは盾である。

「いやちよつと！そういうのつてもっと重要に決めることじゃないの!?!」

「そうですか〜?」

そう話していると…

「と、とまってええええっ!!」

どこからともなく暴走ロバが突進してくる

「スズメさま!?!」

「また？」

そして前のようにバルバトスで止める三日月であった。

「た、助かりましたあ！」

スズメは深々と礼をする。

「大丈夫ですか？スズメ様」

「大丈夫？」

「コツコロさん、三日月さん、お久しぶりです」

「あら？知り合い？」

キヤルはコツコロと三日月に問いかける。

「はい。以前バザーで…」

「うん。ちよつとね」

「ああ…あの…」

「はじめまして！サレンディア救護院のスズメと言います」

スズメはペコリーヌとキヤルにもお辞儀をする。

「よろしくね。あたしはキヤル」

「おいつすー！私はペコリーヌ！」

「ユウキ！」

「俺は…オルガ・イツカだぞお…」

オルガはいつもの詠唱の短縮版的ななかである。

「このお荷物は？」

コッコロが指差すロバの後ろの荷台には置かれていた樽が何本か置かれていた。

「実は今、海の家を出してまして…」

「そうだ！」

するとスズメはその海の家と一緒に案内する。

（海の家？なんだそりゃ）

（海の近くにあるお店のこと。そこで食べ物とか売ってる）

（ミカお前…いつ勉強したんだ？）

（本で見た）

隙間を見つけて本を読んでいる三日月は昔とは違い、それなりの知識量を持っている。
る。

転生後は字をなにも気にせず読めるようになったが故のことであろう。

オルガも感心している。

そして海の家にて。

「久しぶりに会えて嬉しいわ」

「ご無沙汰しております。サレン様」

サレンは海らしく水着姿である。

「あなた達がコツコロさんのギルド仲間ね？よろしく！」

「素敵なお店ですねえ」

ペコリーヌは店内を興味津々に見ている。

「ありがとう！まああんまり大きくはないけど…」

そうするとスズメがメニューを持ってきてくれた。

「ご注文は決まりましたか？」

「ほほう…これがメニュー…どれも美味しそう…」

そしてペコを除く一同はある程度予測した

(あれね)

(あれ)

(あれでございますね)

(あれだよ?)

(あれか?)

「ここからここまで全部ください！」

((((やっぱり)))

予感は的中したのであった。

そして運ばれてくる料理たち。

「ふおおおおおっ！ いただきまーす！」

「「いただきまーす」」

「いただきます」

「いただくぞお…」

そしてペコリーヌを中心に食べ始める。

「噂通り、気持ちのいい食べっぷりね」

「よいしょっと…」

そこへ筋肉質の男が現れる

「サレンさん、こいつはどこに運ばばいい？」

「昭弘君、それはあっちの倉庫に運んでおいてね」

「ああ、わかった」

その声とサレンが言ったその名前にオルガはどこかピンと来る。

(こいつは…)

「おい！ お前、昭弘か！」

そう、筋肉質の男で明弘と言えば昭弘・アルトランドで間違いはない。

「その声は…団長と三日月!？」

オルガ達の方へ向かってくる

「あら？あなた達知り合い？」

サレンはオルガと三日月に問いかける

「ああ、昔ちよつとな…すまねえ、あとで話いいか？」

「ああ、俺も団長達に聞きたいことがあるからな」

そうして明弘は再び重い荷物を背負って倉庫の方へ足を運ぶ。

その筋肉は相変わらぬようだ。

その後、色々とあり、美食殿はメリクリウス財団の海の家に対抗するためのメニュー作りに勤しんでいたのだが、オルガと三日月と明弘は少し人のいないところにいた。

理由は前のことを話すためである。

他の面々に流石に前世の話はしにくいものであるが故だが。

「明弘と最後に会ったのは…スバルんとこの時の白鯨の時以来だったな。だがお前もこの世界に来てたんだな」

「ああ…いつの間にな…それで行き倒れているところをサレンさんに助けてもらった」

「ふーん…じゃあつまり今の明弘はサレンディアにいるんだね」

「まあそういうことになるな……助けてもらった礼はしつかりするつもりだ。それより……」

「それより?」

三日月は首を傾げる。

「ラフタは居ないのか?」

ラフタ・フランクランド

かつての世界において明弘と相思相愛になるがジャスレイ・ドノミコルスによる刺客の凶弾に倒れ命を落とした。

つまりオルガ達のように転生していてもおかしくはないが……。

「……」

オルガは首を横に振る。

ラフタのことは見ても居ないからだ。

エルの世界で見かけたのが最後と言っていい。

「そうか……」

「またどこかで会えると思うよう? なんとなくだけで」

三日月のそれは一見気休めのように聞こえるが実際は彼の鋭い勘による直感である。

的中率は意外と高い。

「三日月…ありがとな」

「あと、今の明弘はグシオン使えるの？」

「そいつは…」

その時、大きな鐘のような音が鳴る。

「クラークンが出たぞおお!!」

「こいつは…!!」

「オルガ、行こう！」

「団長、俺もいく！」

「ああ！」

4人はビーチのほうへ走り出した。

そしてその海ではメリクリウス財団のユカリがクラークンに捕まっていた…が当の本人は酔っ払いのため全く自覚がない。

「イカイカイカ」

「ウフフフ…ウフフフフ…」

「ユカリ!?!」

サレンは言うまでもなく驚いていた。

「酔い醒ましに海にぶん投げたらでっかいイカが現れて…」

「ここ、クラーケンが出るとかで遊泳禁止ですよお!？」

「にや。にやんだって!!」

スズメの指摘受けてタマキは文字通りのびっくり仰天していた。

「おもちかえりー」

「ユカリイイイイ!」

「ストオオツプ!待ってくださーい!」

ユカリとともに沈んでいきそうになるクラーケンを引き止めようとするペコリーヌ。

「ペコリーヌさま!」

「深いところにいっちゃだめですよー!」

ペコリーヌが引つ張ろうとするが装備がティアラしか無い今のペコリーヌでは力不

足であった。

「ぐぬぬぬっ…!」

そんな時…。

「くっ!」

三日月のガンダムバルバトスルプスレクスと明弘のグシオンリベイクフルシティが

かけつけ、同じく足を引つ張る。

「三日月君…と…」

「明弘だ」

「ああ、あの筋肉の明弘君！明弘君も三日月君みたいになれるんですね☆」

「まあな…」

明弘も三日月と同じように原寸大でのMS展開と人と同程度でのMS展開が可能である。

なおオルガはプリンセスナイトの力がないため見守ることしか出来ない。

（なんだよ…）

「手伝う」

「ありがとうございます！」

だがペコリーヌとMS2体でも力不足のようで、奥には行かないが引つ張りきれないという事態であった。

グシオンのライフルを至近距離で射撃しても効果が殆どない。

「ちっ、こんな大きなやつを相手すんのは初めてだ！」

「だよね…」

「はあ…ホント、このギルドに入ってからイベントに事欠かないわね」

「はい…」

キヤルの言う通りこのギルドが出来てからから大なり小なり出来事が多い。

コツコロも同意する。

「でも…こんなにもドキドキする毎日が来るなんて…故郷に居た時は想像もしませんでした」

コツコロはそんな毎日でも楽しいようである。

そしてキヤルもまた…

「ふっ…アタシは落ち着いた日々を送りたいの」

楽しいと感じていた。

「ペコリーヌ、ミカ、あとその明弘っていう人。そいつを陸に上げるわよ」

そしてキヤルは詠唱を開始する。

「はい！キヤルちゃん！」

「いくわよ！グリムバースト!!」

「イーカ…イカイカ…」

「ナイスキヤルちゃん！」

「明弘、離れるよ」

「ああー！」

そしてバルバトスとグシオンが退避すると…

「おりやああああー！」

そのグリムバースト爆発で空に浮かせた後、ペコリーヌはその力で陸の方へクラークをぶん投げる。

「あとは任せて！ソードオブフェニックス!!」

「いかああああああああああああああ!!!」

それによりクラークは丸焼きになった。

なおユカリは無事のようなのである。

なんとか鎮圧？に成功したのであった。

その後、クラークンを使った料理をペコリーヌを中心に考案し、サレンディアの海の家も大繁盛となった。

「イカスミパスタ4つ！」

「わかりました!!」

明弘やスズメも当然駆り出される。

一方の美食殿の面々はキヤルにビーチで並ばされていた。

「ほら、ちゃんと並んで…コロ助のお陰で海にもこられたし、名物料理もできた。これは

アタシからのご褒美よ」

すると詠唱と同時に面々が何かに包まれる。

「なんだそれは？」

「な、何も変わっていませんが……」

オルガとコツコロの疑問にキヤルはウインクしつつこう答える。

「海の中を自由に泳ぎたくない？」

そして俺達は海の中へダイブした。

キヤルの魔法の効果で溺れることはなく海の中でも目をしっかりと開けられる。

泳いだ経験があまりない俺たちでも恩恵にあずかれるのは魔法の良いところだ。

(魚がいつぱいじゃねえか……)

(ふーん……あの魚は……)

(さかな、おおい……)

海の中も透き通り、よく見える。

俺たち男もそうだがペコリーヌ、コツコロ、キヤルも同じように泳いでいる。

しかし……鉄華団の家族とは違う……言い表せないその繋がり。

どこか心地よいものだった。

俺がしっかり守らねえとな……美食殿の裏団長として。

(それは駄目だ……ていうか、いつ裏団長なんて役職作ったの?)

(ミカお前……)

だからなんで俺の心を読めるんだ……?

そうしているうちに俺たち6人は手を取り合う。

この絆がこれからも続くようにと願いながら……。

Memu10 プリンに振り回される

プリンにしてやるの!!

俺はコッコロとユウキと一緒にコカトリス亭のマスターにお土産を持っていこうと
していた。

ちなみにペコリーヌとミカは市場に買い出しに行き、キヤルは留守番をしている。

「喜んでいただけると良いのですが…」

「ネー!」

「ああ、そうだな」

そうしてコカトリス亭の前に来たのだが、珍しく店が閉まっていた。

「休みか?」

「おかしいでございませぬ…休業日は暫く無いと仰られていたはずなのですが…あ、扉
は開いておられますね」

そしてコッコロはその扉を開ける。

「いんにちわ……きゅ?!」

その目線の先には何かをするマスターを止めるイカッチとチャーリーの姿があった。

「どうしちまったんだよマスター!!」

「もつと腹に溜まるもん作ってくれよ!!虫料理とかさ!」

「プリンプリンプリン…」

マスターは何かをボソボソと永遠に繰り返しながら呟いている。

何があつたんだ…?

「顔色わるいね」

「おお!3人とも良いところに!あんちゃん達もマスターに何とか言ってくれよ!」

「ずっと寝ないでプリン作ってんだ!このままじゃ倒れちゃうよおお!」

2人の言う通り、マスターは何かがおかしい。

まるで何かに震えているかのように…。

どこかの教徒に延々と洗剤を売りつけられたような…いや、それ以上のなにかに見える。

「少しお休みになられた方が…」

コッコロがそう言うものの

「うわああああああ!ううううっ!プリン!プリン!!!止めるな…止めるんじやねえ…!」

止まるんじやねえぞ…と言える雰囲気でもない。

一体何があつたんだ…？

するとユウキが周りを気にする。

「うー……」

「主さま？」

「どうしたユウキ？」

「なんかいるよ！」

ユウキが上に指を差すが誰も居ない。

「なにもいませんが…？」

「何も居ねえぞ？」

その時、入口の方から誰かが入ってくる。

「あなた、見えるんですね…そこにいるものが」

「あなたは…」

紫髪のショートであり、角がついている。

魔族のようなやつか…？

「この街で占いをしているシノブと言います。噂でマスターが取り憑かれたようにプリ

ンを作っている聞いたので…来てみたのですが」

その通りに後ろではマスターが未だにプリンを作っている。

「思わぬ出会いがありました」

シノブはユウキを見てそう呟いている。

「一体…どういふことなのでしょう…」

「ミヤコさん。この方、もしかしたら私達の救世主になるかもしれません」

「「ミヤコ…?」」

「なんだそりゃ…?」

一同が首を傾げると空中から何かが現れた。

「そんなことよりプリンよこすの!!むう…!」

だぼだぼの服を着ている少女…が空中で浮かんでいる。

つまりこいつは…。

「こ、これは…」

「こいつは…!」

「幽霊?!」

言うまでもなく俺たちは驚いた。

そしてそのマスターが死にものぐるい？で作ったプリンを食するミヤコという幽霊。
「おいしいのー！」

「プリンは温度が命…プリンは温度が命…」

「虫をデコレートしたプリンを作ったときは呪い殺そうかと思っただけ…毎晩毎晩プリンを作るように囁き続けてせいはいだったの」

囁くというか…呪いとなつちまつてるんじゃねえか…？

「駄目ですよミヤコさん。カジュアルな感じで人に取り付いては…」

「はいはいなの」

シノブの注意も聞き流すミヤコ。

「シノブ様…とお呼びしてもよろしいでしょうか？こちらの方は…」

「ちよつとプリンに並々ならぬ執着心がありますが…本物の幽霊です」

「本物か…」

俺はそいつをまじまじと見る。

幽霊つかそういう系はあんま見たことねえんだがな……。

悪霊はあるが。

「むうっ、なんなの？このプリンはミヤコのモノなの。誰にもあげないのーっ」

…幽霊というか駄女神に近いんじゃねえのか？こいつ。

「幽霊とはこんなにも可愛らしい存在だったのですね…」

「その幽霊を感じ取れたユウキさんの力を見込んで…お願いがあるのですが」
「？」

ユウキは人畜無害に返事をする。

「私達、ディアブロス悪魔偽王国軍のギルドハウスに来ていただけじゃないでしょうか？」

一方のペコリーヌと三日月は市場を見ていた。

三日月が荷物持ちみたいなのものであるが、ペコリーヌが買っている食材等を持っても特に苦は感じない。

相応に鍛えているというのものもあるか、だが流石に明弘には負けているが。

「あんまり見たことなかったけど、いっぱい店があるね」

「はい！王都ランドソルは交通の便もあつて各方面からの品物が集まりやすいのでこうして巨大な市場になっているんですよ」

「へー」

だが耳を傾けると少し不穏な会話がある。

「また劇場が取り壊されてしまったよ！ユースティアナ様のお触れだと…」

「庶民の娯楽なのになんだかねえ…」

それを見てペコリーヌはどこか悲しそうだ。

「…」

(ふーん…)

そして三日月はヤシをかじっていると…。

「ペコ姉さん、三日月のあんちゃん」

「チャーリーさんにイカツチさん…それにマスターまで！珍しいですね
いつもの2人が話しかけてきた。

その2人はどうやらマスターを連れて飲んでいるようだ。

「いやあ、今日は大変だったんですよ。マスターが幽霊に取り憑かれて」

「幽霊？」

「なにそれ」

「でもご心配なく、ユウキのあんちゃんのお陰でお祓いできて」

チャーリーがマスターの肩に手を乗せる。

治っていない気がするが…。

「ユウキ君が？」

「あいつが？」

いつものまにと思おう2人。

三日月と言えど、イカッチ達の最初のことを話すほど空気が読めていないわけじゃないので言わないようだ。

その時…。

「オラオラどけどけ！5代目流星号のお通りだ！」

そう言いながらピンク色の荷車を人力で引つ張つてくる青年がいた。

「ふう…終わったぜ！今日の配達」

「ご苦労さん！うちのバカ息子の代わりにすまないねえ」

「良いってことよ！ちようどいい運動になるしよ！」

その声…その外見はまさしく鉄華団のノルバ・シノである。

「シノ…？」

「お、三日月じゃねえか！」

シノが三日月のことを認識すると駆け寄る。

「なんだよ、お前もここに來てたんじゃねえか」

「うん、今は居ないけどオルガもいるよ」

「だろうな。お前とオルガはセットだからな！」

「あの…知り合いですか？」

「おう、俺は…って…！」

シノはそのペコリーヌに目を奪われた。

そうシノが生前?より望んでいたでけえおっばいだからである。

するとシノは三日月を引っ張り、内緒話をするかのように近づいて話し始める。

「なあ、あいつつて…」

「ペコリーヌ。俺とオルガが今いるギルドのギルドマスター」

「いや、それも…だがなんであんなでつけえおっばいなんだよ!」

「知らない」

三日月はユージン等とは違いこういうのには全く乗らない。

「つれねえなあ三日月」

「だいたいそのでけえおっばいはあのひともだよね」

ヤスコのこことを見る。

ちなみにヤスコはペコリーヌとなにか話しているようだ。

世間話だろうか?

「三日月…若さつて知ってるか?」

「でも大きいよね?」

「はあつ…まあいいや。ところで団長は?」

「今は別行動。あとギルドにはコッコロとキヤルとユウキがいる」

「へえ、中々のギルドってやつなのか？あんなまわかんねえが」

「シノこそ、なんであそこの家にいるの？」

「いやあ……この世界に来た時に行き倒れちまつて……それであのヤスコさんに飯の恩ができたんで……それでな」

「だいぶ違和感が拭えないものではあるが、本来タメ口なシノは珍しくヤスコにはさん付けしている。」

「どうやら相言われたらしい。」

「ふーん、明弘と似た感じだね」

「明弘もいんのか？」

「うん。サレンディア救護院で働いてる」

「へえ……ちなみにそれ以外はいねえのか？」

「まだわからない」

「ま、これだけ団長と三日月が転生してるようならそりや俺達も引つ張られるだろうよ」

「……なんかごめん」

オルガ、三日月が転生すると同時に同じく死んだ面々はたまに同一世界に転生していることがある。

それに関しては完全なランダムであり、中には死んでいないはずの面々が現れること

もある。

この現象に関しては最初に撃ち殺して復活しているあの世界神にもよくわかっているものらしい。

「気にすんなって。だいたい地味に天とやらでくすぶってるような俺達なんかじゃねえだろ? そして俺も

来たってことはなんかでけえ山があるに違いねえ! だろ? 三日月」

「デカい山…か…ま、わかんないけど、ちよつと怪しいところはある」

言い表せないが三日月はいわばニュータイプのような勘の鋭さを持っている。もちろんよく当たる。

「だろ? その時になったら俺はまた四代目流星号で活躍してやるぜ!」

「助かるよ。シノ」

相変わらずのシノの様子に少し笑みが溢れる三日月であった。

その後、ペコリーヌはお手伝いのお礼をもらい、三日月とともにギルドハウスへと帰還するのだが…。

「女神イ? そんなことはどうでもいいの! 早くプリンをよこすの。じゃないとお前もプリンにするの!」

三日月の問いに答えになってないものを返すミヤコ。

そのため三日月は更に思考が追いつかなくなる。

(だからなんでプリン?)

「ま、待つてください! 私が美味しいプリン作りますから、皆をもとに戻してくれませんか?」

「嫌なの。今日は散々待ったの」

ミヤコは自分勝手すぎるのであった。

余計にどこかの狂信者が信仰している神様を思い出す三日月。

そしてペコリーヌは少し汗をかきつつも表向きは自信満々にこう提案する。

「期待してください。食べたこと無い美味しいプリンですから」

「ゴクン…ほ、本当なの?」

「もちろんです」

その夜。

「完成です!」

ミヤコの前に出されたのはいわゆるプリンアラモードであった。

いつものプリンよりは豪華な代物であり、こころなしか輝いているように見える。

「ほわあああつ」

「美食殿特製、なめらかプリンです！」

「いただきますなの」

ミヤコはスプーンを使い、プリンを取る。

そのプリンは文字通りなめらかに揺らいだ。

「ほおおおっ……」

「このプリンの滑らかさを出すには湯煎の温度が鍵なのです」

「湯煎の温度でこんなに違いが……」

「さあ、召し上がれ☆」

ミヤコはそのプリンを口へ運んだ。

「はあっ……はむっ……むっ！」

そしてミヤコは文字通り飛び上がる。

「超美味しいプリンなの〜！こんな滑らかで〜コクがあつて〜……幸せでほっぺがとろけ

そうなの〜」

文字通り昇天しかけている。

それと同時に3人は元に戻った。

「ようやく……ようやく巡り会えたの……ミヤコのプリン……」

「ついに見つかつたのですね……理想のプリンが……これで心置きなく成仏できますね」

シノブは涙ぐみながらも手を合わせている。

それに合わせてキヤルとコツコロは手を合わせる。

三日月とユウキはそんな様子をただただ眺めていた。

だがうまい話には必ず裏がある。

「ふう……よかつた。ヤスコさんからもらったお土産が早速役に立ちましたね」

そのペコリーヌが手に持っていたのは……セミである。

一応補足するとセミは食べることが可能であり、味はナッツに近い。

入れることも一応……可能なのかもしれない。

当然それを見たミヤコは昇天途中で大幅に口から虹色のあれを放出してしまった。

「いばあつ……ぐつ……」

そしてそのまま地面に落ちた

ある意味退治完了である。

「……お騒がせしました」

シノブがミヤコを文字通り担いでいる。

「ど、どういたしました……」

「では……」

そのままシノブはその場を後にした。

「また遊びに来てくださいね☆」

ある意味波乱な出来事は終わりを告げた。

ただ一つを除いては……。

「……そういえば……オルガ様は……？」

「……オルガ？」

その月夜には何かを指差すような手が浮かび上がったように見える。

そしてこうも言っているようであった。

『だからよ……止まるんじゃねえぞ……』

Menu 11 消失

姉と妹??

まるで宝石のように輝く空間。この世のものではないように見える。

その中心には4人が居た。

「もう随分と動き出しているようだ」

「ああ、懸念された出来事が起きようとしている」

メガネを掛け、赤髪をまとめている女性と謎の仮面をしているマク…モンタークはそう2人に伝えている。

「それって…」

「まあ…時は有限。敵もそうノンビリと待つてはくれないってことだね」

「そのようだ。そこで君たち…シズルとリノに行ってもらいたい」

そしてその内容を説明した後、女性が何かしらのゲートを開き、その2人をどこかへと転送する。

「…頼んだよ」

一方の美食殿は朝からペコリーヌがオーバーなことをしたせいでキャルのお気に入りぬいぐるみがぶつ壊されてしまった。

そして朝食の間であるのだが。

「いい加減にして！あんたもうちよつと人のパーソナルスペースに気を使いなさい…はむ…」

「ばはふおなふ？なんですか？それ、美味しそうですね☆」

「食べもんじゃないわよ！」

「人との距離感…でしようか？」

コツコロはそれに補足をする。

ユウキはいつもどおりもぐもぐと食べており、オルガと三日月も変わらず普通に食べている。

「…ごめんなさい。気をつけますね」

「ほんとにわかってんの？それはそうと、アタシの大事なぬいぐるみどうしてくれんの！」

「もげもげ〜」

ユウキの言う通り首がもげて、中の綿が出てしまっている。

「あの、もしよろしければわたくしが…」

「直せるの?」

「田舎ではよく針仕事をしていましたので…」

「さすがコツコロちゃん!」

「針仕事まで…すげえよ…コツコロ…」

「もぐ」

どこかで聞いたオルガの無視する三日月。

「ナイス」

「こういう時のあんたはホント輝いてるわね。コロ助」

「はい」

そんなこんなで話はまとまったようで、キヤルと三日月を除いた面々は表へ出ることにした。

「では、行ってまいります」

「いってきまーす! ☆」

「いってくるぞお…」

「オルガ、また死なないでね」

「わかってる…」

「頼んだわよー」

そして一同が見えなくなった後でキャルと三日月は家へと戻っていく。

「うううっ…さあ、部屋片付けよ…」

「手伝うよ」

「ありがと…ふあああつ…」

大きなあくびをするキャルであった。

そしてペコリーヌ、コッコロ、ユウキ、オルガはランドソルの中心の市場へと出向いた。

「まずはぬいぐるみの色に合う生地を探しましょう」

「うん」

「そうだな」

だがその面々の後ろには2人の影がいた…が一同は気づかないのであった。

「素敵なお店があり、ワクワクしてしまいますね…」

「改めて思うが結構大きいじゃねえか…」

そう思うコッコロとオルガであるが、奇妙な出来事にもう遭遇する

「頼んでた靴できてるかい？」

「はいよ。ちよって待っててね」

と靴屋の女将らしき人が奥へ行くも…。

「…そういえば、靴…誰が作ってたんだっけ？あたし作らないのに」

「おいおいどうしたんだよ。もう耄碌しちまったのかい？」

まるで何かが欠けたかのようになっていた。

言い表せない不気味さを感じ取るコッコロ。

オルガも同様だが、似たような出来事を思い出していた。

(…いつは…白鯨の時みてえだな…)

白鯨…それはある世界で敵として交えたモビルアーマー以上の存在の化け物のことである。

ただ図体が大きいだけではなく特殊な霧を放ち、自傷行為に走らせることができる霧やオルガやその周辺の一部には効かなかったがその存在を世界から何も残らずに消し去る能力がある霧を発することもできる。

だがあの世界ならともかくこの世界では少なくとも存在はしていないはずである。

(似たようなことが起こってる…ってことか…いや情報が足りねえな…)

とりあえずオルガは今のことを考えるの止めて、材料探しへ戻ることにした。

お目当てのものは見つからず立ち尽くす3人。

「中々見つからないものですね……これだけ広い街ですからどこかにあると思うのですが……」

大きな街であるが故に店は点在しており、見つかりにくいのは当然と言える。ましては中世に近い世界においては。

「あつち……さがしてくる」

「なるほど。皆で手分けして探すほうが効率がいいですね☆」

「んんっ」

ユウキの提案……といえれば良いのか。

ここはそれぞれに分かれることになった。

オルガとユウキ、ペコリーヌ、コツコロという形で。

「きじ……きじ……」

「生地だぞお……見当たらねえじゃねえか……」

とはいったものの、見つからないものは見つからない。

そう言つて誰も居ない店の前を通り過ぎようとしていたが……。

「なんだ？」

その店の奥からなにか落ちるような音がしたと同時にグラスが転がり、それと共にモ

ヤのようなものが漂っていた。

「こいつは!」

「!」

「まてユウキ!」

ユウキは剣を抜き一目散に駆け出す。

その先では男が今にもシャドウに襲われようとしていた。

「はああつ!」

そしてユウキは剣を縦に振るうがそのシャドウはその剣を片手で受け止め、もう片方の手で衝撃波を発した。

それによりユウキは道のほうへと吹き飛ばされてしまった。

「ぐあああつ!」

「ぐあああああつつ!!」

当然のごとくオルガは巻き添えを食らい、希望の花を発動させてしまう。

だがユウキはオルガよりは耐久があるためなんとか立ち上がろうとする。

「■■■■」

だがシャドウは動く…というよりまるで瞬間移動のごとくユウキに近づき、捕食しようとする。

「……！」

「ぐうっ……！」

なおオルガは動こうにも動けず気絶してしまった。まさに絶体絶命であった。だがその時……。

「セイクリッド……パニツシュ!!」

薄紫色の髪と白を基調としたまるでドレスのような服を着た少女がそのシャドウを文字通り一刀両断する。

「■■■■！」

シャドウは煙をあげるように消滅した。

「やっぱり来てよかった……こんなところにまで現れるなんて……」

「あの……ありが」

「あいたかったよー！弟くくん！」

「えっ」

「怪我はない？怖くなかった？お腹の調子はどう？昔っから緊張するとお腹痛くなつてたもんね。大丈夫？トイレついてってあげようか？」

「……!?!」

「ズボン1人でおろせる？ああ、今弟くん記憶をなくしてるんだよね……心配しないで……」

お姉ちゃんがついてるから」

「おねえ……ちゃん……?」

ユウキは突然のマシンガントークのような何かにただただ圧倒されていた。

「コラコラコラコラコラコラ!!!」

そこへ薄い栗毛であり、少し背が低い少女が全速力で駆けつける。

「駄目ですよシズルお姉ちゃん! そつと遠くから見守つてなきや! マスターにそう言われてるじゃないですか!」

「だってだって!」

「いいからこつちこつち!」

そのまま背が低い少女が自称ユウキのお姉ちゃんをそのまま押し込むようにどこかへ走り去っていった。

「失礼しましたあああああ!」

「何があつてもお姉ちゃんが見守つてるから! 見守つてるからあああ! ずっと見守つてるからあああああああ!」

二人の少女がまるで嵐のように通り過ぎていった。

なおその巻き添えを食らつ奥尔ガはまた死んでいた。

「だからよ……止まるんじゃねえぞ……」

「誰？」

一方、美食殿ギルドハウスではキヤルの部屋の後片付けが終わった。

「んんっ…完璧。ありがとねミカ」

「別に…」

「アンタって相変わらず謙虚よね…」

三日月のお陰で予定より早めに片付けられたようだ。

「じゃ、アタシはちよつと用事があるから。留守番よろしく」

「いいよー」

三日月は農業の本を読むことに戻る。

キヤルの用事というのは…言うまでもなく陛下への報告のことである。

「……」

三日月はなんとなく察していたが、現状で詮索しても意味はないと判断し、特に行動はしなかった。

そして静かに本を読むのであった。

「主さまー、オルガさまー」

「どうですか？生地の方は見つかりましたか？」

「ううん」

「全く手がかりはなしだ」

再び4人は集合する。

だが収獲はゼロ。

「最悪見つからない時は染め物職人さんに弟子入りしちやいませうかね」

「ペコリーヌ様ならそれも可能な気がいたしますね。ともあれ、キヤル様のためにももう少し探してみましよう」

「そうだな」

「おー！」

一方、キヤルは陛下の玉座へと足を進めていた。

手には陛下のためにと花を持ってきてきているようだ。

「陛下？」

「ここに来なさい。キヤル」

すると玉座の近くの所に隠し扉のごとく開かれる。

そしてそこへと足を進める。

キヤルは当然顔色は良くはない。

その先では陛下がシャドウを周りに集め、そしてある2つのシャドウに仮面を与えていた。

「どう？このペルソナ…美しいでしょう？」

その仮面が与えられた2つのシャドウはうめき声をあげる。

「ヴオオオオツ……！」

「ツミ…ブカキ…キサマアアアア!!!」

片方は赤く禍々しく輝いた。

そしてもう片方は同じく禍々しくなった後、どこか硬い装甲のようなものをまとい始めた。

ただし他のシャドウより強い黒いモヤでその詳細はよく見えない。

「さあ、おいきなさい……私にさらなる美酒を…」

そしてその二体のシャドウはキヤルの横を通りすぎる。

それと同時にキヤルが持っていた花は枯れてしまった。

おそらくシャドウの能力によるものであろう。

「なにその汚いの……ここは神聖な場所……。捨ててきなさい」

どう考えても陛下が召喚したシャドウによるモノのせいではあるが、それに反論できるはずもなく

キヤルはそれを飲み込むしかなかった。

「……はい」

「見つかりませんね……」

「全く見つからねえじゃねえか……」

一方、コツコロとユウキとオルガは引き続き生地を探していた。

だがあいも変わらず収穫はなし。

そんな時に店の人が話しかけてくる。

「お嬢ちゃん達！食ってきな！美味しいよー！」

同時にぐうううつとユウキのお腹の音が聞こえる。

どうやらお腹が空いたらしい。

「まいどー！」

そして3人はホットドッグを食べる。

「ピリツとする味がお肉とよく合いますね」

「美味しい…美味しい」

「ぱくぱく…」

だがユウキは赤ちゃんということもあり、口の周りやらをケチャップで汚してしまっている。

「主様。お口の周りが…」

「んんっ…」

口を拭くも服の方も汚してしまっている。

「こっちも…シミになってしまいますね。ちよつとハンカチを水で湿らせてまいりませう」

トテトテとコッコロは噴水のほうへと向かう。

「ちようど良い所に…」

「……あぶねえ！」

その時、オルガは第六感…というより「矢受けの加護」のスキルのような何かを発動させとつさにコッコロの盾となる。

「ぐうっ!？」

当然のごとく矢がぶっ刺さる。

「オルガさま!？」

「だからよ……止まるんじやねえぞ……」

そしてその矢に結び付けられていた紙を解くと。

『近い』

この世界の言葉にでこう書かれていた。

しかもかなりの大文字で。

「……？」

そしてコツコロがその後ろを見ると木の陰から見ている少女がいた。

かなり黒いオーラを交えて。

「……」

そしてコツコロはオルガを引っ張り足早にその場を後にしようとするが……。

「あーちよつといいですか!!」

回り込まれてしまった。

「あなたお兄ちゃんなんなんですか!!」

なお一応オルガを打ち殺したにも関わらずそれに触れることはない。

「そこは謝るとこじやねえか……」

なんとか起き上がるオルガ。

「あの……どちらさま……」

「質問を質問で返さないください！」

「きゅっ…す、すみません…わたくし、ユウキ様にお仕えしているコッコロと申します」
「お仕え？」

「偉大なるアメス様のお告げにより主様のお世話を…」

「お世話!?!恋人とかじゃなくて？」

「どうしたの？リノちゃん」

「大変ですお姉ちゃん！お兄ちゃんに謎の女が!!私達が知らない間に謎の女が!!!」
「落ち着くんだ…ぞ！」

「ゴツン…というものではない衝撃波が発せられるかのごとく現れた「お姉ちゃん」からリノと呼ばれた者へ頭突きのような何かが行われる。

「!」

「やべえじゃねえか…」

コッコロとオルガは驚いている。

「ごめんね。弟くんのこと大切だからつい興奮しちゃって。私はシズル、この子はリノ」
「ドモ」

文字通りリノは目が回っているようであった。

「い、いえ…わたくしはコッコロと申します」

「俺は…仲間のオルガ・イツカだぞ…」

「あの…主さまにご兄弟が…」

「そうなの。私達は弟くんの…」

シズルがユウキがいる方向を見た途端。そこにはユウキが影も形もなく消えていた。

「いなーい!?!」

コッコロとオルガも確認するも居た場所にはホットドッグを落ちていた。間違いない。ユウキが食べていたものだ。

「主さま…」

「こいつは…!」

「まさかシヤドウが…!」

「このような街なかに?」

「シヤドウだと? 前の時は村だったがこんな街の中にもいんのか?」

シヤドウ

美食殿が前に撃退した謎の存在である。

「ランドソルには今、ロストと呼ばれている現象が多発しているの…弟くんが心配だわ。手分けして探さない!」

シズルの言葉もあり、ユウキを探すことになった。

「……そういえば、こうしてすることないのって久しぶりかな」

ギルドハウスで1人留守番している三日月は呟く。

今まで何かしら戦ってきた三日月がこうして何も大きなことはせずに暇つぶししているというのはかなり珍しいことであろう。

「みんな遅いな」

そうぼやきつつもヤシをかじるのであった。

その後、シズルとリノは再びシャドウと会敵する。

「リノちゃん！」

「外しませんよ！アローレイン!!」

リノの必殺技でシャドウを蹴散らしている。

だがユウキはいなかったようだ。

「ここでもなかった…」

「弟くん…」

ロストという現象は簡単に言えば存在するはずの人物の記録や記憶が消失しているというものである。

そのためユウキの記憶がある現状は少なくともロストには巻き込まれていないと断言しているがランドソルは現在治安が悪い方向へと向かっているためどちらにしろ心配である。

「シズルさま・リノさま！」

コツコロとペコリーヌ、オルガが来たようだ。

「この人は…？」

リノがペコリーヌのことを指して言う。

「同じギルドメンバーのペコリーヌ様です」

「ユウキ君を探してくれてるんですね。ありがとうございます」

ペコリーヌはお辞儀をする。

続けてシズルが話し出す。

「コツコロちゃん、なにか手がかりは…」

「いえ…」

途中脱線したもののユウキ自体の手がかりはまったくないと言って当然だった。

「仕方ありません。こうなったら搜索願を出しましょう」

「まあそれしかねえな…」

そしてギルド協会においてユウキの搜索願ポスターを貼ることにした。
コツコロがちやつちや書いて貼っている。

「はあっ…」

「手詰まりじゃねえか…」

「あら？」

そんな時に話しかけてきたのはギルド協会のカリンである。

「どうされたんです？」

「実は…主さまが行方知れずに…」

「ああ、アイツの行方がつかめねえ」

「？ユウキさんなら昼間来られましたよ」

「本当でございませうか！」

ペコリーヌとコツコロはカリンにスイッと駆け寄る。

オルガも後ろにいる。

その時、ギルド協会の大きなドアが開く。

「あ、おかえりなさい。ユウキさん」

そこには汚れだらけになっていたユウキの姿があった。

「ただいま」

手には虹色の蚕を持っていた。

「はいこれ」

「立派な虹色蚕、これでクエスト完了ですね」

「あの…これは一体…」

「ユウキさんが珍しい生地を探しているとかで良いクエストがないかと相談されました」

そう言いながらカリンはクエストのその紙に完了を意味する印を押す。

「主さまお一人で…」

「ユウキだけでか?」

「うん」

コッコロとオルガの問いにもサムズアップして答えるユウキである。

その後職人にその蚕を任せ生地を作ってもらう間にそれまでの経緯をユウキは放す。

「ホットドッグ食べてたとき…ずっとさがしてた生地が手にはいりそうだったからクエストうけてみた」

「こんな大変なことを…よくぐ無事で…」

「ちよつと食べられそうになつたよー」

(俺の盾無しで…すげえよ…ユウキは…)

コッコロとオルガは感激しているようだ。

「本当にありがとうございます。ユウキ君」

「…これで、キヤルのぬいぐるみも直るかな」

「…はいー!」

「ああ、そうだな」

その美食殿の4人の様子を眺めているシズルとリノ。

「記憶は失っちゃったけど、誰かのために頑張るところは変わってない…私の大好きな弟くんのままだよ」

シズルはそう呟いた。

それはまるで本当の姉のような物であった。

「シズルさま、リノさま、今日はありがとう…」

コッコロがそうお礼をしようとしたがいつの間にか二人は姿を消していた。

「…本当に…ありがとうございました」

今はいないその2人に感謝を込めてコッコロは言うのであった。

一人静かに帰るキヤル。

あのようなことがあつた以上無理もない。

ただ彼女にとつてはそれが日常だった。

少し前までは…。

(…あのシャドウ…今までと雰囲気違った…。アタシ、このままでいいのかな…?)
そう思いながら足をすすめるとギルドハウスの前に着く。

「…」

その顔に手でパンパンと叩き、悟られないように気合を入れ直した後、そのドアに手をかける。

「ただいまー!」

だがその中には誰も居ない。

三日月がいたはずだが、姿が見えない。

「…」

それに関して少し淋しげな表情をするも…。

「あ、キヤル帰ってきたんだ」

キヤルの後ろから三日月がひよこつと現れる。

「うわっ！つてミカじゃない。びつくりしたわ」

「ごめん。ちよつと森の方で薪切つてたから」

三日月の手には束の薪が抱えられている。

「あつそ………ただいま」

「うん、おかえり」

三日月は特に用事について聞くこともなくキヤルを普通に迎えたのであった。

そしてそれと同時に4人も帰還する。

「ただいまー！」

「ただいまもどりました」

「帰ったぞお……」

その後ろからはユウキ、オルガ、ペコリーヌ、コツコロの4人がいた。

ペコリーヌは修復したキヤルのぬいぐるみを掲げていた。

虹のということもあり修復した部分が虹色に輝いている。

「おかえりー」

「遅かったじゃない。今日はどんな寄り道してきたのよ！」

面々を出迎える三日月とキヤルであった。

Menu 12 裏と表

皆のために!

「みんなー!朝どれ卵の目玉焼きですよー!」

ペコリーヌはいつもどおり朝ごはんの時間を知らせている。

「おー」

「美味しそうじゃねえか」

「だね」

「半熟にしてくれた?」

「もちろんです☆」

ユウキは早速一目散に食べている。

成長したもののやはりまだまだだということか。

「朝出掛けられたのは市場だったのですね…」

だがキヤルは目玉焼きを見て食べようとしない。

「キヤルさま?」

「ちよつとまって…」

「ん？」

「どした？」

オルガも食べているようである。

「ないじゃない！この美味しそうな半熟目玉焼きを挟むパンが!!」

キヤルは不服そうだ。

それに対してペコリーヌはワントンポ置いて話し始める。

「そうなんです！よく気づきましたねキヤルちゃん！そこで、皆に相談がありました」

「は？」

「じゃん！市場に出かけたら商品が少なくてですね。聞いたたら街道をつなぐ橋に魔物が住み着いちゃったみたいで…小麦とか商品の流通ができなくて皆困っているそうなんです」

「それは難儀な…」

「国が…ランドソルがなんとかしてくれればいいですが…何故か王宮は動いてくれず」

キヤルは意味深な表情をしているが特に何も言わない。

「ハナから国なんか当てにならねえだろ。聞いた話じゃ治安維持もだいぶヤバいみたいだしな」

オルガはこれまでの経験からそう話す。

ハナから国が…というかギャラルホルンと戦い、そして滅ぼされたというものなので当然である。

「ギルド管理協会に行ったら、クエストの募集もかかっていたので…ぜひ受けたいんですけど…」

珍しくペコリーヌにしては弱い論調だ。

「…クエストランク、ちよつと見せて」

キヤルがそう言うのとペコリーヌはそのポスターを見せつけたまま動かない。

「んん?」

「……」

そして下の見えない方を指でちらつと見てみると…とてもじゃないが恐ろしいランクのようであった。

「こわっ!?ちよつとなにこれ!朝からとんでもないクエストをもつてこないで!!!」

「キヤルちゃん、そんな事言わずに。皆困ってるんですよ。そうだ!受けてくれたら毎日ハグして起こしてあげますから☆」

「いらんわ!!!」

いつもどおりな美食殿であった。

QUEST START

「グアアアアアアツ!!」

「いやあああああ

あつー!」

「その先に俺は居るぞ!!」

その今回の目標の魔物に追いかけてられているキヤルとオルガであった。

『魔物を倒しても橋が壊れては意味がありません。ですから、おびき寄せてから倒しましょうー!』

『具体的には?』

『私の肩当ては防御力が飛躍的上がるので、囮役が魔物を橋から引き離してください。少々のことでは怪我しませんから』

「もう!アホリーヌ!こんな役、倒す役のミカやトロイユウキやコロ助にできるわけないじゃない!!」

ということまでキヤルが志願したというのである。

一応オルガも居るのであるが…。

「俺もいるぞ!」

「あんたは最悪すぐ死ぬじゃない!!」

「これくらいなんてこた……ぐうっ!!」

オルガは盛大に転んで希望の花を咲かせてしまった。そしてそのまま魔物に踏み潰されていった。

こういう理由なのでオルガ単独は無理であるのだろう。

「アタシは頭脳派なのに!ばかああっ!!」

そう嘆きながらも全速で走るキャルであった。

「なんだかんだで囿役を買ってくれるキャルちゃん、大好きです。もちろんオルガ君の犠牲も無駄にはしません!」

後ろではユウキとコツコロと三日月がロープを木々に張っていた。

転ばせるためである。

「来ましたよ」

「うん!」

「ああ」

ペコリーヌも準備完了し三日月はバルバトスを身に纏う。

「はあっはあっはあっはあっはあっはあっ!」

「あの速さですから足を封じて確実に仕留めましょう」

「うん、わかった」

戦う構えを取る2人。

「アホリーヌ！あんたのワガママに付き合うのはこれが最後なんだからあああ！」

キャルはそのロープを華麗に飛んだ後、魔物もそれに続くがロープにより態勢を崩される。

大ききゆえにロープを張っていた木2本は倒れてしまったがその役割は果たせたようだ。

「ありがとうキャルちゃん！確実に仕留めます!!」

「ああー！」

三日月はツインメイスを持ち、その魔物を徹底的に叩く。

まるで太鼓を叩くかのように。

「グアアツグアツ！」

「いいよー！」

そして三日月が退避した後、ペコリーヌは剣を構える。

「プリンセス！ストラアアイク!!!」

王冠のエフェクトのようなものが大きく出来上がり、それと同時に魔物は完全に伸びたようだ。

「ヤッター」

「うん」

「はあっはあっ…こんくれえなんてこたねえ…」

「これでランドソルの人達もお腹いっぱいにご飯を食べられるようになりますね」

その後ペコリーヌは改まって皆に視線を向ける。

「キヤルちゃん、ユウキ君、コツコロちゃん、オルガ君、三日月君」

「「「「?」」」」

「本当にありがとうございます!」

流石に5人全員を抱き込むのは難しかったがそれでも抱きしめる。

「ちよ、だきつくくなー!!」

「はなせー!ー!ー!!!」

キヤルの照れ隠しがその一面に響いたのは言うまでもない。

その後、ランドソルでは皆に迎えられ、感謝されていた。

その中にはヤスコやイカッチ達の姿もある。

当然シノもいる。

「おう、シノ」

「オルガ!」

「お前も来てたつてミカから聞いたが元気そうだな」

「おうよ！ しかしあのペコリーヌ…だったよな？ いい女だよなあ。なんか上品なところもあつてさ」

「上品？」

オルガは首を傾げる。上品とは思つたことはそうないが…確かにどこか上流的な雰囲気はある。

基本ですます口調だったり、格好もキレイめ。

そもそも必殺技の名前が「プリンセスストライク」というのもひつかる。

「上品？ クーデリアみたいなの？」

三日月は尋ねる。

「そうとも言うな。まあでもここにはああいう店もねえし…いつもいつもヤスコさんと一緒…はあつ」

シノは溜息を付いているのであつた。

どうやら色々と溜まつているらしい。

サキユバスの店でもあれば紹介したいくらいには。

「シノらしいな」

オルガはいつも通りのシノにどこか笑みを浮かべていたのであつた。

「皆喜んでたね」

「はい。やっぱりランドソルは皆の笑顔で溢れていないと！ですから」

「ふふっ」

それなりに流暢になったユウキとご機嫌なペコリーヌ。

「キヤル様も感謝されておりましたね」

「アタシはそんなガラじゃないわー」

コツコロのことに堪えている時に腹の音を鳴らすキヤル。

「お腹すいたの？」

「んっ……／＼／＼」

三日月の問いにも言い返せない。

どうやら先程の装備の影響でお腹が余計に空いたらしい。

「お腹すいちゃいましたか？午後の「軽い」デザートでも食べに行きましょう♪」

「軽い……っ」

どう考えても軽いとは言えない気がすると目をパチクリさせるキヤルとコツコロで

あった。

「つきましたよー」

そしてついたのは最初の日の時に来たクレープ屋であった。

「()…」

「ランドソルに来た日に…」

「食べたところじゃねえか」

「おや？3人とも食べたことあります？チャーリーさんに教えてもらったんですけど、このクレープ美味しいのに何故か繁盛してないらしくて、穴場らしいんですよ☆」
くるつと一回転しつつもそう話すペコリーヌ。

確かに人の気はない。

そして奥から人影が現れる。

「あーはいはい。いらつしやいませ〜…ってヴァアアアアアツ!!」

それは紛れもなくリノであった。

戦闘服ではなくクレープ屋らしい格好であるがリノである。

「あ」

「なあに？リノちゃん、お客さんに迷惑だぞ…って」

「あああああああつ!!」

その横から現れた同じような格好をしているシズル。

その2人が同時に悲鳴を上げる。

「どうしたの?二人共。鶏がぐられたような声をだして」

更にその後ろから現れるのはメガネをした少しミステリアスな雰囲気を出す女性。

コッコロたちが最初出会ったクレープ屋のお姉さんである…のだが。

「あら、久しぶり。もう金貨かじってないかい?」

そう言われてユウキは反応する。

「お金、大切」

前からしつかり学習しているのであった。

(成長したな…へへっ)

オルガも感慨深いらしい。

「そ…安心したよ」

だがこのクレープ屋のお姉さんも感慨深い目であった。

「以前頂いたクレープ、とても美味しかったです」

「ありがとう。そちらの3人は…」

キヤル、ペコリーヌ、三日月の事を指している。

「なかま」

ペコリーヌは肯定するようにほほえみ、キヤルはやれやれと思いつつ否定はしない。

三日月も否定しないものの火星ヤシを齧っている。

するとそのお姉さんは両手の指で四角を作り、手カメラのポーズを取る。

その先には6人が収まる。

「…良い絵だ」

そうボソつと呟いた。

その目はどこか優しげな感じである。

「？」

「さて、あたしはちよつと用事があるから後はよろしく」

「了解」

お姉さんはシズル達に留守番を任せて行くようであった。

「さあさあ、弟くんのギルドなんでもん！サービスしちゃうぞー！どんどん食べてね！」

シズルが言うそのことに対し、リノはその後ろで相槌を打っている。

「ホントですか!!!」

だがその相手はペコリーヌである。

此処から先、何があつたかはご想像におまかせしよう。

ただ一つ確かなことは…そのクレープ屋にはフリージアが流れたそうなの。

時は夕暮れ。

そのクレープ屋のお姉さんはある村に居た。

いや、正確に言えば廃村同然であるが…生きている住人が1人もいないのだ。

「…」

抱えようとしたその子供も黒くそして崩れ落ちるように消えてしまった。

そしてその近くではあのシャドウ二体が何かを求めるように動いていた。

「グウウウツ…」

「克蘭クニー…トクムサンサ…」

その二体のシャドウは進化していた。

片方は明確な腕を生やし、もう片方は黒いモヤが薄くなりつつあった。

だが次の瞬間、その2体のシャドウは融合し、一つとなっていた。

そしてゆつくりと足を進めている。

その進路の先にはランドソルが見えていた。

暗闇

その次の日

ユウキは珍しく鍛錬を希望してきた。

ペコリーヌが指南役だ。

俺とミカじゃ教えるには言葉が足りねえからな。

「ふんっ！ふんっ！」

「力みすぎないで剣の重さを感じてください」

「気合入ってるわねー…あ、それって……」

「主様が積み重ねてきた努力はきつと実を結びます…こうして、弛まぬ日々を送っていらっしやるのですから」

コッコロの手にはユウキのためのスタンプカードが握られている。

ギルドハウスの中にはそれが相応に飾られていた。

「そうだな、ユウキが積み上げてきたもんは全部無駄じゃなかつ」

「オルガ、それ駄目」

「なんだよ……」

間違つてねえと思うんだが……。

何故かミカに拒否されてしまった。

しつくりは来るだろこれ。

「ユウキくん、がんばがんば〜! ☆」

「腹が減つては戦はできぬ! 食事はすべての基本ですからしっかり食べましょうね」

ということのでいつものコカトリス亭に来てるんだが……いや、それにしちやユウキの飯の量多くねえか?

「オツケエ……んんっ……もぐ……」

口の中頬張りながら答えるんじゃねえぞ……。

「頼もしいです主さま」

「そういえばキヤルちゃん遅いですね」

「ん、確かに」

「用事を済ませてからいらつしやると」

「料理がなくなつちやいますね……キヤルちゃんが来たらまた同じメニュー注文しましよ
う!」

……ペコリーヌが食べてえだけじゃないのか……?

「あ、吐いた」

「何やってんだユウキ!!」

流石に量が量なので入りに切らなかつたようだ。

勘弁してくれよ……。

「オルガも昔吐いたよね」

「勘弁してくれよミカ……」

「ほんとかよ！ユースティアナ様みたことあんのかよ!!ランドソルと言えば、お姫様が君主だろ?どうだった?」

「ああ、チラツとだけだよお。やっぱ王族の方はなんつーの……気品……みたいな!ゾクツとするような美しさだったぜ!あれで俺達下々の方にも優しければなあ……」

「たく、興味もねえよ!じゃなければ治安悪くなってるこの街をほっとくわけねえだろ」
そんな時、酔っぱらい2人が姫のことを話しているのを耳に挟む。

「……ランドソルに着て随分経ちますが……お姫様を見る機会はございませんね」

「そういえばそうだな……」

「ん、まあよくわかんないけど」

「田舎育ちのわたくしにはおとぎ話に出てくる登場人物のようです」
コッコロらしいな…。

やっぱり根はまだ子供なんだなと思う。

だが対するペコリーヌはあまり良い表情ではない。

それにミカは声をかける。

「どうしたの？なんか顔悪いような」

「え？あ…いえ…ちよつと今夜の晩ごはんを考えてて…最近食べてないものは何か
なーって」

とは言うものの隠せていない。

まあ権力者をよく思わねえ気持ちはよくわかるけどな。

俺とミカはその権力者に殺されたようなもんだしな。

「ふーん…そっか」

ミカはそう言いつつ飯を食べるのに戻る。

だが目線は相変わらずペコリーヌの方だ。

注意深いな…ミカ。

そう飯を続けていた時。

「その調子ですよ！ユウキくん！」

大きな衝撃の音があたりに響き渡る。

地震やその類ではない。確実に何か重いものが急に来たような振動だ。

「今の音は……!」

「行ってみましょう!」

「ペコリーヌさま!」

「おいまて!!」

ペコリーヌは俺達の声を聞かずに剣を持ち表へ飛び出した。

そしてその表では住民たちが悲鳴を上げ一目散に逃げ出していた。

「大丈夫ですか?」

ペコリーヌは転けそうになった少女を助けた。

「ペコ姉さん!!」

「大変だ!ランドソルの街なかに魔物が現れやがった!」

「キヤル姉さんも一緒だったんだけど見失っちゃまって!!」

「王宮騎士団はなにやってんだ!!」

王都であるランドソルは本来は頑丈な城壁もあり、本来なら魔物は寄せ付けなはず

のである。

なのにそれが突破され、しかも街なかで暴れられているというのは異常事態にも程があった。

「すみません。この子を頼みます…私はこの街を…皆を守ります」

「…」

「合点承知!!」

イカツチとチャリーの2人は子供を抱え、逃げていく。

その後、ペコリーヌは現場へ到着し、ヤスコの近所の店のトメさんを救出した。

「ヤスコさん、逃げてください!…ここは私が!!」

「何いってんだい!あんな化け物を…」

「大丈夫。任せてください!」

そしてシャドウは強烈なパンチを食らわし、ペコリーヌはガードする。

「さあ、早く逃げてください!」

「無茶するんじゃないよ!!」

「…!!」

そしてシャドウとペコリーヌの戦いが繰り広げられる。

ペコリーヌの実力は言うまでもないがシャドウは今までのとは違い一回り大きく、さ

さすがのペコリーヌでも苦戦を強いられている。

「ペコリーヌ！」

隠れていたキヤルも流石に表に出ざるを得なかった。

「キヤルちゃん！無事だったんですね!!」

そしてペコリーヌは剣を構え直す。

「皆を守るために、力を貸してください！」

ペコリーヌのその言葉は真剣であった。

だが当のキヤルは気が進まない。

当然だ。アレが「陛下」によるものだとかわかってるからだ。

自分は陛下のために尽くす。なら「これを」見て見ぬ振りをするほうが正しいのだ。
前の村の時は知らされていないで誤魔化せたが今回はそうもいかない。

「…」

「キヤルちゃん？」

「……!!!」

そしてそのシャドウはキヤルへと襲いかかる。

どうやら敵味方の識別がされているというわけでもないようだ。

「全力全開！プリンセスストライク!!」

いつもより詠唱を短くして必殺技を放つ。

普通の敵ならこれで一撃であろう。

普通の敵ならば…。

だがその時、そのシャドウはその攻撃により身体が2つに割れた。

もう片方は先程のシャドウと変わらないようであったが、もう一つはそのシャドウとは似ても似つかないものであった。

「…！」

それとともに大爆発を起こし、その一面は崩落してしまった。

「キヤルさまー！」

そして現場へ到着したコッコロ達だが、その目の前にはもう一体のシャドウがいた。

「これは…！」

「くっ…！」

オルガと三日月はそのシャドウの「正体」を察した。

そして三日月はバルバトスを身に纏い、そのシャドウへと突撃を敢行した。

「また…また…お前か…！クランク二尉を手に掛けた罪深き子供!!！」

「なんでお前もここにいるの？」

「貴様!!」

そのシャドウは前世において三日月と戦ったモバイルスーツ「グレイズ・アイン」だった。

何故ここに居るかはわからないが、間違いなく敵であった。

「ちよつと…じつとしてろ…!」

別方向ではペコリーヌとシャドウがキヤルを守るために交戦している。

グレイズアインまで加わったらどうなるかは想像に難くない。

「なんとということだ…君の罪は止まらない…加速する!」

「だから…なに?」

シャドウになっているためか前よりは格段に強化されているようで、ルプスレクスの超大型メイスを受け止められてしまっている。

(前よりも強いな…)

だが止まるわけには行かない。

それでも攻撃を続ける三日月。

「…!」

その一方、ペコリーヌはついに倒れてしまった。

こちらのシャドウも先程のよりは格段に強化されている。

「ちっ……！」

「回復魔法を！」

「はああああああっ！」

コッコロは回復の詠唱を開始し、ユウキはプリンセスナイトの力を開放しようとする。

だが…。

「ぐうっ……！」

ユウキの身体にも異変が発生したのか力を開放できずにその場に倒れてしまった。

「主さま……！」

「ユウキ……！」

オルガはユウキの前へ出て文字通りの盾となろうとする。

焼け石に水にもならないが肉壁には文字通りになる。

だが確実にジリ貧であった。

だがその時、その前に壁が生えてきた。

「これは……!?!」

その壁もシャドウは壊してきたが、オルガとユウキを包み込むように水の竜巻が舞い、シャドウの攻撃を受け止める。それが終わった時には二人は姿を消していた。

「あるじさまー!!」

コツコロ、キヤル、ペコリーヌ、三日月も同様に土が途端に溶け、下へと落ちていった。

同時にそのシャドウ二体を包み込むようにドームのようなものが形作られ、包まれていった。

「…」

「……は……?」

ユウキとオルガが目覚めた場所は荒れ果てたような風景の場所であった。

「ペコリーヌ……キヤル……コツコロ……ミカヅキ……?」

「あいつらはどこいつちまったんだ……!?!」

「安心して、皆は安全な場所に隔離したから」

そこに声をかける一人の女性。

それは紛れもなくクレープ屋のお姉さんその人であった。

「やあ」

「クレープ屋の……」

「ははっ…そ、クレープ屋の店主。でもそれは…世を忍ぶ仮の姿」

「どういふことだ…?」

オルガとユウキは驚きを隠せなかった。

一方、三日月とコツコロは城の中のような場所を歩いていた。

「ここは…お城の中…でしようか…?」

「そうっほいけど…なんか違うような…」

そしてその先にあるドアを開くとそこには大きな肖像画があった。

「…ペコリーヌ…さま…?」

「……………」

その肖像画にはペコリーヌらしき女性とその親らしき2人が描かれていた。

Menu 13 忘れ去られた姫 ロストプリンセス

肖像画を見ているコッコロと三日月。
間違いなくペコリーヌがいる。

「……………」

そしてドアが開く音が再び。

そこにはペコリーヌ本人がいた。

「ペコリーヌさまー！ご無事でー！」

「…よかった」

コッコロと三日月は安堵の表情を浮かべる。

「ですが…ここは一体…」

「ここは……ランドソル城です」

ペコリーヌは知っているような素振り…

いや間違いなく知っているものであった。

「…そっか」

三日月も察してあえて何も言わなかった。

そして3人は再び肖像画を見る。

やはりペコリーヌが描かれている。

「ランドソル城……」

「多分……ですけど……ただ、誰も居ないのでなんとも言えません……」

「この肖像画は……」

「……ごめんなさい。コツコロちゃんや三日月君……みんなに隠してて……」

「……！」

「……」

そしてペコリーヌは淋しげな表情をしつつも話し始めた。

「私の名は……『ユースティアナ・フォン・アストライア』……ランドソルの……プリンセスです」

「ですが……」

「はい。陛下と呼ばれているあの人も『ユースティアナ』と呼ばれていますね」

「……」

酔っぱらいが話していた「ユースティアナ」とペコリーヌが今名乗った「ユースティアナ」

その重なりについて疑問を浮かべるコッコロだがすぐにペコリーヌが話し始める。

三日月もただヤシを食べて聞いているだけだ。

「私は……みんなから忘れ去られた人間なんです」

そこからペコリーヌは今にも泣きそうなその表情を抑えて話し始める。

その内容は要約すると

彼女は両親の言いつけにより見聞を広めるべく旅をすることになったのだが、その旅を終えてランドソルへ帰還したときには彼女のことを覚えている者が誰一人居なかった。

頼みの綱で両親の場所へ必死に戻るも、両親も同様で、更にそこには同じくユースティアナを名乗る別の「何か」が居た。

そこから追い出される形で終わりのない旅に出たというわけだが…。

「そんな時、コッコロちゃんやユウキ君、オルガ君、三日月君、キヤルちゃんに出会ったんです。

嬉しかった。幸せだった…みんなに出会えて…一緒に暖かいご飯を食べられて……」

「……」

「でも…不安だったんです。また皆が私を忘れてしまいうんじやないかって…幸せになれなくなるほど……皆がいつか離れていってしまうんじゃないか…って」

徐々にペコリーヌは泣くのをこらえるためか言葉が遅くなる。

「ほんとの私を…、ユースティアナであることを伝えたら…っ…また…」

そしてついには下に崩れ落ちてしまった。

（だから…だからペコリーヌ様は、大切な人達を抱きしめていたのですね…繋がりが…離れていけないように…）

コッコロの脳裏に浮かぶのは美食殿の思い出。

どこかの場面でペコリーヌは必ず抱きついてた。

それは単なるスキンシップではない。離れたくない故のモノであった。

「…ほんとのことを伝えず…私のワガママばかりで…こんな私だから…身勝手な私だから…キヤルチャンも離れていっちゃいました…」

そしてコッコロはそんなペコリーヌを優しく抱きしめた。

まるで、聖母のように…。

「わたくしは離れませんよ…あなたが…ユースティアナさまであっても…ペコリーヌさまであっても…共に過ごした美食殿の日々は…わたくしにとっても宝のような…大切な絆なのです。それはきつと、主さまも…オルガさまも、三日月さまも…キヤルさまも同じ気持ちのはずです」

コッコロがそう言うと三日月も頷いている。

同意していると見て間違いはない。

「……っ……うっ……」

ペコリーヌはコツコロの胸の中でついには泣いた。

ただただ泣いていた。

今までの我慢していたのが溢れ出すかのように……。

「もうすこしだけ……もうすこしだけ……こうしていいですか……？」

コツコロはそれに答えるようにペコリーヌの頭を撫でる。

子をあやす親のように……。

「……」

三日月はそれを見て安堵の表情を浮かべる。

だが何かに見られていると思いふと扉の方を見るとそこには誰もいない。

だが三日月はその正体を察した。

そして場所は変わり荒れ果てた場所。

そこでは彼女とユウキ、オルガが対面していた。

「今頃……彼女たちも一つの真実にたどり着いた頃かな」

「あんた……一体……」

ユウキとオルガは疑問視せざるを得なかった。

「信じてほしい。アタシは君達の敵じゃない…味方というには…アタシは君を…ユウキ君を巻き込みすぎてしまっているね…本当に」

「……」

(何を言ってるやがる…?)

「この空間はアタシが構築したものなんだ。ユウキ君…もしかしたらオルガ君にも見覚えがあるかな」

「……」

「見覚え…」

あまりにも荒れ果てたまるで廃墟のような場所。

だがそれはアメスがいるあの場所と雰囲気が不思議なほど似ていた。変わっているようにも見えるにも関わらず。

「アメス…」

「…そう、今はアメスって名乗ってるんだね。君をサポートしようとしているんだろう？ 優しい子だ。ユウキ君の記憶を少しずつ丁寧に戻そうとしている痕跡がある」

彼女はユウキの目を見てこう話す。

ちなみにユウキの目はまじりつけもないキレイなものである。

「…いいかい。この力は君の仲間を救うものではあるが、同時に君自身を壊してしまうかもしれない力なんだ」

「そいつはどういうことだ？」

「今のユウキ君は記憶を失ってしまっているようだ。それがリダイブの影響なのかどうかはまだわからない…」

（リダイブ…ユウキがあのアメスで目覚めた時のアレか？）

「そんな状態で力を開放したら、君の…ユウキという存在自体にどんな影響を及ぼすかわからない」

「ちよつと待ってくれ。そもそも名前も名乗ってねえのになんで…」

「君達のこととはそれをよく知っている知り合いから聞いているよ。マクギ…いや、モンタークというべきか」

（あいつか…）

オルガはなんとなく察しが付いた。

「それで、先程の戦いでうまくいかなかったのもそのためだろう。シャドウは人の魂を求め襲ってくる…すでに壊滅した村も出ている…そして恐らく…より強力な魂を求め…君達の前へ現れた」

そして彼女はユウキの胸元で展開した魔法陣のようなものを閉じる。

「あれは偶発的に現れたものじゃない。ある意思によって存在している。この世界に囚われている限り……その意思から逃れることはできない。この世界が生まれたきっかけは……君とその意思が戦ったことによるから……」

「……」

（意思……だと？ ユウキが……？）

「まさか……」

ユウキが脳裏に浮かんだのはあの夢。

敵と戦い……ポロポロになり、そしてある少女をかばった夢。

それは紛れもなく夢ではなく現実であるものだった。

一方、キャルは孤軍奮闘していた。

「ライジンググーテンペスト!!」

その魔法を放ちシャドウ2体を抑える。

片方の方は何かを探しているようであまり動いていないが故であるが。

（また私……陛下の邪魔をしてる……でも……！）

「グウアアアアッ」

（仕方ないじゃない！ 選べないじゃない!!）

脳裏に浮かぶのは陛下の顔…そしてコッコロとペコリーヌが抱き合うところ、オルガが死んでるところ、三日月が木を切つてるところ…様々な場面であった。

(今のアタシは…：…いつからアタシはこんなになつちやつたのかな…：アタシの全ては陛下のものだったはずなのに…：バカだなあ…アタシ…)

そして魔法を維持できず押し返され、ついには魔法を放つのをやめてしまった。

「フオオオツ!!」

(ホント…：バカ…)

「罪深き子供…!!」

「ごおおっ!!」

そしてキャルは目閉じ、その身をそのまま任せた。

瞬間、衝撃波が生じその二体のシャドウを遠ざけた。

その目の前にはバルバトスルプスレクス…三日月・オーガスと剣を再び構えたペコリーヌの姿があった。

「大丈夫?」

「ミカ…：ペコリーヌ…」

「ごめんなさい。私やつぱり、キャルちゃんの言う通り身勝手ですがままなんです。だから…私と一緒にあの魔物達を倒すのを手伝ってください!」

「……バカ」

そう言いつつも目は再び生氣を取り戻していた。
その後ろにはもちろんコツコロもいる。

場面は戻り、オルガとユウキの所。

ユウキは少し押し黙ってしまった。

オルガもそれを見ているだけしかできない。

「ごめん……一度にたくさん話しすぎた。でも大丈夫。君達のはアタシ『ラビリンズ』
が守るから……」

「……守るよ」

「え？」

「ユウキ……お前……」

「仲間は僕が守る」

その目は覚悟ができていたそのものであった。

「……君の状態を直接確かめたくてこんな遠回りをしてしまったけど……その甲斐はあった
ようだね」

彼女のその声はまるでユウキを見守る母のような優しさを持っていた。

『マスター！流石にこれ以上は！』

『お兄ちゃんの仲間、ピンチですよ!!』

強大なシャドウ2体と戦うというのはいくらペコリーヌと三日月の連携があろうとも骨が折れるどころの騒ぎではない。

やはり「彼」の力が不可欠と明言できる。

『どうする？敵にバレちゃうけどやっぱり私達も加勢しようか?』

「…いや、準備はできているみたいだ」

「…」コクリ

「では行こう!!」

それと同時にこの空間は姿を変えていく。

「アタシの力はこのオブジェクト変更だ」

「空間ごと変えてるだど？魔法…いや神みてえだ!」

「…神か…まあ、確かにこの中だとそうかもしれない…だがアタシは実際は一人の少年…そして君達に命運を託すしかないただの人間さ」

意味深なことを言うと同時に下に穴が空き落ちていく。

「君が…君達が前に進むために…今は少しだけ力を貸そう。君が紡いでいく絆が必ずこの世界から皆を救うと信じているよ。それと、オルガ君」

「なんだ？」

「事故のように巻き込んですまない。本来は君はこことは何も関係ない別世界の人間であるのだが……」

「気にすんじやねえ。こういうのはもう慣れちまったからな……世界がどうというのは俺はどうでもいい。だがな、辿り着く場所をやつと見つけられたかもしれねえ！そのため俺は何度死のうとも構わねえよ」

「そうか……聞いた通りの人間で安心したよ」

そしてユウキとオルガはそのまま降下し、ユウキはシャドウに切りかかり、オルガはそのまま落ちて希望の花であつた。

「ユウキ君！オルガ君！」

「ユウキ……オルガ……」

「主さま！オルガさま！」

「ユウキとオルガ……遅い」

「へっ、だがミカ……間に合つただろ？」

「……ん」

そしてオルガとユウキは態勢を立て直す。

ユウキはすでにあの能力を使える準備ができています。

「いこう！みんな！」

「さあ、反撃開始と行こうじゃねえか!!」

同時にユウキは力を展開し、皆に力を与える。

「力が……！」

「魔力が……！」

「主さまの思いが……」

「……体が軽くなった」

「俺の獅電だぞお……」

他の5人の力が強化され、オルガは獅電を身にまとった。

そして6人は一斉に並んだ。

美食殿、決戦の時である。

「グアアアツ!!!」

「また……また……！」

「光の御加護を!!」

コッコロは補助魔法を更にかける。

そして一番槍はペコリーヌと三日月。

「プリンセス！ストラアアアイク!!!」

「はああああっ!!」

ペコリーヌは仮面のシャドウの仮面を切り裂く。

三日月は鉄血太刀でアインの左腕を切断した。

「グオオツ!!」

「こいつ急に動きが…！モビルスーツの装甲を…フレームごと…！」

ユウキのバフにより今の三日月はバルバトスのリミッター解除と同等のことを行っている。

三日月に過大な負担をかけるリミッター解除とは異なり、その負担がないため三日月も気にせず全力を出せる寸法だ。

続いてオルガがアインを誘い込み、仮面のシャドウと接近させる。

「おらあああああっ!!こっちだ!!」

「貴様!」

「今だ!キヤル!」

「ええ!…覚悟は、いいかしら!グリムバースト!!」

多数の魔法陣を展開し、その2体のシャドウを包み込むように結界を作り、その中で魔力を爆発させ確実にダメージを与える。

それによりアインと仮面のシャドウは再び融合し始めていた。恐らく修復するため

であろう。

同時にオルガは巻き込まれ希望の花を咲かせるがそれも想定内。

最後の一撃はユウキに託された。

「主さまに……鋼の体を！ 隼のごとき素早さを!! いぎ、参りましょう!!」

「やつちまえ!! ユウキイイイ!!」

ユウキは走り出す。いつもへっぽこの走りとは違う……まさに男として覚悟を決めたものだ。

「我らの勝利のために!!」

「はあああああああああつ!!!」

そして高く飛び上がり、剣を大きく振りかざし、斬りつけた。

「グアアアアアアアアアアアアアツ!!」

「この……化け物がああああああああああつ!!」

「……お前にだけは言われたくないよ」

それと同時に仮面は破壊され、それとともにその存在は文字通り「消滅」した。

そして再び『彼女』は手カメラのポーズを取ると、その先にはユウキがいて、コッコロ、ペコリーヌ、キヤル、オルガ、三日月が駆け寄る。

まさに仲間たちであるという証拠であった。

「…いい太刀筋だ。アタシの『プリンセスナイト』」

そう呟くと再びオブジェクトを変え、美食殿を包み込んだ。

ランドソル・コカトリス亭ではイカツチ、チャーリーが泣きわめき、ヤスコに慰め…という何かを受けている。

そしてその場にはシノもいた。

シノはあのシャドウの騒動ではその前に街道が開通したために増えた荷物運びの臨時バイトをしていたためランドソルにはいなかったのだ。

（オルガと三日月が…いやそんな簡単に死ぬわけがねえ…くつ、俺もあの場にいれれば…）

シノがそう思う中、店のマスターも葉巻を吸いつつもどこか寂しげな表情だ。

だがそんな時…。

ガシャン！と大きな物音がした。

マスターが目をやるとそこにはいなくなったはずの美食殿の面々が落ちてきたかのように居たのだ。

なおコツコロの下敷きにユウキが、三日月の下敷きにオルガがおり、オルガは当然希望の花を咲かせていた。

「え…?」

「ペコ姉さん!」

「無事だったんですねえええ!!」

「オルガ!三日月!!」

それと同時に心配してきた面々はあたりに駆け寄る。

あの戦いのあとだ。当然である。

ヤスコも泣き、マスターも安堵の表情を浮かべている。

一方の面々は突然だったのでキョトンとしていたがすぐに理解して、更にペコリーヌはキヤルにこう話す。

「キヤルちゃん…」

「ん…」

「私のわがまま聞いてくれて…ありがとうございます」

「…ふんっ、もうこれつきりよ…」

「…はい!」

そしてペコリーヌはキヤルを大きく抱きしめた。

「大好きです!キヤルちゃん!!」

「……」

キヤルはそのまま軽く抱き返した。

三日月はそれを見て安堵していたのは言うまでもない。

「…なるほどな。ペコリーヌはお姫様ってことか」

「うん、ああいうお姫様は見たことなかったからわからなかった」

「ミカでもそういう時はあるんだな…まあつつても最初に異世界で会ったユミナを初め…俺達が出会ってきたお姫様はイメージどおりじゃねえのが殆どだから…そしてそのペコリーヌを全て忘れさせるほどの魔法を持つのが今の「ユースティアナ」ってわけか」

「オルガ、次は…」

「まだしばらく様子見と行こうじゃねえか。どうやらこの世界は俺達が今まで居た異世界とは様子が違う見てえだ…あいつ…ギルド「ラビリンス」のマスターが言っていたことも気になってるしよ」

「言っていたこと？」

「リダイブってやつだ。それでユウキは記憶喪失になっちまったみてえだが…そのこともよくわかんねえしよ。マクギリスを捕まえようにも連絡は取れねえし…まあ会ってもあいつの言うことは信用できねえが」

「…じゃあ待つしかないってこと？」

「ああ、暫くは普通にギルド活動してるしかねえ。シノと明宏にもそう伝えておいた。今は動くんじゃねえぞってな」

昔のオルガならそこまで考えなかったが、今はそういうわけにもいかない。

再び破滅は誰もが御免被ることであろう。

「ちよつとー、ミカー手伝ってー！」

そんな時にキヤルは三日月を呼ぶ。

「どうやら洗濯物を干すのを手伝ってほしいらしい。」

「うん、わかったー」

スツタカと三日月は行くのであったがその前に三日月は思い出したようでふと話し出す。

「あ、ペコリーヌの正体のこと。ユウキやキヤルにはまだ黙ってて。オルガも知らないフリで」

「なんでだ？」

「ペコリーヌのことだからどこかで自分で話すときが来ると思う。だから」

「ああ、わかってる。でもそれを考えててなんで俺に教えたんだ？」

「報連相は大事だから。前みたいにはなりたくないのもあるけど」

「…ははっ。そうだな」

そうして三日月は再びスタスタとキャルのほうへ向かっていくのであった。

「…さてと…俺も用事を済ませに行くか…」

「あ、あわわわ…！」

その用事とはフォレストイエのアオイに久しぶりに会うことであった。

暫くBB団の活動もできてないというのもあったのだが…。

「だ、だ、大丈夫ですか!? 風のうわさで聞いたのですが、ランドソルにデストロイヤーとか言う大きな魔物が現れて…それで美食殿の皆さんが食われたとかで…も、もしかして…幽霊…！」

(どういう噂だ…つかなんか混ざってねえか…?)

「こんくれえなんてこたねえよ。ちゃんと足もあるだろ? つか俺は死のうにも死なねえしよ…」

「そ、そうですが…」

「それより久しぶりにBB団と行こうじゃねえか? なあ?」

「そ、そうですね!! じゃあ…」

アオイがあわあわしつやつやっていた仕事を片付けている。

その光景を見てオルガはデジャヴのようなものを感じた。

（なんかアオイを見ると引つかかる……つってもポチとはなんか違うしよ……ま、考えるだけ無駄か）

そう思い考えていたことをとりあえず棚上げするオルガであった。

Next Stage

IRON—BLOODED PRINCESS CONNECT! Re::DivE

Season 2

Menu 13.5 こぼれ話

過去と今、そして未来

「ラベリスタ、彼らには会ってきたのだろうか？」

「ああ、まあ…君が言う通りのいい子達だったよ。マクギリス」

また謎の空間でラベリスタとマクギリスが対面していた。

「彼らは様々な世界を渡り歩いている。ある世界では神を殺し、ある世界では機動要塞を現地人や転生者と協力し撃破、更にまたある世界では転生者と共に悪趣味なループを経験し、その転生者を導いた」

マクギリスがどこか心が踊っているような表情でオルガ達が進んでいた世界を話し始めている。

一部マクギリスが原因だった事件もあつた気がするがそれに関してはボカしているが。

「いやあ…改めて聞くとすごいねえ。アタシも色々と経験したつもりだったけど文字通り場数が違うと言っている」

「私もそれに付き合うことになるとは最初は思わなかったが……まあオルガ団長達を見ていると私も忘れていた希望を思い出させてくれる……」

「だからバエルを操つてゐるのかい？アタシが言えることじゃないんだが、君も随分子供っぽいところがあるようだ」

「ああ……私は大人になりきれなかった者だからな」

それを語るマクギリスの表情は少し暗い。彼は幼いときにトラウマとなつていいほどの体験をしている。

そこから精神の成長が遅くなつてしまつたというのも想像に難くないであろう。

「まあなら。この世界でも君たちは大丈夫だろう。なにしろそこまでバラエティはないはずだ。もっともアタシも全部が全部把握しているわけでもないから断言はできないけど」

ラビリスタは嬉しそうにそう話す。

「オルガ団長は死なないものだからな。文字通り這いつくばつてでも先に進むだろう。仲間もいるならそれは更に強固になる。もちろん私もサポートは出来る限りはしていくつもりだが……」

「ところで君は何故彼らを補助していくのかい？様々な世界で自分勝手に生きることが出来るはずだ。君は鉄華団とやらの一員ではないようだし」

そうするとマクギリスは再び仮面をつける。

「…償いだよ。私は生前…と言つて良いのか、彼らを利用した上で私はバエルのことに取りすぎて他を蔑ろにし鉄華団を壊滅させる原因を作ってしまった。それ故に…だ」

「……………なるほど。だからつてここまでついていく必要は…まあ、いわゆる腐れ縁というものか？」

「そういうところだ。では私は失礼する。商会の仕事が溜まっているのでな」

「ああ、またなにかあれば連絡するよ」

そうして空間より出ていくマクギリスであった。

「…もしアタシがいなくなつても、彼らなら大丈夫だろう」

ラビリスタは美食殿の6人の写真を見つつもそう呟いた。

ランドソル

モンターク商会 会長室

「石動、独自調査の結果は？」

「やはりユースティアナと呼ばれる女王についての正体は追いきれませんでした。相手も七冠と呼ばれる以上何かしらの対策はしていると思われる」

マクギリスは石動から報告を受けていた。

石動から貰った資料を見てマクギリスは息をつく

「これだけ探っても情報は得られないか……表に出ることもなく城に閉じこもる。ラスタル・エリオンでも表に出てきたことは度々あったのだが……シャドウについては？」

「数週間前の王都における大型シャドウ騒動以降も度々発生し、郊外の住人を襲う例は引き続き確認されています。現在商会内の傭兵部隊にも討伐させていますがキリがないものと考えるのがよろしいかと」

「シャドウに関してはあのユースティアナが噛んでいるとは踏んでいるが……一向にしつぽがつかめないか……」

「グレイズアインに似たシャドウを始め、あとどれだけの手駒を隠し持っているのでしょうか」

大型シャドウ達が美食殿に討伐されたとは言え、依然不安定な状況には変わりがない。
い。

むしろ出現頻度としては増加傾向もあると言っている。

「……この状況では暫くの間天使たちには会えそうにないな」

「元から会わなくてもいいと思われまます」

「……手厳しいな、石動。まあともかく、引き続き情報収集を頼む」

「はっ！では失礼します」

石動が会長室から退席し、マクギリスは紅茶を飲んで一息をつく。

シャドウの件で一段落というわけではなく、引き続き忙しくなりそうである。

(……)からどう動く？鉄華……いや、美食殿？)

そしてマクギリスは心のなかで美食殿に期待しながらも再び仕事に戻るのであった。

こぼれ話 ミカの過去

「ふあああつ…暇ねえ…」

「……」

他の皆が何かしらの用事で席を外す中、三日月とキヤルでギルドハウスでお留守番している。

三日月は本を読み、キヤルは本を目隠し代わりにしている。

「はあつ…飽きないの？それ」

「別に…」

キヤルはあいも変わらず農業の本を呼んでいる三日月にやれやれと言った様子だ。

もつとも単純に飽きないのかという疑問だけなので特に憎まれ口はないが。

（戦つてる時もこういふ時もずっと静かよね…ペコリーヌみたいに声はそんな出さないし）

ペコリーヌは全て受け止め、更に超強力な攻撃を相手に与える。

三日月は攻撃を全て回避し、敵の隙を突き、確実にダメージを与える。

対局の二人である。

(ペコリーヌはともかく…:なんでミカはあんなに強いんかしら…)

ふと疑問に思ったので、少し聞いてみることにした。

「ミカ、なんでそんな強いのか？」

「強い？ そうかな」

「だって村の時だつてゴレムみたいなシャドウをあんなに相手にしてたし、オルガもだけどなんか慣れてる感じがあるってやつ？」

「あーうん」

すると三日月は本に葉を閉じて置く。

「色々とおつたから」

「色々？」

「うん。まあここに流れてくるまでも色々とおつたけど、一番最初に居たあの頃…:鉄華団の時に一番色々とおつたかな」

「ああ、オルガがたまに鉄華団団長とか言ってるアレって本当にそういうのがあつたの？」

オルガが死にかけてるときだったり自己紹介のときに口走つたりというアレである。

「俺とオルガは孤児で、地を這いつくばりながら生きてるような感じだった。やつと場所を手に入れても大人達からは使い捨てのよう扱われる。でもそこで仲間と出会っ

てその大人達に反逆したから」

「反逆つて…そこで失敗したらどうなるのか考えなかったの!？」

「まあどつちにしろ、生きるか死ぬか…どつちかだったから」

三日月が平然と言う中、キヤルは啞然としている。

まあただの一般人がこのようなことを聞けばなんとも言えなくなるのであろう。

だがキヤルはなんとか話を続けた。

「…で、どうだったの?その反逆つてのは」

「…まあ、結果的に言うなら、駄目だった。最後は負けて…皆散り散りになった」

流石に転生した云々は言いくいので三日月は言い換えた。

「やっぱりね…ろくなことにならなかつたでしょ。大人に歯向かうなんて」

「…でも、後悔はしてないよ。俺は…仲間と出会えてよかったし」

「…後悔しないの?」

「うん。でもあの時にオルガに任せつきりだったのは後悔…かな?」

前世においてオルガに任せつきりな面が多かつた。

特にビスケットが死んだ後、そして鉄華団が地球へ進出した辺りからはそれは顕著と

なっていた。

結果、マクギリスとの同盟をそのまま進み、鉄華団の破滅が始まってしまったも同然

であろう。

「オルガに？」

「うん。オルガがああなったのは俺の責任でもあるから」

「ああなったって…死んでも生き返るアレのこと？」

「うん」

あつけらかんに言う三日月に対してキヤルははあつとため息をつく。

「だからアイツについていつてるわけ？」

「うん。でも、駄目なことは駄目って言わないといけない。たとえ親しい人でも間違ってることがあれば指摘しないといけない…とあれから俺は学んだかな」

「……ふーん」

（親しい人にも指摘ねえ……って陛下がやってることは全部正しいの！なに突っ込もうとしてるのよあたし!!）

「…どうしたの？急に変な顔して」

「な、なんでもないわよ！」

三日月の指摘をキヤルは必死に否定するのであった。

Season 2 Menu 2 苦惱

キヤルside

あたしは我慢してきた。

親はあたしに虐待まがいなことをしてきて実質ずっと捕縛されてきた。

新興宗教か知らないけど、あたしは物心がついたときからずっと否定されてきた。

このことを他の人に話せば逃げればいいじゃない。って言うと思うけど、あたしにはそれが無理だった。

反骨心ってやつ？それが強い人にはなれなかった。

だけどあたしだつてこの状態を良いと思つてるわけじゃない。

だからあたしは親戚だつて言う陛下を探して…陛下のもとに来た。

確かに陛下は厳しいところだつてあるし、非情な面もある。だけど前よりは全然マシよ。

誰が何と言つてもあたしはこれで満足してるの。陛下のためならなんだつてする。

そして陛下に認められて…もつと褒めてもらつて…そして…!

「何さつきからブツブツ言ってるの?」

「うぎやあああああつ!」

そんなあたしの回想を吹き飛ばしたのは同じギルドメンバーのミカだった。

確か本名は三日月・オーガス。

そして監視対象の一人でもある。

「急に話しかけないでって前も言ったでしょ!ぶつころすわよ!」

「あ、ごめん。でも何話してたの?」

「別に。あたしだってたまにはこうしたくもなるのよ」

「ふーん」

焦った…。てつきりあたしが陛下のスパイであんたたちを監視していることがバレた

かと…。

え?そもそも誰がいるときに喋るなって?うるさいわね。

「はあつ…:じゃああたしはちよつと出かけてくるから。後は頼んだわ」

「うん」

陛下のところに行ってこの前のことまで報告してこよ。

ミカといると毎回ペースが狂うのよね…。

「報告は以上です。引き続き、ユウキ達の監視を続けます」

あたしはいつも通りに報告を終える。

まあ変哲自体は特になんでもない。

「キヤル？」

「はい」

「まだ…何か報告し忘れていることがあるんじゃないかしら？」

「はっ…う…っ！」

なんで？

もしかして…陛下はあの件を…！

「このペルソナ。見覚え…あるわよねえ？」

陛下が映し出したそれは数ヶ月前に起きた大型シャドウの戦いだった。

つまりあの件を把握していたということだった。

…いや、そもそもランドソルは陛下の庭も同然。知られていないほうが不自然だ。

あたしは血の気が引いた。

見られていた？

陛下はあの仮面を通して、あたしたちの戦いを……。

だとしたら。あたしが陛下の邪魔をしたことも…？

「まだ…まだ足りない…この飢えた私の魂ではまだ…」

ごめんなさい…ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！

陛下の言っていることなんてわからないほどあたしはこの思考に支配された。

陛下の邪魔をした。いけないことなのになんできてしまったのか

その後悔だけがあたしの心を埋め尽くした。

けど…。

「でも…許すわ」

「…え？」

陛下はあたしを許してくれた。

「あなたと私は、このウソで塗り固められた世界で唯一の血縁なのだから…私のかわい…：キャル…」

あれだけのことをしたのに陛下はあたしを許してくれた。

もう失敗はできない。

だからあたしは…次こそは陛下のために…！

でも、どこか引つかかる。

なぜあたしは陛下に対して恐怖心が出てしまっているのか、陛下からはプリンセスナイトの力を貰い、ペコリーヌたちを暗殺できなかったけどそれでも許してくれた。今回の件もそうだ。あたしはあの親からみたいに虐待のようなのは受けてない。

厳しい言葉はあるけどこんなあたしを拾ってくれて側近にしている優しい陛下なのに……って考えてる場合じゃなかったわ。よし、気持ちを入れ替えていかないか……！

そして別の日。あたしはギルドハウスの屋根の上に居た。

「あたしはスパイ……あのお方のプリンセスナイト……」

あたしの役割を再確認するためだ。

けどどうにも気持ちが悪まらない。

別のところを歩くしか無いわね……。

『キヤルが何考えてるのかよくわかんないけど、それは多分、キヤルが自分で決めないといけないことだと思う。俺はキヤルがきちんと自分で決めたことなら何も言わないから』

その散歩の最中でもミカの言葉を思い出す。

何よ……今のスパイの行動も自分で選んでるのに……。

なんでよ…。

このあたしに迷いがあるって言うの？そんなはずはないわ。

だってあたしは陛下の…！

「深夜のお散歩ご苦労」

「クリステイナーナ…」

そして城内で会ったのはNIGHTMARE副団長のクリステイナーナだった。

「今日もけなげにご報告か？かわいいことだな」

「城の警備は？あなた仮にもNIGHTMAREの副団長でしょ？」

「そう邪険にするな。過日、街中で暴れたシャドウの件。お前たちが絡んでいたのだろ

う？」

「…！」

クリステイナーナ、相変わらずそういう勘は鋭いのよね。

戦闘狂に見えて考えるとところは考えている。

そういえばオルガとユウキ、コロ助がああの村のときの騒動で剣を交えたとも聞いたよ
うな。

まあコイツがオルガ達に牙を向けたかはなんとなくわかる気がするけど。

「フフフツ…凶星か」

そしてクリステイナはこうも続けた。

「今度ぜひ紹介してもらいたいものだ。死傷者を出さず街を守った女剣士と謎のゴレムのような変身をする男を……」

確かあの村での騒動だとペコリーヌとミカとは剣を交えてはなかったわね。

交えた場合はどうなるかはあたしでも想像はつかない。

「それはさておき……今日は陛下からの指令を伝えに来た。何の気まぐれか、お前と私の命が下った。わざわざ私たちにお呼びがかかったということは、そういうことさ」

「くっ……!」

「裏の仕事だ」

その後、あたしはどうにも気分が乗らなかった。

陛下から任命されたことなのに。

前はこんなこと、なかったのに。

「……ん？あれって」

そんなとき、ギルド「カルミナ」の一人のツムギが練習しているとところに遭遇する。

かなり暗い時間だけど、必死にやっていた。

「ん？キャルさん？」

「明日ライブでしょ？こんな時間まで根詰めちゃって大丈夫？」

なんとなく放つては置けなかったから声をかける。

…なんかアイツのこと、あんま言えなくなつたわね…。

「…ノゾミさんのダンス、すごくキラキラしてるんです。チカさんの歌は、みんなを引き込む力があつて…ふふっ…私にはないから。

私はカルミナを輝かせるためにも、もつともつと練習して…2人と同じ目線で話せるようになりたい。

私は、誰かを輝かせるのが好きなんです。ノゾミさんやチカさんが私の衣装でもつともつと輝いてくれたら…その輝きで、誰かが笑顔になれたら…私は…幸せだったりしちゃうんです！」

誰かのために…か。

あたしは…。

そしてあたしはカルミナのライブの最中、クリステイーナとはぐれシャドウの討伐をしていた。

はぐれシャドウって言うのは陛下の支配からも外れてただ人を襲うだけの魔物に

なつたものらしい。

それをひたすら狩り続ける。

カルミナの歌がかすかに聞こえるけど、それを気にしないようにシャドウを倒す。

「なるほど、これは頭の固い我らが团长殿では対応できぬな。まさか仕えている王が、このような危険な物を野放しにしているなど。想像もしてしまい…まさに、我々にしかできぬ仕事だな」

「そのようね…はあっ!!」

ただただ魔法をぶっ放す。

『私のかわいいキヤル…』

陛下のために！

そして夕方。

はぐれシャドウの討伐を終えた頃にライブはすっかりクライマックスだった。

ツムギは当然いる。

「…なんだ。アンタも輝いてるじゃない」

あたしと違って。

「はあっ…疲れた…あたし…何やってんのかな」

「あたしは…あの方の…ぷりんせすないと…」

あたしは路地で目を覚ました。

どうやら疲れで気絶寸前のように眠たようになっていた。

「キャルちゃん！」

「キャル〜！」

「キャル？」

「どこにいったんだキャル！」

「キャル様あー！」

この声は…全く…しようがないわね。

あたしは体を起こして、その声の方へと向かった

「大声でやめてよ。恥ずかしいじゃない」

「おかえりなさい。キャルちゃん」

誰かのために…。

あたしは…

「ただいま」

そしてその帰った後。

ペコリーヌとユウキとコロ助は夕食の準備中の中、アタシは本を読んでいた。

「…」

「何よミカ、あたしの顔になんかついてるの？」

「なんか疲れてる様に見えるけど」

「さすがにミカにはバレるわよね…。」

ほんと勘が鋭い。

「まあちよつとね。あたしも色々付き合いがあるのよ」

「ふーん…じゃあ」

そしてミカはポケットからあるものを取り出した。

「これって…」

「うん。火星ヤシ。栄養はあるからとりあえず食べて」

なんで火星なのかは知らないけど、ヤシ…つまりデーツをミカからもらう。

そしてそれをあたしは口に運んだ。

「…変わらない味ね」

「まあね」

「でもこういうのもたまには良いわ」

ホツとするような…なんかそんな感じがする。

「なんだあ？お、火星ヤシじゃねえか」

「オルガも食べる？」

オルガもミカから火星ヤシをもらった。

「おう。……んぐっ!？」

だがそのオルガは突然倒れて謎の希望の花とかいうスキルを発動させた。

「デーツ食べただけでなんでそうなるのよ!？」

「あ、オルガハズレ引いた」

「そっかあ…ハズレを引いたから…じゃないわよ！多少苦いだけでかわりないじゃない
！」

「そんだけ俺はミソツカスだぞお…」

「あんま説明になつてないわよ！」

はあっ…やっぱりここは退屈せずに済みそうね…本当に。